

## **Oracle® Business Intelligence**

インストール・ガイド

10g リリース 2 (10.1.2.1) for Microsoft Windows and Solaris  
Operating System (SPARC)

**部品番号 : B25081-01**

2005 年 10 月

Oracle Business Intelligence インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.1.2.1) for Microsoft Windows and Solaris Operating System (SPARC)

部品番号 : B25081-01

原本名 : Oracle Business Intelligence Installation Guide, 10g Release 2 (10.1.2.1) for Microsoft Windows and Solaris Operating System (SPARC)

原本部品番号 : B16030-01

Copyright © 2005 Oracle. All rights reserved.

#### 制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかえる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（*redundancy*）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Retek は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性あります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

---

# 目次

はじめに .....	v
対象読者 .....	vi
ドキュメントのアクセシビリティについて .....	vi
関連ドキュメント .....	vi
表記規則 .....	vi
JGoodies 社の使用許諾契約 .....	vii
サポートおよびサービス .....	vii
1 インストールを開始する前の考慮事項 .....	
1.1 Oracle Business Intelligence の概要 .....	1-2
1.1.1 Oracle Business Intelligence Discoverer Plus .....	1-2
1.1.2 Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer .....	1-2
1.1.3 Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット .....	1-3
1.1.4 Reports Services .....	1-3
1.2 Oracle ホームの考慮事項 .....	1-3
1.2.1 Oracle ホームの考慮事項 .....	1-3
1.2.2 Oracle Business Intelligence の複数インストールの実行 .....	1-4
1.2.3 Oracle Business Intelligence のインストールと Oracle データベース .....	1-4
1.3 インストール前の作業 .....	1-4
1.3.1 全般的なチェックリスト .....	1-4
1.3.2 ロケールの設定 .....	1-4
1.3.3 インストール時の障害支援技術および Java Access Bridge の使用 (Windows のみ) .....	1-5
1.3.4 コンポーネントに固有のインストール前の作業 .....	1-5
1.3.4.1 Oracle Business Intelligence Discoverer Plus のインストール前の作業 .....	1-5
1.3.4.2 Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer のインストール前の作業 .....	1-5
1.3.4.3 Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール前の作業 .....	1-5
1.3.4.4 Reports Services のインストール前の作業 .....	1-5
1.3.5 インストール時に必要な情報 .....	1-5
1.4 インストーラの概要 .....	1-6
1.4.1 インストーラが使用するディレクトリ .....	1-6
1.4.1.1 インストーラ・インベントリ・ディレクトリ .....	1-6
1.4.2 インストーラによる前提条件チェック .....	1-7

## 2 Oracle Business Intelligence の要件

2.1	ハードウェア要件 .....	2-2
2.1.1	Windows での最小ハードウェア要件 .....	2-2
2.1.2	Solaris での最小ハードウェア要件 .....	2-2
2.2	オペレーティング・システム要件 .....	2-3
2.2.1	Windows でのオペレーティング・システム要件 .....	2-3
2.2.2	Solaris でのオペレーティング・システム要件 .....	2-4
2.3	データベース要件 .....	2-5
2.3.1	最新の OLAP パッチのダウンロード .....	2-5
2.3.2	OPTIMIZER_FEATURES_ENABLE パラメータのデフォルトの設定の受入れ .....	2-6
2.4	ブラウザ要件 .....	2-6
2.5	その他のソフトウェア要件 .....	2-6

## 3 Reports Services の詳細な要件

3.1	Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定について .....	3-2
3.2	CORBA 通信ポート番号を指定するための新しい要素 .....	3-2
3.3	オペレーティング・システム・パッケージ (Solaris) .....	3-2
3.4	カーネル・パラメータ (Solaris) .....	3-3
3.5	Windows システム・ファイル (wsf.exe) (Microsoft Windows) .....	3-5
3.6	ポート (Microsoft Windows および Solaris) .....	3-6
3.6.1	エフェメラル・ポートについて .....	3-6
3.6.2	ポートが使用中かどうかの確認 .....	3-8
3.6.3	デフォルトのポート番号の使用 .....	3-8
3.6.4	カスタム・ポート番号の使用 (静的ポート機能) .....	3-9
3.6.4.1	staticports.ini ファイルのフォーマット .....	3-9
3.6.4.2	エラーが原因でデフォルトのポートが指定したポートにかわって 使用されるケース .....	3-11
3.6.4.3	Oracle HTTP Server および OracleAS Web Cache のポート .....	3-12
3.6.4.4	例 .....	3-13
3.6.4.4.1	OracleAS Web Cache をフロントエンドとして、Oracle HTTP Server が ポート 80 と 443 を使用するよう構成 .....	3-13
3.6.4.4.2	OracleAS Web Cache なしで、Oracle HTTP Server がポート 80 と 443 を 使用するよう構成 .....	3-13
3.7	オペレーティング・システム・グループ (Solaris) .....	3-14
3.8	Solaris のオペレーティング・システム・ユーザー .....	3-15
3.9	Microsoft Windows のオペレーティング・システム・ユーザー .....	3-16
3.10	Solaris の環境変数 .....	3-17
3.10.1	環境変数に関するヒント .....	3-17
3.10.2	ORACLE_HOME および ORACLE_SID .....	3-17
3.10.3	PATH、CLASSPATH、および LD_LIBRARY_PATH .....	3-17
3.10.4	DISPLAY .....	3-18
3.10.5	TMP .....	3-18
3.10.6	TNS_ADMIN .....	3-18
3.10.7	REPORTS_DEFAULT_DISPLAY .....	3-19
3.11	Microsoft Windows の環境変数 .....	3-19
3.11.1	環境変数の設定 (Windows) .....	3-20
3.11.2	ORACLE_HOME および ORACLE_SID .....	3-20
3.11.3	PATH および CLASSPATH .....	3-20
3.11.4	TEMP .....	3-20

3.12	/etc/hosts ファイル (Solaris) と %WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル (Windows) .....	3-20
3.13	ネットワーク関連トピック (Microsoft Windows および Solaris) .....	3-21
3.13.1	DHCP コンピュータへのインストール .....	3-21
3.13.2	マルチホーム (マルチ IP) コンピュータへのインストール .....	3-22
3.13.3	複数の別名を持つコンピュータへのインストール .....	3-23
3.13.4	ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール .....	3-23
3.13.5	後でネットワークから切断する静的 IP コンピュータへのインストール .....	3-24
3.13.6	ループバック・アダプタのインストール .....	3-24
3.13.6.1	ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかの チェック .....	3-25
3.13.6.2	ループバック・アダプタのインストール (Windows 2000) .....	3-25
3.13.6.3	ループバック・アダプタのインストール (Windows 2003/Windows XP) .....	3-28
3.13.6.4	ループバック・アダプタの削除 (Windows 2000/Windows 2003/ Windows XP) .....	3-30
3.13.7	ハード・ドライブへの CD-ROM または DVD-ROM のコピー、 およびハード・ドライブからのインストール .....	3-30
3.13.8	リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール .....	3-32
3.13.9	リモート・コントロール・ソフトウェアによるリモート・コンピュータへの インストール .....	3-34
3.13.10	NFS がマウントされたストレージへのインストール .....	3-36
3.13.11	1 つのインストールからの複数のインスタンスの実行 .....	3-36
3.13.12	NIS および NIS+ のサポート .....	3-36
3.13.13	Java 用フォント・パッケージ .....	3-36
3.13.14	複数のネットワーク・カードを持つコンピュータへのインストール .....	3-36
3.14	インストーラによって実行される前提条件チェック (Microsoft Windows および Solaris) .....	3-37

## 4 Oracle Business Intelligence のインストール

4.1	Windows での Oracle Universal Installer の起動 .....	4-2
4.1.1	Windows システム・ファイルのインストール .....	4-2
4.2	Solaris でのインストーラの起動 .....	4-3
4.3	Oracle Business Intelligence のインストール .....	4-3
4.4	インストール後の作業 .....	4-6
4.4.1	全般的なチェックリスト .....	4-6
4.4.1.1	更新 .....	4-6
4.4.1.2	TNS 名 .....	4-6
4.4.1.3	ポート番号 .....	4-7
4.4.1.4	Oracle Application Server Infrastructure との関連付け .....	4-7
4.4.1.5	インストール後に Oracle Business Intelligence コンポーネントで障害支援技術と Java Access Bridge を使用する場合 (Windows のみ) .....	4-7
4.4.2	すべての Discoverer コンポーネントのインストール後の作業 .....	4-7
4.4.2.1	マルチディメンション分析の準備方法 .....	4-8
4.4.2.1.1	Discoverer とともに使用するための Oracle9i Database リリース 2 の 準備方法 .....	4-8
4.4.2.1.2	Discoverer とともに使用するための Oracle Database 10g Enterprise Edition の 準備方法 .....	4-9
4.4.2.1.3	既存の Discoverer カタログを Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 に移行する方法 .....	4-10
4.4.2.2	リレーショナル分析の準備方法 .....	4-10

4.4.3	コンポーネント固有のインストール後の作業 .....	4-11
4.4.3.1	Discoverer のインストール後の作業 .....	4-11
4.4.3.1.1	分析の準備 .....	4-11
4.4.3.2	Discoverer Viewer のインストール後の作業 .....	4-11
4.4.3.2.1	分析の準備 .....	4-11
4.4.3.2.2	ワークブックの作成 .....	4-11
4.4.3.2.3	SMTP 構成 .....	4-11
4.4.3.3	Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットの インストール後の作業 .....	4-11
4.4.3.3.1	分析の準備 .....	4-11
4.4.3.3.2	リリース 10.1.2 の Oracle Application Server Infrastructure との関連付け .....	4-12
4.4.3.3.3	Discoverer Portlet Provider の登録 .....	4-12
4.5	コンポーネントの起動 .....	4-12
4.5.1	Discoverer Plus の起動 .....	4-12
4.5.2	Discoverer Viewer の起動 .....	4-12
4.5.3	Discoverer Portlet Provider の起動 .....	4-13
4.6	サンプルの使用 .....	4-13
4.7	ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス .....	4-13
4.7.1	インストール後に Discoverer Plus の翻訳済ヘルプ・ファイルをインストール .....	4-14
4.7.2	インストール後に必要な追加のフォントをインストール .....	4-15
4.8	次の作業 .....	4-15

## 5 Oracle Business Intelligence の削除と再インストール

5.1	Oracle Business Intelligence の削除 .....	5-2
5.2	Oracle Business Intelligence の再インストール .....	5-3

### A トラブルシューティング

A.1	始める前に .....	A-2
A.1.1	ハードウェアの要件とインストール前の要件の確認 .....	A-2
A.1.2	リリース・ノートの確認 .....	A-2
A.2	インストールに関するトラブルシューティング .....	A-2
A.3	Discoverer の診断およびロギング・ツールの使用 .....	A-3

### B Java Access Bridge のインストール (Windows のみ)

B.1	Java Access Bridge の概要 .....	B-2
B.2	インストール済の Oracle コンポーネントで使用する Java Access Bridge の設定 .....	B-2
B.2.1	Java Access Bridge のインストール .....	B-2
B.2.2	Java Access Bridge を使用する Oracle コンポーネントの構成 .....	B-3
B.2.2.1	Windows 2000、Windows XP または Windows Server 2003 の場合の構成 .....	B-3

### C 非対話型インストールとサイレント・インストール

C.1	非対話型インストール .....	C-2
C.2	サイレント・インストール .....	C-2
C.3	インストール前 .....	C-3
C.3.1	Solaris でのインストール前作業 .....	C-3
C.3.2	Windows でのインストール前作業 .....	C-3
C.4	レスポンス・ファイルの作成 .....	C-3
C.4.1	レスポンス・ファイルの例 .....	C-4

C.5	インストールの開始 .....	C-5
C.6	インストール後 .....	C-5
C.7	サイレント・モードを使用した削除 .....	C-6

## 索引





---

# はじめに

このマニュアルでは、Oracle Application Server に付属しているスタンドアロン Oracle Business Intelligence CD-ROM から Oracle Business Intelligence のコンポーネントをインストールする方法について説明します。

## 対象読者

このマニュアルは、スタンドアロン Oracle Business Intelligence CD-ROM/DVD から Oracle Business Intelligence をインストールする担当ユーザーを対象としています。したがって、システム管理業務を問題なく遂行できるユーザーを想定しています。

## ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

### ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

### 外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

## 関連ドキュメント

このマニュアルで参照されているドキュメントおよび Oracle Business Intelligence に関するその他の情報（ホワイトペーパー、ベスト・プラクティス、最新版のドキュメント、その他の関連ドキュメントなど）は、OTN-J（Oracle Technology Network Japan）から入手できます。URL は次のとおりです。

<http://www.oracle.com/technology/>

## 表記規則

本文では、次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連するグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、パラグラフ内のコマンド、URL、例に記載されているコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。
<>	山カッコは、ユーザー指定の名前または値を囲みます。
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。
メニュー名   コマンド	縦線は、メニューの選択肢の順序を表します。たとえば、メニューとそのメニューのコマンドを示します。

## JGoodies 社の使用許諾契約

Oracle Business Intelligence には、JGoodies 社のソフトウェアが組み込まれています。このソフトウェアの使用許諾契約は次のとおりです。

Copyright© 2003 JGoodies Karsten Lentzsch. All rights reserved.

Redistribution and use in source and binary forms, with or without modification, are permitted provided that the following conditions are met:

- Redistributions of source code must retain the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer.
- Redistributions in binary form must reproduce the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer in the documentation and/or other materials provided with the distribution.
- Neither the name of JGoodies nor the names of its contributors may be used to endorse or promote products derived from this software without specific prior written permission.

THIS SOFTWARE IS PROVIDED BY THE COPYRIGHT HOLDERS AND CONTRIBUTORS "AS IS" AND ANY EXPRESS OR IMPLIED WARRANTIES, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE ARE DISCLAIMED. IN NO EVENT SHALL THE COPYRIGHT OWNER OR CONTRIBUTORS BE LIABLE FOR ANY DIRECT, INDIRECT, INCIDENTAL, SPECIAL, EXEMPLARY, OR CONSEQUENTIAL DAMAGES (INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, PROCUREMENT OF SUBSTITUTE GOODS OR SERVICES; LOSS OF USE, DATA, OR PROFITS; OR BUSINESS INTERRUPTION) HOWEVER CAUSED AND ON ANY THEORY OF LIABILITY, WHETHER IN CONTRACT, STRICT LIABILITY, OR TORT (INCLUDING NEGLIGENCE OR OTHERWISE) ARISING IN ANY WAY OUT OF THE USE OF THIS SOFTWARE, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGE.

## サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

### オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

### 製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

### 研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

### その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

---

**注意：** ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

---



---

# インストールを開始する前の考慮事項

この章では、Oracle Business Intelligence について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 第 1.1 項「Oracle Business Intelligence の概要」
- 第 1.2 項「Oracle ホームの考慮事項」
- 第 1.3 項「インストール前の作業」
- 第 1.4 項「インストーラの概要」

## 1.1 Oracle Business Intelligence の概要

Oracle Business Intelligence は、次のコンポーネントで構成される、統合化されたビジネス・インテリジェンス・ソリューションです。

- Oracle Business Intelligence Discoverer Plus
- Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer
- Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット
- Oracle Application Server Reports Services

Oracle Business Intelligence の各コンポーネントは、Oracle Application Server Control を使用して管理されます。

Oracle Business Intelligence のインストールには次のものが含まれます。

- Distributed Configuration Management
- Oracle Business Intelligence Discoverer
- Oracle Application Server Containers for J2EE
- Oracle Application Server Control
- Oracle Application Server Reports Services
- Oracle Application Server Web Cache
- Oracle HTTP Server
- Oracle Process Manager and Notification Server

Oracle Developer Suite には、ビジネス・インテリジェンス・システムを管理および開発するための補助的な製品（総称して Oracle Business Intelligence Tools と呼ばれる）が付属しています。

### 1.1.1 Oracle Business Intelligence Discoverer Plus

Discoverer Plus は、Oracle のビジネス・ユーザーを対象とした Web ベースのレポート作成ツールです。このツールは、効率的で簡単に使用できるレポート作成ツールが必要なレポート作成者のために設計されました。

Discoverer Plus には、対話型で効率的なレポート・レイアウト機能やフォーマット機能が用意されており、付加価値分析を介してビジネスの実態を把握できます。1回のマウス・クリックで、レポートに合計とパーセンテージを追加したり、傾向を早急に見きわめるためのデータ主導のストップライト・フォーマットを追加できます。また、Oracle データベースにすでに備えられている計算機能を利用して、高度な算術および統計分析を追加できます。Discoverer Plus では、これらの機能が組み込み計算ウィザードを使用することで簡単に実行されます。

Discoverer Plus OLAP および Discoverer Plus Relational では、OLAP およびリレーショナル・データソースの両方に対して、同じように簡単に使用できるレポート作成環境をそれぞれ提供しています。

Discoverer Plus の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

### 1.1.2 Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer

Discoverer Viewer は、ビジネス・ユーザーを考慮して特別に設計されています。簡単に使用できる単純な HTML ユーザー・インタフェースによって、ユーザーは標準的な Web ブラウザからレポートにアクセスできます。そのために他のソフトウェアをデスクトップ上にインストールする必要はありません。

Discoverer Viewer を使用すると、Discoverer Plus および Discoverer Desktop で作成したワークシートのデータを分析できます。（たとえば、アイテムを再配置することで）ワークシートをパーソナライズし、その変更内容を保存できます。

Discoverer Viewer の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

### 1.1.3 Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット

Discoverer Portlet Provider によって、ユーザーは Discoverer の既存のレポートを OracleAS Portal に公開できるため、レポートおよび業績の指標を追跡するセキュアでパーソナライズされたダッシュボードを簡単に作成できます。

Discoverer Portlet Provider によって、Portal ユーザーは次の Discoverer ポートレットを公開できます。

- ワークシートのリスト・ポートレット
- ワークシート・ポートレット
- ゲージ・ポートレット

Portal ユーザーは、(たとえば、ストップライト・フォーマットを追加することで) 各自の Discoverer ポートレットをパーソナライズし、その変更内容を保存できます。

**注意:** Discoverer Portlet Provider を使用するには、インストールの後で Discoverer システムを Oracle Application Server のメタデータ・リポジトリ (リリース 10.1.2) に関連付ける必要があります (詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照)。

### 1.1.4 Reports Services

Oracle Application Server Reports Services は、品質の高いエンタープライズ・レポートを作成および公開するための、使いやすく、スケーラブルで、管理しやすいソリューションです。Oracle Reports を使用すると、複数のソースから生成されたデータを様々な形式 (ペーパー・レイアウト、Web、データ交換形式など) で公開できます。これにより、データを柔軟に提示できます。

**注意:** Reports Services には、Report Builder は含まれません。

Reports Services の要件の詳細は、[第3章「Reports Services の詳細な要件」](#)を参照してください。

## 1.2 Oracle ホームの考慮事項

この項では、単一の Oracle ホーム・ディレクトリでの Oracle 製品の共存について説明し、単一のコンピュータに複数の Oracle 製品をインストールする際のガイドラインを提供します。

### 1.2.1 Oracle ホームの考慮事項

Oracle ホームは、Oracle ソフトウェアをインストールする最上位ディレクトリです。Oracle Business Intelligence は次のディレクトリにインストールできます。

- 新しい Oracle ホーム
- Oracle Business Intelligence Tools をインストールしたときに作成された既存の Oracle ホーム

Oracle Business Intelligence 10g (10.1.2) では、同じ Oracle ホームを次の製品と共有できません。

- 以前のバージョンの Oracle Business Intelligence コンポーネントまたは Oracle Developer Suite
- Oracle データベース・インストール
- Oracle Application Server の Forms Service および Reports Service の 10g スタンドアロン・サーバー・インスタンス

## 1.2.2 Oracle Business Intelligence の複数インストールの実行

Oracle Business Intelligence 10g (10.1.2) の複数のインスタンスを同じコンピュータにインストールする場合は、次のガイドラインが適用されます。このガイドラインは、すでに Oracle Application Server がインストールされているコンピュータに Oracle Business Intelligence 10g (10.1.2) をインストールする場合にも適用されます。

- すべてのインストールを処理できる十分なディスク領域が確保されていることを確認します。ディスク領域の要件を判断するには、[第 2.1 項「ハードウェア要件」](#)を参照してください。
- 後続のインスタンスを前のインスタンスとは異なる Oracle ホーム・ディレクトリにインストールします。

## 1.2.3 Oracle Business Intelligence のインストールと Oracle データベース

Oracle Business Intelligence は、Oracle データベースと同じコンピュータにインストールできます（必須ではありません）。Oracle データベースがすでにインストールされている（または、インストール予定の）コンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする場合は、次の点に注意してください。

- 両方のインストールを処理できる十分なディスク領域が確保されていることを確認します。該当する Oracle データベース・インストレーション・ガイドおよびこのマニュアルの[第 2.1 項「ハードウェア要件」](#)を参照し、必要な合計ディスク領域を判断してください。
- Oracle データベースとは異なる Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle Business Intelligence をインストールします。

**注意：**Oracle Business Intelligence と Oracle データベースは、Oracle ホームを共有できません。

## 1.3 インストール前の作業

Oracle Business Intelligence をインストールする前に、Oracle Business Intelligence のリリース・ノートを確認してください。

Oracle Business Intelligence のインストール前の作業は、次のように分類されます。

- [第 1.3.1 項「全般的なチェックリスト」](#)
- [第 1.3.2 項「ロケールの設定」](#)
- [第 1.3.3 項「インストール時の障害支援技術および Java Access Bridge の使用（Windows のみ）」](#)
- [第 1.3.4 項「コンポーネントに固有のインストール前の作業」](#)
- [第 1.3.5 項「インストール時に必要な情報」](#)

### 1.3.1 全般的なチェックリスト

Windows 2000、Windows XP Professional または Windows 2003 の場合、使用しているコンピュータには、必ずローカル管理者グループのメンバーでログインしてください。

すべての Oracle サービスまたは Oracle プロセスを停止し、動作中の他のアプリケーションをすべて閉じます。

### 1.3.2 ロケールの設定

インストーラのユーザー・インタフェース言語は、動作環境ロケールに基づいた Java Virtual Machine (JVM) ロケールの設定に基づいています。特定のロケールでインストーラを実行するには、インストーラを起動する前に動作環境のロケールを設定します。



### 1.3.3 インストール時の障害支援技術および Java Access Bridge の使用 (Windows のみ)

スクリーン・リーダーなどの障害支援技術を使用して Java ベースのアプリケーションおよびアプレットで作業する場合は、Oracle Business Intelligence のインストールを開始する前に、access\_setup.bat を実行して障害支援技術プログラムを再開します。詳細は、[第 B.2.1 項「Java Access Bridge のインストール」](#)を参照してください。

### 1.3.4 コンポーネントに固有のインストール前の作業

ここに記載されていないコンポーネントには、コンポーネントに固有のインストール前の作業はありません。

- [第 1.3.4.1 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Plus のインストール前の作業」](#)
- [第 1.3.4.2 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer のインストール前の作業」](#)
- [第 1.3.4.3 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール前の作業」](#)

#### 1.3.4.1 Oracle Business Intelligence Discoverer Plus のインストール前の作業

なし

#### 1.3.4.2 Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer のインストール前の作業

なし

#### 1.3.4.3 Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール前の作業

なし

#### 1.3.4.4 Reports Services のインストール前の作業

なし

### 1.3.5 インストール時に必要な情報

インストール・プロセスを構成する画面では、手順のガイドが提供されます。動作環境および選択したインストール・オプションに従って、次の表に記載されている情報が必要です。

表 1-1 インストール時に必要な情報

項目	例
Oracle ホームの名前	BIHome1
Oracle ホームのパス	C:\oracle\BIHome_1
インスタンス名	BI_admin
インスタンス・パスワード	admin1

## 1.4 インストーラの概要

Oracle Business Intelligence では、Oracle Universal Installer (OUI) を使用してコンポーネントをインストールし、環境変数を構成します。インストーラは、インストール・プロセスの各手順のガイドを提供します。

インストーラでは、異なる動作環境ごとにインストール・オプションの選択が自動化され、環境変数や構成設定を新しく設定したり、事前定義済みの環境変数や構成設定を検出できます。また、既存の製品の削除にもインストーラを使用します。

### 1.4.1 インストーラが使用するディレクトリ

インストーラは、次の表に記載されているディレクトリにファイルを書き込みます。

表 1-2 インストーラが使用するディレクトリ

ディレクトリ	要件
Oracle ホーム・ディレクトリ	Oracle Business Intelligence ファイルが格納されます。このディレクトリは、Oracle Business Intelligence をインストールするときに指定します。詳細は、 <a href="#">第 1.2 項「Oracle ホームの考慮事項」</a> を参照してください。
インベントリ・ディレクトリ	このディレクトリは、コンピュータにインストールされている Oracle 製品を継続して記録するために使用されます。詳細は、 <a href="#">第 1.4.1.1 項「インストーラ・インベントリ・ディレクトリ」</a> を参照してください。
一時ディレクトリ (Windows のみ)	一時ディレクトリは、インストール時にのみ必要なファイルが書き込まれます。システム環境変数 %TEMP% に指定されたディレクトリが、一時ディレクトリとして使用されます。

#### 1.4.1.1 インストーラ・インベントリ・ディレクトリ

インベントリ・ディレクトリは、使用しているコンピュータでインストーラが初めて実行されるときに作成されます。インベントリ・ディレクトリには、他のインストール情報に加え、インストーラでインストールした製品の記録が保存されます。使用しているコンピュータに Oracle 製品がすでにインストールされている場合、インベントリ・ディレクトリはすでに存在しています。たとえば、Windows の場合、Oracle インベントリは `c:\Program Files\Oracle\Inventory` にあります。

インベントリ・ディレクトリについては、次のことに注意してください。

- インベントリ・ディレクトリとその内容を、削除または変更しないでください。削除または変更すると、使用しているコンピュータにインストールした製品をインストーラが検出できなくなる場合があります。
- 使用しているコンピュータに初めて Oracle 製品をインストールすると、インストーラによってインベントリ・ディレクトリが次のように自動的に作成されます。
  - Windows の場合、インベントリ・ディレクトリは、`system_default_drive:\Program Files\Oracle\Inventory` として作成されます。通常、`system_default_drive` の値は C: で、Windows Registry に設定されます。
  - Solaris の場合、インベントリ・ディレクトリは、ルート・ディレクトリに `/oraInventory` として作成されます。

Oracle をインストールするたびに、インベントリ・ディレクトリの `/logs` サブ・ディレクトリにあるファイルにログが書き込まれます。ログ・ファイルには、次のフォーマットで名前が割り当てられます。

`installActions year- date_ time.log`

## 1.4.2 インストーラによる前提条件チェック

インストーラは、インストールを開始する前に、使用しているコンピュータに対して前提条件を自動的にチェックします。次の表に、インストーラで実行される前提条件チェックを示します。

表 1-3 インストーラで実行される前提条件チェック

前提条件チェック	参照先
コンピュータで少なくとも 256 色を表示できることの確認	<a href="#">第 2.1 項「ハードウェア要件」</a>
最小 CPU スピードの確認	<a href="#">第 2.1 項「ハードウェア要件」</a>
オペレーティング・システム要件の確認	<a href="#">第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」</a>



---

## Oracle Business Intelligence の要件

Oracle Business Intelligence をインストールする前に、使用しているコンピュータが次の各項で説明している要件を満たしていることを確認してください。

- [第 2.1 項「ハードウェア要件」](#)
- [第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」](#)
- [第 2.3 項「データベース要件」](#)
- [第 2.4 項「ブラウザ要件」](#)
- [第 2.5 項「その他のソフトウェア要件」](#)

Reports Services のインストールの詳細は、[第 3 章「Reports Services の詳細な要件」](#)を参照してください。

## 2.1 ハードウェア要件

Oracle Business Intelligence には、次の最小ハードウェア要件があります。

- 第 2.1.1 項「Windows での最小ハードウェア要件」
- 第 2.1.2 項「Solaris での最小ハードウェア要件」

ハードウェア要件の最新情報は、OracleMetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。

### 2.1.1 Windows での最小ハードウェア要件

中間層をホスティングするマシンでの Windows の Oracle Business Intelligence には、次のハードウェア要件があります。

表 2-1 Windows での最小ハードウェア要件

ハードウェア項目	最小要件
CPU	300MHz Intel Pentium プロセッサ (推奨: 500MHz)
メモリー	1GB
ディスク領域	1GB
TEMP ディレクトリ領域	300MB
仮想メモリー	1535MB
モニター	256 色表示

クライアント・マシンで Discoverer Plus を実行するユーザーには、次の要件があります。

- Oracle Jar キャッシュのユーザー個人プロファイル領域として、最低 30MB が必要です。
- Java Virtual Machine をインストールする場合は、次の要件が追加されます。
  - クライアント・マシンに対する管理権限
  - 最低 25 ～ 50MB の使用可能ディスク領域

ハードウェア要件の最新情報は、OracleMetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。

### 2.1.2 Solaris での最小ハードウェア要件

中間層をホスティングするマシンでの Solaris の Oracle Business Intelligence には、次のハードウェア要件があります。

表 2-2 Solaris での最小ハードウェア要件

ハードウェア項目	最小要件
プロセッサ・タイプ	SPARC v8 アーキテクチャ以上のプロセッサ
プロセッサ・スピード	300MHz 以上 (推奨: 450MHz)、マルチ CPU コンピュータを推奨
メモリー	1GB
ディスク領域	1.6GB
/tmp ディレクトリ領域	250MB
スワップ領域	640MB
仮想メモリー	1535MB

表 2-2 Solaris での最小ハードウェア要件（続き）

ハードウェア項目	最小要件
モニター	256 色表示

ハードウェア要件の最新情報は、OracleMetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。

## 2.2 オペレーティング・システム要件

Oracle Business Intelligence には、次のオペレーティング・システム要件があります。

- 第 2.2.1 項「Windows でのオペレーティング・システム要件」
- 第 2.2.2 項「Solaris でのオペレーティング・システム要件」

オペレーティング・システム要件の最新情報は、OracleMetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。

Oracle Business Intelligence は、次のコンピュータにインストールできます。

- ネットワーク上にないコンピュータ。この場合は、静的 IP アドレスまたはループバック IP アドレスを使用して、コンピュータを構成する必要があります。コンピュータのホスト名が静的 IP アドレスまたはループバック IP アドレスに変換されるように、コンピュータを構成します。
- 動的ホスト構成プロトコル（Dynamic Host Configuration Protocol: DHCP）ネットワーク上のコンピュータ。この場合は、ループバック構成を使用する必要があります。コンピュータのホスト名がループバック IP アドレスに変換されるように、コンピュータを構成します。

**注意：**ネットワーク上にないマシンまたは DHCP ネットワーク上にないマシンにインストールした場合は、そのマシンでのみ Discoverer を使用できます。つまり、他のマシンからは Discoverer に接続できません。

### 2.2.1 Windows でのオペレーティング・システム要件

中間層をホスティングするマシンでの Windows の Oracle Business Intelligence には、次のオペレーティング・システム要件があります。

表 2-3 Windows 中間層でのオペレーティング・システム要件

オペレーティング・システム	追加要件
Microsoft Windows 2000	Service Pack 4 以上
Microsoft Windows 2003 (32 ビット)	なし

クライアント・マシンでの Windows の Oracle Business Intelligence には、次のオペレーティング・システム要件があります。

表 2-4 Windows クライアントでのオペレーティング・システム要件

オペレーティング・システム	追加要件
Microsoft Windows 2000	Service Pack 4 以上

表 2-4 Windows クライアントでのオペレーティング・システム要件（続き）

オペレーティング・システム	追加要件
Microsoft Windows XP Professional Edition	なし
Microsoft Windows 2003（32 ビット）	なし

オペレーティング・システム要件の最新情報は、Oracle *MetaLink* サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。

## 2.2.2 Solaris でのオペレーティング・システム要件

中間層をホスティングするマシンでの Solaris の Oracle Business Intelligence には、次のオペレーティング・システム要件があります。

表 2-5 Solaris 中間層でのオペレーティング・システム要件

オペレーティング・システム	必要なパッチ
Solaris 8	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 108652-82 以上 : X11 6.4.1: Xsun パッチ</li> <li>■ 108921-21 以上 : CDE 1.4: dtwm パッチ</li> <li>■ 108940-62 以上 : Motif 1.2.7 および 2.1.1: ランタイム・ライブラリ・パッチ</li> <li>■ 108773-18 以上 : IIIM および X input および output メソッド・パッチ</li> <li>■ 111310-01 以上 : /usr/lib/libdhcagent.so.1 パッチ</li> <li>■ 109147-28 以上 : リンカー・パッチ</li> <li>■ 111308-04 以上 : /usr/lib/libmtmalloc.so.1 パッチ</li> <li>■ 112438-03 以上 : /kernel/drv/random パッチ</li> <li>■ 108434-17 以上 : C++ 用 32 ビット共有ライブラリ・パッチ</li> <li>■ 108435-17 以上 : C++ 用 64 ビット共有ライブラリ・パッチ</li> <li>■ 111111-04 以上 : /usr/bin/nawk パッチ</li> <li>■ 112396-02 以上 : /usr/bin/fgrep パッチ</li> <li>■ 110386-03 以上 : RBAC 機能パッチ</li> <li>■ 111023-03 以上 : /kernel/fs/mntfs および /kernel/fs/sparcv9/mntfs パッチ</li> <li>■ 111317-05 以上 : /sbin/init および /usr/sbin/init パッチ</li> <li>■ 113648-03 以上 : /usr/sbin/mount パッチ</li> <li>■ 115827-01 以上 : /sbin/sulogin および /sbin/netstrategy パッチ</li> <li>■ 116602-01 以上 : /sbin/uadmin および /sbin/hostconfig パッチ</li> <li>■ 108987-13 以上 : patchadd および patchrm パッチ</li> <li>■ 108528-29 以上 : カーネル更新パッチ</li> <li>■ 108989-02 以上 : /usr/kernel/sys/acctctl および /usr/kernel/sys/exacctsys パッチ</li> <li>■ 108993-36 以上 : LDAP2 client、libc、libthread および libnsl ライブラリ・パッチ</li> <li>■ 109326-14 以上 : libresolv.so.2 および in.named パッチ</li> <li>■ 110615-11 以上 : sendmail パッチ</li> </ul>



表 2-5 Solaris 中間層でのオペレーティング・システム要件（続き）

オペレーティング・システム	必要なパッチ
Solaris 9	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 113096-03 以上 : X11 6.6.1: OWconfig パッチ</li> <li>■ 112785-35 以上 : X11 6.6.1: Xsun パッチ</li> </ul>

前述のパッチは、このドキュメントの公開時における最新情報ですが、パッチ一覧は必要に応じて Sun 社によって更新されます。最新のパッチ一覧は、Sun 社の Web サイト (<http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=patches/J2SE>) を参照してください。

オペレーティング・システム要件の最新情報は、OracleMetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。

## 2.3 データベース要件

Oracle Business Intelligence 10g リリース 2 (10.1.2.1) は、次のデータベース・バージョンでサポートされています。

- Oracle9i Database リリース 2 (9.2.0.6 以上)
- Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 (10.1.0.4 以上)
- Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 (10.2.0.1 以上)、動作保証対象となる予定

サポートされているバージョンの最新情報は、<http://metalink.oracle.com> のアプリケーションの動作保証に関する項で確認できます。

### 2.3.1 最新の OLAP パッチのダウンロード

マルチディメンション・データソースをクエリーするときは、特定のデータベース・リリースとパッチのみがサポートされます。最新の OLAP パッチを使用していることを確認するには、次の手順を使用します。

最新の OLAP パッチを入手するには、次の手順を実行します。

1. OracleMetalink (<http://metalink.oracle.com>) にログインします。
2. 「Patches」をクリックします。
3. 「Advanced Search」をクリックします。
4. 「Advanced Search」画面で、各フィールドを次のように入力します。
  - **Product or Product Family:** 「Search」アイコンをクリックして、「Search In」フィールドで「Database」と「Tools」を選択します。「View All」をクリックします。表示されるリストから、「Oracle OLAP」をクリックします。
  - **Release:** ドロップダウン リストから適切なリリース番号を選択します。
  - **Patch Type:** 「Any」を選択します。
  - **Platform or Language:** サイト用のプラットフォームを選択します。
  - 残りのフィールドは空白のままにします。

「Go」をクリックするとパッチのリストが表示されます。パッチ名に OLAP が付いているのが OLAP パッチです。

## 2.3.2 OPTIMIZER\_FEATURES\_ENABLE パラメータのデフォルトの設定の受入れ

Oracle データベースを最近アップグレードした場合は、OPTIMIZER\_FEATURES\_ENABLE 初期化パラメータを、以前のリリースのオプティマイザの動作のメンテナンスが可能な値に設定している場合があります。

OracleBI Discoverer Plus OLAP では、最適なパフォーマンスを得るために、最新のデータベース機能を利用しています。OracleBI Discoverer Plus OLAP では、OPTIMIZER\_FEATURES\_ENABLE パラメータを、それぞれのデータベース・リリースのデフォルト値のままにする必要があります（デフォルト値は、9.2.0 など、データベースのリリース番号）。設定を変更すると、予期しない動作を引き起こす場合があります。

OPTIMIZER\_FEATURES\_ENABLE パラメータを明示的に以前のリリースに設定しないでください。実行計画やクエリーのパフォーマンスの問題は、ケース・バイ・ケースで対応してください。

## 2.4 ブラウザ要件

クライアント・マシンでの Oracle Business Intelligence には、次のブラウザ要件があります。

表 2-6 ブラウザ要件

項目	要件
Microsoft Internet Explorer	5.5、6.0 およびそれ以上
Netscape	7.1、7.2
Mozilla	1.5 以上
Safari	1.3 以上

サポートされるブラウザの最新情報は、OracleMetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。

## 2.5 その他のソフトウェア要件

Oracle Business Intelligence には、前述されている以外にも次のソフトウェア要件があります。

表 2-7 その他の要件

項目	要件
Discoverer Viewer	クライアント・マシンで Discoverer Viewer を実行するには、ブラウザで JavaScript および Cookie が有効になっている必要があります。
Microsoft Excel	Discoverer Plus Relational を使用して Microsoft Excel にエクスポートするには、Excel 97（またはそれ以上）が必要です。ワークシートを Microsoft Excel の Web クエリー・フォーマットにエクスポートする場合は、Excel 2000（またはそれ以上）が必要です。  Discoverer Plus OLAP を使用して Microsoft Excel にエクスポートするには、Excel 2000（またはそれ以上）が必要です。
JRE	Discoverer Plus を実行するには、次の JRE のいずれか 1 つを使用する必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Sun Java Plug-in 1.4.2_06（推奨）</li> <li>■ Oracle JInitiator 1.3.1.17</li> </ul>

---

## Reports Services の詳細な要件

Oracle Business Intelligence をインストールする前に、使用しているコンピュータが、この章で説明する Reports Services の要件を満たしていることを確認してください。

この章は次の項で構成されています。

- 第 3.1 項「Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定について」
- 第 3.2 項「CORBA 通信用ポート番号を指定するための新しい要素」
- 第 3.3 項「オペレーティング・システム・パッケージ (Solaris)」
- 第 3.4 項「カーネル・パラメータ (Solaris)」
- 第 3.5 項「Windows システム・ファイル (wsf.exe) (Microsoft Windows)」
- 第 3.6 項「ポート (Microsoft Windows および Solaris)」
- 第 3.7 項「オペレーティング・システム・グループ (Solaris)」
- 第 3.8 項「Solaris のオペレーティング・システム・ユーザー」
- 第 3.9 項「Microsoft Windows のオペレーティング・システム・ユーザー」
- 第 3.10 項「Solaris の環境変数」
- 第 3.11 項「Microsoft Windows の環境変数」
- 第 3.12 項「/etc/hosts ファイル (Solaris) と %WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル (Windows)」
- 第 3.13 項「ネットワーク関連トピック (Microsoft Windows および Solaris)」
- 第 3.14 項「インストーラによって実行される前提条件チェック (Microsoft Windows および Solaris)」

## 3.1 Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定について

インストール中に、「送信メール・サーバー情報の指定」画面が表示されます。Reports Services で使用される送信メール（SMTP）サーバーを入力します。

例: smtp.oracle.com

---

---

**注意：** このフィールドはオプションです。ただし、メール・サーバー情報を構成していないと、レポートを電子メールで配信できません。送信メール・サーバー情報を指定する作業の詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

---

---

## 3.2 CORBA 通信用ポート番号を指定するための新しい要素

Oracle Reports 10g リリース 2 (10.1.2) では、サーバー構成ファイルに ORBPorts という要素が導入されました。これによって、CORBA を介した通信で Reports Server とエンジンが使用するポート番号を明示的に指定できます。ポートは、範囲で指定することも、カンマで区切って個別に指定することもできます。次に例を示します。

<ORBPorts value="15000-15010"/> (値の範囲)

<ORBPorts value="15000,16000,17000,18000"/> (カンマで区切られた値)

デフォルトでは、サーバー構成ファイルに ORBPorts 要素が存在しません。この要素がない場合は、Reports Server によって CORBA 通信用のポートがランダムに選択されます。ORBPorts 要素の詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の「OracleAS Reports Services の構成」の章を参照してください。

---

---

**注意：** ORBPorts 要素は、Reports Server を実行しているサーバーで管理者が TCP ポートのフィルタリングを有効にしている場合にのみ定義する必要があります。ポートのフィルタリングが有効である場合、管理者は Reports Server 用にいくつかのポートを開き、ORBPorts を使用してそれらのポートを Reports Server とエンジンの通信用としてサーバー構成ファイルに指定できます。いずれのポートも使用できない場合は、Reports Server またはエンジンの起動が失敗し、エラーが表示される可能性があります。

---

---

## 3.3 オペレーティング・システム・パッケージ (Solaris)

使用するコンピュータに次のオペレーティング・システム・パッケージが含まれていることを確認します。これらのパッケージがないと、インストーラは処理を続行できません。

- SUNWarc
- SUNWbtool
- SUNWhea
- SUNWlibm
- SUNWlibms
- SUNWsprot
- SUNWsprox
- SUNWtoo
- SUNWilof (i に続く文字は小文字のエル (l) ではなく数字の 1)
- SUNWxwfont
- SUNWilcs (i に続く文字は小文字のエル (l) ではなく数字の 1)
- SUNWi15cs (i に続く文字は小文字のエル (l) ではなく数字の 1)

最後の2つのパッケージ (SUNWl1cs と SUNWl15cs) は、コードセット ISO8859-1 および ISO8859-15 が必要です。

使用するコンピュータにオペレーティング・システム・パッケージがインストールされているかどうかを確認するには、パッケージの名前を指定して `pkginfo` コマンドを実行します。`pkginfo` を実行するための構文は次のとおりです。

```
pkginfo package_name1 package_name2 ...
```

たとえば、使用するコンピュータに上記のパッケージがすべてインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
prompt> pkginfo SUNWarc SUNWbtool SUNWhea SUNWlibm SUNWlibms SUNWsprot SUNWsprox
SUNWtoo SUNWilof SUNWwfont SUNWl1cs SUNWl15cs
```

インストールされていないパッケージがある場合は、システム管理者に問い合せてください。

## 3.4 カーネル・パラメータ (Solaris)

Oracle Business Intelligence をインストールするコンピュータでは、カーネル・パラメータを [表 3-1](#) および [表 3-2](#) に示されている最小値に設定する必要があります。

カーネル・パラメータの値は、`/etc/system` ファイルに保存されています。`/etc/system` ファイルにパラメータが指定されていない場合は、ファイルに行を追加してそれらを指定する必要があります。

### 注意：

- カーネル・パラメータの値は、Oracle Application Server Metadata Repository または Oracle Application Server Web Cache を実行する予定のコンピュータにのみ必要です。カーネル・パラメータの値は、これらのコンポーネントをインストールする場合にのみチェックされます。
- カーネル・パラメータの値が要件を満たしていない場合は、インストーラからエラー・メッセージが表示されます。カーネル・パラメータを必要な値に更新するまでは、インストールを続行できません。
- カーネル・パラメータの値を更新した場合は、新しい値を有効にするためにコンピュータを再起動してください。

**表 3-1 OracleAS Web Cache に必要なカーネル・パラメータ**

パラメータ	最小値を示す /etc/system 内の行	説明
<code>rlim_fd_max</code>	<code>set rlim_fd_max=65536</code>	シングル・プロセスが開くことのできるファイル記述子の数に関する強い制限を定義します。

**表 3-2 OracleAS Metadata Repository に必要なカーネル・パラメータ**

パラメータ	最小値を示す /etc/system 内の行	説明
<code>semnmi</code>	<code>set semsys:seminfo_semnmi=100</code>	システム全体でのセマフォ・セットの最大数を定義します。
<code>semnms</code>	<code>set semsys:seminfo_semnms=1024</code>	システムでの最大セマフォ数を定義します。256 は、実行するデータベースが 1 つ（インストール中の OracleAS Metadata Repository）であるコンピュータでの最小値です。  コンピュータ上ですでにデータベースが稼働している場合は、「 <a href="#">semnms パラメータの最小値を決定するには</a> 」を参照してください。

表 3-2 OracleAS Metadata Repository に必要なカーネル・パラメータ (続き)

パラメータ	最小値を示す /etc/system 内の行	説明
semmsl	set semsys:seminfo_semmsl=256	初回インストールのみを対象とした最小推奨値を定義します。
shmmax	set shmsys:shminfo_shmmax=4294967295	共有メモリー・セグメント 1 つ当たりの最大許容サイズを定義します (4GB=4294967295)。
shmmmin	set shmsys:shminfo_shmmmin=1	共有メモリー・セグメント 1 つ当たりの最小許容サイズを定義します。 <b>注意:</b> このパラメータは Solaris 9 では使用されません。
shmmni	set shmsys:shminfo_shmmni=100	システム全体での共有メモリー・セグメントの最大数を定義します。
shmseg	set shmsys:shminfo_shmseg=10	1 つのプロセスがアタッチできる共有メモリー・セグメントの最大数を定義します。 <b>注意:</b> このパラメータは Solaris 9 では使用されません。

**semmsl パラメータの最小値を決定するには**

Oracle データベースがまだ稼働していないコンピュータに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合 (つまり OracleAS Metadata Repository がコンピュータで稼働する唯一の Oracle データベースになる場合) は、semmsl パラメータを最小値の 256 に設定します。

Oracle データベースがすでに稼働しているコンピュータに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合は、semmsl パラメータの値として、各 Oracle データベース (OracleAS Metadata Repository を含む) の processes 初期化パラメータを合計した数値に、最も大きい初期化パラメータの値を 2 回加算し、さらにデータベースごとに 10 ずつ加算した値を設定します。

OracleAS Metadata Repository データベースの processes パラメータのデフォルト値は 150 です。

例: Oracle データベースがすでに稼働しているコンピュータの processes パラメータが 200 に設定されているとします。この場合、semmsl パラメータは少なくとも 770 に設定する必要があります。

- すべての Oracle データベースの processes パラメータの合計: 既存のデータベースの 200+ インストールする OracleAS Metadata Repository の 150=350
- 最大のパラメータ値を 2 回加算: 200+200=400
- データベースごとに 10 ずつ加算: 10+10=20
- 合計: 350+400+20=770

Oracle データベースの processes パラメータの値を確認するには、SQL\*Plus で次のコマンドを実行します。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
password には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。
```

```
SQL> show parameters processes
```

**カーネル・パラメータの値を追加または更新するには**

1. 値の変更が必要なコンピュータに、root ユーザーでログオンします。
2. /etc/system ファイルのバックアップ・コピーを作成します。たとえば、次のコマンドを実行すると、system.back というバックアップ・コピーが作成されます。

```
# cp /etc/system /etc/system.back
```

3. vi や emacs などのテキスト・エディタを使用して、必要に応じて `/etc/system` ファイルで値を更新するか、または新しい行を追加します。たとえば、次の行はパラメータのサンプル値を示しています。

```
set semsys:seminfo_semni=300
set semsys:seminfo_semms=1024
set semsys:seminfo_semmsl=256
set shmsys:shminfo_shmmax=4294967295
set shmsys:shminfo_shmmin=1
set shmsys:shminfo_shmmni=512
set shmsys:shminfo_shmseg=150
```

**ヒント：** `/etc/system` ファイルのコメント文字は、`#` ではなくアスタリスク (`*`) です。

4. 新しい値を有効にするためにコンピュータを再起動します。

## 3.5 Windows システム・ファイル (wsf.exe) (Microsoft Windows)

---

**注意：** 次を示す手順は、インストーラから要求された場合にのみ実行します。

---

Oracle Business Intelligence には、Windows システム・ディレクトリ（通常は `C:\Windows\system32` または `C:\Winnt\system32`）の一部のシステム・ファイルに最低限必要なバージョンが存在します。Oracle Business Intelligence のインストーラを実行すると、インストーラによってコンピュータ上の Windows システム・ファイルがチェックされます。これらのファイルの古いバージョンが見つかり、それらを他のプロセスが使用している場合は、インストーラを終了し、`wsf.exe` を実行して最新の Windows システム・ファイルをインストールするように要求されます（ファイルの古いバージョンが見つかって、それらを他のプロセスが使用していない場合は、それらが自動的に置換されるので、`wsf.exe` を実行する必要はありません）。

`wsf.exe` はインストーラと同じディレクトリにあります。

`wsf.exe` を実行するには（インストーラから要求された場合のみ）、次の手順に従います。

1. `wsf.exe` を起動します。これにより、Oracle Universal Installer が起動されて Windows システム・ファイルがインストールされます。

CD-ROM (E: が CD-ROM ドライブである場合) :

```
E:¥> wsf.exe
```

DVD-ROM (E: が DVD-ROM ドライブである場合) :

```
E:¥> cd application_server
E:¥> wsf.exe
```

2. インストーラの画面の指示に従います。

**表 3-3 Windows システム・ファイルをインストールするための画面**

画面	アクション
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. ファイルの場所の指定	<p>インストール先名 : wsf の Oracle ホームの名前を入力します。</p> <p>インストール先パス : 任意のフルパスを入力します。このフィールドに入力した値に関係なく、適切なシステム・ディレクトリにファイルがインストールされます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 3-3 Windows システム・ファイルをインストールするための画面 (続き)

画面	アクション
3. 警告: システムを再起動してください	この画面が表示された場合は、インストール終了時にコンピュータが自動的に再起動されて、Windows システム・ファイルのインストールが完了します。コンピュータで実行中のアプリケーション (このインストーラ以外) を保存し、終了してください。 「次へ」をクリックします。
4. サマリー	「次へ」をクリックして、Windows システム・ファイルのインストールを開始します。
5. インストールの終了	「終了」をクリックしてインストーラを終了します。

3. インストール時に「警告: システムを再起動してください」という画面が表示されると、インストーラによってコンピュータが再起動されます。表示されない場合は、続行する前にコンピュータを再起動します。

## 3.6 ポート (Microsoft Windows および Solaris)

Oracle Business Intelligence の多くのコンポーネント (Oracle HTTP Server、OracleAS Web Cache、Oracle Enterprise Manager 10g など) は、ポートを使用します。インストーラでデフォルトのポート番号を自動的に割り当てるか、または各自で指定したポート番号を使用します。

- [第 3.6.1 項「エフェメラル・ポートについて」](#)
- [第 3.6.2 項「ポートが使用中かどうかの確認」](#)
- [第 3.6.3 項「デフォルトのポート番号の使用」](#)
- [第 3.6.4 項「カスタム・ポート番号の使用 \(静的ポート機能\)」](#)

### Oracle HTTP Server のデフォルト・ポートがポート 80 ではなくポート 7777 である理由

デフォルトでは、インストーラによって、Oracle HTTP Server がポート 80 ではなくポート 7777 を使用するように構成されます。ポート 7777 がデフォルト・ポートである理由として、UNIX では、1024 未満のポート番号を使用するコンポーネントを実行する場合に、事前に root ユーザーとして追加の作業が必要になることが挙げられます。インストーラは root としてアクセスできないため、1024 より大きなポートを使用する必要があります。

Oracle HTTP Server で別のポート (ポート 80 など) を使用するには、静的ポート機能を使用してコンポーネントのポート番号を指定します。インストールの後でもポート番号は変更できませんが、インストール時にポート番号を設定する方が簡単です。

### 3.6.1 エフェメラル・ポートについて

#### 問題: エフェメラル・ポートとの競合が原因でコンポーネントを起動できない

必要なポートを使用できないために、Oracle Application Server のプロセスを起動できないことがまれにあります。この場合、プロセスの起動が失敗するか、またはポートにバインドできないことがプロセスから通知されます。影響を受けたプロセスを後から再起動すると正常に起動されるので、この動作は一時的である可能性があります。

この問題は、エフェメラル・ポートの範囲内にあるポート番号を、Oracle Application Server がデフォルトで使用することが原因です。通常、エフェメラル・ポートは、クライアント / サーバー TCP/IP 接続のクライアント側で使用されます。一般に、クライアント・プロセスは接続のクライアント側で使用されるポートの値を関知しないため、どの TCP/IP 実装でも、クライアント側で使用されるポート値をオペレーティング・システムが選択できるようになっています。オペレーティング・システムは、このタイプのクライアント接続ごとに、エフェメラル・ポートの範囲からポートを選択します。

一方、サーバー・プロセス (Oracle Application Server プロセスなど) は、エフェメラル・ポートを使用できません。これらのプロセスでは、固定ポート値を使用して、クライアントが常に同じサーバー・ポートに接続してサーバーと通信できるようにする必要があります。



エフェメラル・ポートとのポートの競合は、Oracle Application Server プロセスがエフェメラル・ポートの範囲内にあるポートを使用するように構成されていると発生します。Oracle Application Server プロセスは、起動時に、必要なポートをすでにクライアント・プロセスが使用していることを検知します (クライアントはオペレーティング・システムからエフェメラル・ポートの割当てを受けています)。このクライアントには、TCP/IP 経由で通信可能なコンピュータ上のあらゆるプロセスが該当します。Oracle Application Server プロセスに必要なポートが使用できない場合、そのプロセスの起動は失敗します。

この問題は、オペレーティング・システムの中でも Microsoft Windows で比較的良好に発生します。これは、Windows がデフォルトで小さな範囲のポートをエフェメラル・クライアント接続に使用するためです。

### エフェメラル・ポートの範囲

Microsoft Windows でのエフェメラル・ポートの範囲は、ポート 1024 から 5000 までです (両ポートを含む)。

Windows で調整できるのは、この範囲の上限だけです。それ以外のほとんどのオペレーティング・システムでは、デフォルトのエフェメラル・ポートの範囲がこれよりはるかに大きく、範囲の下限も上限も調整可能です。

一部の Application Server プロセス (Oracle HTTP Server、OracleAS Web Cache、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control、および OC4J を含む) は、エフェメラル・ポート範囲内のポートを使用します。必要なポートがクライアントによって使用されていると、これらのプロセスは起動できません。

### エフェメラル・ポートとの競合の回避

エフェメラル・ポートとの競合を回避するには、次のオプションがあります。

- staticports.ini を使用して Oracle Business Intelligence をインストールすることで、Oracle Business Intelligence のコンポーネントがエフェメラル・ポート範囲内のポートを使用しないようにします。staticports.ini ファイルで、1024 未満または 5000 を超えるポート番号を使用します。  
  
詳細は、第 3.6.4 項「カスタム・ポート番号の使用 (静的ポート機能)」を参照してください。
- Oracle Business Intelligence をすでにインストールしている場合は、1024 未満または 5000 を超えるポートを使用するようにコンポーネントを再構成できます。Oracle Application Server プロセスが現在使用するポートを変更する方法については、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
- (このオプションはインストール後でも実行できます。) コンピュータ上のエフェメラル・ポート範囲を変更します。このオプションは、上記のいずれのオプションも使用できない場合にのみ使用してください。このオプションでは、Windows レジストリが変更され、コンピュータ上で稼働するすべての製品に影響を与えるため、できるかぎり使用しないことをお勧めします。

このオプションでは、エフェメラル・ポート範囲の位置を変更します。変更する前に、コンピュータで使用している (Oracle または非 Oracle) 製品が、エフェメラル・ポート範囲内の非エフェメラル・ポートを使用していないことを確認する必要があります。使用している製品がある場合は、それらのポート番号の位置を、新しい ReservedPorts 範囲 (下記を参照)、新しいエフェメラル範囲よりも上、またはポート 1024 よりも下に変更する必要があります。

このオプションを実装する手順は次のとおりです。

- エフェメラル・ポート範囲の上限を上げて範囲を拡大します。

レジストリの MaxUserPort 値を 13000 以上 65534 以下に設定します。MaxUserPort はエフェメラル・ポート範囲の上限です。

手順については、Microsoft サポート技術情報の文書番号 196271

([http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;\[LN\];196271](http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;[LN];196271)) を参照してください。

- 新たに拡大したエフェメラル・ポート範囲の一部を、Oracle Application Server 用に予約します。

ポート 1024 から 8000 まだが Oracle Application Server 用として予約されるように、レジストリの `ReservedPorts` 値を設定します。予約範囲には、Oracle Application Server が通常使用するポートの範囲が組み込まれます。

手順については、Microsoft サポート技術情報の文書番号 812873

([http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;\[LN\];812873](http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;[LN];812873)) を参照してください。

- 変更を有効にするためにコンピュータを再起動します。

手順を実行すると、最終的に 1024 から 8000 までのポートが Oracle Application Server 用として予約され、8001 から 13000 までのポートが新しいエフェメラル・ポート範囲になります (MaxUserPort を 13000 に設定した場合)。予約範囲には Oracle Application Server が通常使用するポートの範囲が組み込まれ、エフェメラル・ポート範囲が当初の範囲と同じ大きさになります。

### 3.6.2 ポートが使用中かどうかの確認

ポートが使用中かどうかを確認するには、次のように `netstat` コマンドを実行します。

```
prompt> netstat -an | grep portnum
```

```
C:\> netstat -an | find "portnum"
```

ポート番号は二重引用符で囲む必要があります。

### 3.6.3 デフォルトのポート番号の使用

コンポーネントにデフォルトのポート番号を使用する場合は、何もする必要はありません。各コンポーネントのポート範囲で、少なくとも 1 つのポートが使用できることを確認してください。インストーラが範囲内で空いているポートを見つけられないと、インストールが失敗します。

次の点に注意してください。

- インストーラがコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てるのは、それらのポートが他のアプリケーションによって使用されていない場合だけです。デフォルトのポートが使用されている場合は、コンポーネントのポート番号範囲にある別のポートが試されます。たとえば、中間層の Oracle HTTP Server のデフォルトの非 SSL ポートはポート 80 です。このポートを別のアプリケーションが使用している場合は、インストーラによって 7777 ~ 7877 の範囲にあるポートが割り当てられます。
- Oracle HTTP Server のデフォルトのポートは、インストール・タイプ (表 3-4) に依存します。中間層はポート 80 および 443 を取得します。これは、中間層にアプリケーションを配置するためです。ユーザーは、中間層の Oracle HTTP Server/OracleAS Web Cache に対し、アプリケーションにアクセスするためのリクエストを送信します。

表 3-4 のカッコ内の値は、デフォルトのポートが使用中である場合に Oracle HTTP Server に割り当てられるポートを示しています。

表 3-4 Oracle HTTP Server のデフォルトのポート

インストール・タイプ	デフォルトの非 SSL ポート	デフォルトの SSL ポート
OracleAS Infrastructure	7777 (7777 - 7877)	4443 (4443 - 4543)
中間層	80 (7777 - 7877)	443 (4443 - 4543)

- ポートが使用中かどうかを判定するために、インストーラが `services` ファイルをチェックすることはなくなりました。以前のリリースでは、このファイルにポート番号が列記されている場合は、インストーラがポート番号を割り当てませんでした。

services ファイルは C:\¥%SystemRoot%\¥system32¥drivers¥etc ディレクトリにあります。この %SystemRoot% は、Windows 2000 では winnt、Windows XP および Windows 2003 では windows です。

### 3.6.4 カスタム・ポート番号の使用（静的ポート機能）

コンポーネントにカスタム・ポート番号を割り当てるようにインストーラに指示する手順は次のとおりです。

1. コンポーネント名とポート番号を含んだファイルを作成します。ファイル・フォーマットは、[第 3.6.4.1 項「staticports.ini ファイルのフォーマット」](#)を参照してください。このファイルには、一般に staticports.ini という名前が付けられますが、名前は自由に指定できます。
2. インストーラの「ポート構成オプションの指定」画面で、「手動」を選択し、staticports.ini ファイルへの完全なパスを入力します。

ファイルへの完全なパスを指定しないと、インストーラはファイルを検出できません。この場合インストーラは、警告を表示することなくすべてのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てます。

---

**以前のリリースとの違い：** 10g リリース 1 (9.0.4) では、コマンドライン・オプションを使用して staticports.ini ファイルを指定していました。このリリースでは、新しい「ポート構成オプションの指定」画面でファイルを指定します。

---

#### 3.6.4.1 staticports.ini ファイルのフォーマット

staticports.ini ファイルのフォーマットは次のとおりです。port\_num は、コンポーネントに使用するポート番号で置き換えてください。

```
# J2EE and Web Cache
Oracle HTTP Server port = port_num
Oracle HTTP Server Listen port = port_num
Oracle HTTP Server SSL port = port_num
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_num
Oracle HTTP Server Diagnostic port = port_num
Java Object Cache port = port_num
DCM Java Object Cache port = port_num
DCM Discovery port = port_num
Oracle Notification Server Request port = port_num
Oracle Notification Server Local port = port_num
Oracle Notification Server Remote port = port_num
Application Server Control port = port_num
Application Server Control RMI port = port_num
Oracle Management Agent port = port_num
Web Cache HTTP Listen port = port_num
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_num
Web Cache Administration port = port_num
Web Cache Invalidation port = port_num
Web Cache Statistics port = port_num
Log Loader port = port_num
ASG port = port_num

# Business Intelligence and Forms
Reports Services SQL*Net port = port_num
Reports Services discoveryService port = port_num
Reports Services bridge port = port_num

# Infrastructure
Oracle Internet Directory port = port_num
Oracle Internet Directory (SSL) port = port_num
```

```

Oracle Certificate Authority SSL Server Authentication port = port_num
Oracle Certificate Authority SSL Mutual Authentication port = port_num
Ultra Search HTTP port number = port_num

```

このファイルを作成する場合は、CD-ROM（ディスク 1）または DVD-ROM の staticports.ini ファイルをテンプレートとして使用する方法が最も簡単です。

1. CD-ROM または DVD-ROM の staticports.ini ファイルを、ハード・ディスクにコピーします。

**表 3-5 CD-ROM または DVD-ROM の staticports.ini ファイルの場所**

メディア	staticports.ini ファイルの場所
CD-ROM	mount_point: ディスク 1/1012disk1/stage/Response/staticports.ini
DVD-ROM	mount_point/application_server/stage/Response/staticports.ini

**表 3-6 CD-ROM または DVD-ROM の staticports.ini ファイルの場所**

メディア	staticports.ini ファイルの場所 (E: が CD-ROM または DVD-ROM ドライブである場合)
CD-ROM	E: ディスク 1¥stage¥Response¥staticports.ini
DVD-ROM	E:¥application_server¥stage¥Response¥staticports.ini

2. ローカル・コピー（ハード・ディスク上のファイル）を編集して必要なポート番号を指定します。

staticports.ini ファイル内のすべてのコンポーネントにポート番号を指定する必要はありません。ファイルに列記されていないコンポーネントには、デフォルトのポート番号が使用されます。

次の例では、Application Server Control のポート、および OracleAS Web Cache の複数のポートが設定されています。指定されていないコンポーネントには、デフォルトのポート番号が割り当てられます。

```

Application Server Control port = 2000
Web Cache Administration port = 2001
Web Cache Invalidation port = 2002
Web Cache Statistics port = 2003

```

インストールが完了したら、portlist.ini ファイルで割り当てられたポートを確認できます。

#### ポート番号選択時の注意事項：

- ポート番号は 65535 より大きくすることができません。
- コンポーネントに 1024 未満のポート番号を使用する場合は、root ユーザーとしてそのコンポーネントを実行する必要があります。
- コンポーネントに 1024 未満のポート番号を使用すると、インストール終了時にインストーラがそのコンポーネントを起動できなくなります。場合によっては、起動する前にコンポーネントを構成する必要があります。詳細は、該当するコンポーネントのドキュメントを参照してください。
- Oracle Internet Directory にポート 389 と 636 を使用する場合は、/etc/services ファイルでこれらのポートをコメント・アウトする必要があります。
- Oracle HTTP Server および OracleAS Web Cache のポート番号を設定する場合は、必ず第 3.6.4.3 項「[Oracle HTTP Server および OracleAS Web Cache のポート](#)」を読んでください。

インストーラは、メモリーをチェックすることで、ファイルに指定されたポートが使用可能であることを確認します。つまり、実行中のプロセスが使用しているポートのみを検出できます。インストーラが、構成ファイルを参照してアプリケーションが使用しているポートを判定することはありません。

指定したポートが使用不可能であることが検出されると、アラートが表示されます。使用不可能なポートは割り当てられません。これを解決するには、次の操作を実行します。

1. `staticports.ini` ファイルを編集して別のポートを指定するか、ポートを使用するアプリケーションをシャット・ダウンします。
2. 「再試行」をクリックします。`staticports.ini` ファイルが再び読み取られ、ファイル内のエントリが再度確認されます。

#### portlist.ini を staticports.ini ファイルとして使用

`staticports.ini` ファイルは、Oracle Business Intelligence のインストール後に作成される `portlist.ini` ファイルと同じフォーマットを使用します。Oracle Business Intelligence をすでにインストールし、別のインストールで同じポート番号を使用する場合は、最初のインストールで作成された `portlist.ini` ファイルを、後続のインストールの `staticports.ini` ファイルとして使用します。

`portlist.ini` ファイルは次のディレクトリにあります。

- `ORACLE_HOME/install/portlist.ini` (Solaris)
- `ORACLE_HOME¥install¥portlist.ini` (Windows)

ただし、`staticports.ini` の Oracle Management Agent port 行が、`portlist.ini` の Enterprise Manager Agent port 行に対応していることに注意してください。

#### 3.6.4.2 エラーが原因でデフォルトのポートが指定したポートにかわって使用されるケース

誤ってインストーラが警告を表示せずにデフォルトのポートを使用する場合があるので、`staticports.ini` ファイルを慎重に確認します。確認の必要な点は次のとおりです。

- 複数のコンポーネントに同じポートを指定すると、指定したポートは最初のコンポーネントに使用され、その他のコンポーネントにはコンポーネントのデフォルトのポートが使用されます。複数のコンポーネントに同じポートを指定していても、インストーラからは警告が表示されません。
- `staticports.ini` ファイルに構文エラーがあると（たとえば、ある行で = 文字を省略した場合など）、インストーラはその行を無視します。このような行に指定されたコンポーネントには、デフォルトのポートが割り当てられます。行に構文エラーがあっても、インストーラからは警告が表示されません。
- コンポーネント名のスペルを間違えた場合、そのコンポーネントにはデフォルトのポートが割り当てられます。ファイル内のコンポーネント名は、大 / 小文字が区別されます。行に認識できない名前を指定していても、インストーラからは警告が表示されません。
- ポート番号に数値以外の値を指定すると、その行は無視され、コンポーネントにデフォルトのポート番号が割り当てられます。この場合、警告は表示されません。
- `staticports.ini` ファイルへの相対パスを指定すると（たとえば `./staticports.ini` (Solaris)、`¥staticports.ini` (Microsoft Windows)、または単に `staticports.ini`）、ファイルが検出されなくなります。インストーラは警告を表示せずに処理を続行し、すべてのコンポーネントにデフォルト・ポートを割り当てます。`staticports.ini` ファイルへの完全なパスを指定する必要があります。

### 3.6.4.3 Oracle HTTP Server および OracleAS Web Cache のポート

これらのコンポーネントにポートを設定する場合は、次の点を理解しておいてください。

Oracle HTTP Server の `httpd.conf` ファイルでは、`Port` ディレクティブと `Listen` ディレクティブで、OracleAS Web Cache および Oracle HTTP Server が使用するポートが指定されます。`staticports.ini` ファイルでこれらのポートを設定するための適切な行は、構成中のコンポーネントによって異なります。

#### OracleAS Web Cache および Oracle HTTP Server を構成している場合

1. OracleAS Web Cache のポートを設定します。

OracleAS Web Cache は、`Port` ディレクティブで指定されたポートを使用します (図 3-1)。このポートを設定するには、`staticports.ini` ファイルのこの行を使用します。

```
Web Cache HTTP Listen port = port_number
```

OracleAS Web Cache 向けに SSL ポートを構成するには、次の行を使用します。

```
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_number
```

この場合、Oracle HTTP Server `port` 行を使用してポート番号を設定することはできません。`staticports.ini` ファイルに Oracle HTTP Server `port` 行と Web Cache HTTP Listen `port` 行の両方が含まれている場合は、Oracle HTTP Server `port` 行が無視されます。たとえば、`staticports.ini` に次の行を指定したとします。

```
Web Cache HTTP Listen port = 7979
Oracle HTTP Server port = 8080
```

`Port` ディレクティブは 7979 に設定されます。

2. Oracle HTTP Server のポートを設定します。

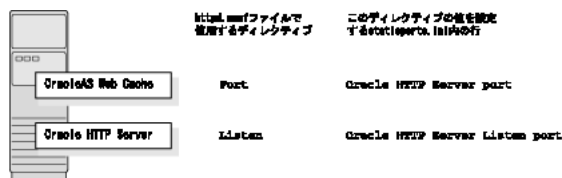
Oracle HTTP Server は、`Listen` ディレクティブで指定されたポートを使用します。このポートを設定するには、`staticports.ini` ファイルのこの行を使用します。

```
Oracle HTTP Server Listen port = port_number
```

SSL リスニング・ポートを構成するには、次の行を使用します。

```
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_number
```

図 3-1 OracleAS Web Cache と Oracle HTTP Server の構成



#### Oracle HTTP Server のみを構成する場合 (OracleAS Web Cache なし)

Oracle HTTP Server のみを構成する場合は、Oracle HTTP Server が `Port` ディレクティブと `Listen` ディレクティブの両方を使用します (図 3-2)。この場合は、両方のディレクティブが同じポート番号を使用するように設定する必要があります。

これらのポートを設定するには、`staticports.ini` ファイルの Oracle HTTP Server `port` 行と Oracle HTTP Server Listen `port` 行を使用します。次に例を示します。

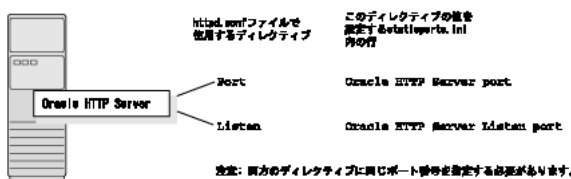
```
Oracle HTTP Server port = 8080
Oracle HTTP Server Listen port = 8080
```

これらのポートの SSL バージョンを設定するには、次の行を使用します。非 SSL バージョンの場合と同様に、ポート番号は同じにする必要があります。

```
Oracle HTTP Server SSL port = 443
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 443
```

staticports.ini に Web Cache 行を指定しても、OracleAS Web Cache を構成していないのでそれらの行は無視されます。

図 3-2 Oracle HTTP Server のみの構成



### 3.6.4.4 例

この項では、staticports.ini を使用する一般的なシナリオをいくつか取り上げます。

- 第 3.6.4.4.1 項「OracleAS Web Cache をフロントエンドとして、Oracle HTTP Server がポート 80 と 443 を使用するように構成」
- 第 3.6.4.4.2 項「OracleAS Web Cache なしで、Oracle HTTP Server がポート 80 と 443 を使用するように構成」

**3.6.4.4.1 OracleAS Web Cache をフロントエンドとして、Oracle HTTP Server がポート 80 と 443 を使用するように構成** このシナリオでは、次の行を含む staticports.ini ファイルを作成します。

```
Web Cache HTTP Listen port = 80
Oracle HTTP Server Listen port = 81
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = 443
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 444
```

Oracle HTTP Server リスニングと SSL リスニングのポートには、使用可能なポートをどれでも指定できます。この例では、ポート 81 と 444 が使用されています。これらのポート番号は、1024 未満でなくてもかまいません。1024 未満のポート番号を選択する場合は、Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache を root ユーザーとして起動してください。

**注意:** 1024 未満のポート番号を使用しているため、Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache を root ユーザーとして実行するように構成する必要があります。構成は、インストール中またはインストール後に行うことができます。

インストール後に構成を行う場合は、インストーラによってコンポーネントが起動されません（まだ構成されていないため）。

詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』および『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

**3.6.4.4.2 OracleAS Web Cache なしで、Oracle HTTP Server がポート 80 と 443 を使用するように構成** このシナリオでは、次の行を含む staticports.ini ファイルを作成します。

```
Oracle HTTP Server port = 80
Oracle HTTP Server Listen port = 80
Oracle HTTP Server SSL port = 443
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 443
```



---

**注意：** 1024 未満のポート番号を使用しているため、Oracle HTTP Server を root ユーザーとして実行するように構成する必要があります。

---

## 3.7 オペレーティング・システム・グループ (Solaris)

Oracle 製品がインストールされていないコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする場合は、オペレーティング・システム・グループを作成する必要があります。この場合、インベントリ・ディレクトリを所有するためにグループを作成します。3-14 ページの「インベントリ・ディレクトリ用のグループの作成」を参照してください。

Solaris Management Console を使用して、ローカルのオペレーティング・システム・グループを作成します。これを行うには、次の操作を実行します。

1. Solaris Management Console のウィンドウを表示するモニターを指すように、DISPLAY 環境変数を設定します。環境変数の設定の詳細は、第 3.10.4 項「DISPLAY」を参照してください。
2. Solaris Management Console を起動します。  

```
prompt> /usr/sadm/bin/smc
```
3. 左側のフレームで、「This Computer」を開き、続いて「System Configuration」を開きます。
4. ログイン画面を表示するには、「Users」をクリックします。
5. root ユーザーでログオンします。
6. 左側のフレームで「Users」を開き、「Groups」を選択します。
7. 「Action」を選択し、「Add Group」を選択します。
8. 「Group Name」フィールドに、グループの名前を入力します。
9. 「Group ID Number」フィールドに、グループの ID を入力します。ID には数値を指定する必要があります。このフィールドはオプションです。
10. 「OK」をクリックします。

ローカルのオペレーティング・システム・グループが作成されました。オペレーティング・システム・ユーザーおよびグループの詳細は、使用するオペレーティング・システムのドキュメントを参照するか、システム管理者に問い合わせてください。

### インベントリ・ディレクトリ用のグループの作成

Oracle 製品がインストールされていないコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする場合は、インベントリ・ディレクトリを所有するためのグループを作成します。インストーラは、そのファイルをインベントリ・ディレクトリに書き込むことで、コンピュータにインストールされている Oracle 製品の状況を把握します。

このマニュアルでは、オペレーティング・システム・グループに oinstall という名前を使用します。

インベントリ・ディレクトリ用のグループを別途用意することで、複数のユーザーがコンピュータに Oracle 製品をインストールできるようになります。ユーザーには、インベントリ・ディレクトリに対する書き込み権限が必要です。書き込み権限を得るには、oinstall グループに属していることが必要です。

コンピュータに初めて Oracle 製品をインストールするときに、インベントリ・ディレクトリのグループ名を入力する画面が表示されます。その後、インベントリ・ディレクトリの場所を入力する画面が表示されます。

インベントリ・ディレクトリのデフォルトの名前は oraInventory です。



コンピュータにインベントリ・ディレクトリが存在するかどうか分からない場合は、`/var/opt/oracle/oraInst.loc` ファイルをチェックします。このファイルは、インベントリ・ディレクトリの場所とそれを所有するグループを示します。このファイルが存在しない場合は、コンピュータに Oracle 製品がインストールされていません。

## 3.8 Solaris のオペレーティング・システム・ユーザー

オペレーティング・システム・ユーザーは、Oracle 製品をインストールおよびアップグレードするために作成します。インストーラを実行するオペレーティング・システム・ユーザーには、次のディレクトリに対する書き込み権限が必要です。

- インストールする製品のファイルを配置する Oracle ホーム・ディレクトリ
- インストーラがすべての Oracle 製品に使用するインベントリ・ディレクトリ

コンピュータに他の Oracle 製品がインストールされている場合は、すでにオペレーティング・システム・ユーザーが作成されている可能性があります。`/var/opt/oracle/oraInst.loc` ファイルをチェックしてください。このファイルは、インベントリ・ディレクトリの場所とそれを所有するグループを示します。このファイルが存在しない場合は、コンピュータに Oracle 製品がインストールされていません。

Oracle 製品をインストールするためのユーザーが存在しない場合は、表 3-7 に示されたプロパティを持つユーザーを作成します。

**表 3-7 インストーラを実行するオペレーティング・システム・ユーザーのプロパティ**

項目	説明
ログイン名	ユーザーには任意の名前を使用できます。このマニュアルでは、ユーザーを <code>oracle</code> ユーザーと呼びます。
グループ識別子	<p><code>oracle</code> ユーザーのプライマリ・グループには、<code>oraInventory</code> ディレクトリに対する書き込み権限が必要です。このグループの詳細は、<a href="#">3-14 ページの「インベントリ・ディレクトリ用のグループの作成」</a>を参照してください。</p> <p>グループには任意の名前を使用できます。このマニュアルでは、<code>oinstall</code> という名前を使用します。</p>
ホーム・ディレクトリ	<code>oracle</code> ユーザーのホーム・ディレクトリは、他のユーザーのホーム・ディレクトリと一致させることができます。
ログイン・シェル	デフォルトのログイン・シェルは、 <code>C</code> 、 <code>Bourne</code> 、または <code>Korn</code> シェルです。

**注意：** `oracle` ユーザーは、Oracle 製品のインストールと保守にのみ使用してください。`oracle` ユーザーをインストーラとは無関係の目的で使用することはできません。`root` を `oracle` ユーザーとして使用しないでください。

### ローカル・オペレーティング・システム・ユーザーの作成

Solaris Management Console を使用して、ローカル・オペレーティング・システム・ユーザーを作成します。これを行うには、次の操作を実行します。

1. Solaris Management Console のウィンドウを表示するモニターを指すように、`DISPLAY` 環境変数を設定します。環境変数の設定の詳細は、[第 3.10.4 項「DISPLAY」](#)を参照してください。
2. Solaris Management Console を起動します。  

```
prompt> /usr/sadm/bin/smc
```
3. 左側のフレームで、「This Computer」を開き、「System Configuration」を開きます。

4. ログイン画面を表示するには、「Users」をクリックします。
5. 「User Name」フィールドに、「root」と入力します。「Password」フィールドに、root のパスワードを入力します。
6. 左側のフレームで「Users」を開き、「User Accounts」を選択します。
7. 「Action」、「Add User」、「With Wizard」の順に選択します。
8. 「User Name」フィールドに、ユーザーの名前を入力します。たとえば、「oracle」と入力します。「Full Name」フィールドと「Description」フィールドはオプションです。
9. 「Next」をクリックします。
10. 「User ID Number」フィールドで、デフォルト値をそのまま使用します。
11. 「Next」をクリックします。
12. 「User Must Use This Password At First Login」を選択し、ユーザーのパスワードを入力します。
13. 「Next」をクリックします。
14. 「Primary Group」リストから、ユーザーのプライマリ・グループを選択します。これは、前の作業でインベントリ・ディレクトリを所有するために作成したグループです。[3-14 ページの「インベントリ・ディレクトリ用のグループの作成」](#)を参照してください。
15. 「Next」をクリックします。
16. 「Path」フィールドに、ユーザーのホーム・ディレクトリを入力します。
17. 「Next」をクリックします。
18. ユーザーのメール・サーバー情報を確認し、「Next」をクリックします。
19. ユーザー情報を確認し、「Finish」をクリックします。

ローカル・オペレーティング・システム・ユーザーが作成されました。

オペレーティング・システム・ユーザーが属しているグループをチェックするには、ユーザーの名前を指定して groups コマンドを実行します。次に例を示します。

```
prompt> groups oracle
```

オペレーティング・システム・ユーザーおよびグループの詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照するか、システム管理者に問い合せてください。

## 3.9 Microsoft Windows のオペレーティング・システム・ユーザー

インストールを実行するオペレーティング・システム・ユーザーは、Administrators グループに属している必要があります。オペレーティング・システム・ユーザーが Administrators グループに属しているかどうかをチェックするには、次の手順を実行します。

ユーザーが Administrators グループに属しているかどうかをチェックする手順は次のとおりです。

1. 「コンピュータの管理」ダイアログ・ボックスを表示します。  
  
Windows 2000/Windows XP: デスクトップで「マイ コンピュータ」を右クリックし、「管理」をクリックします。  
  
Windows 2003: デスクトップでローカル・コンピュータのアイコンを右クリックし、「管理」をクリックします。
2. 左側で「ローカル ユーザーとグループ」を開き、「ユーザー」を選択します。
3. 右側で、ユーザーを右クリックし、「プロパティ」をクリックして「プロパティ」ダイアログ・ボックスを表示します。

#### 4. 「所属するグループ」タブを選択します。

Administrators グループのメンバーではない場合は、このグループへの追加を管理者に依頼するか、Administrators グループのメンバーであるユーザーとしてログインします。

## 3.10 Solaris の環境変数

Oracle Business Intelligence をインストールするオペレーティング・システム・ユーザーは、表 3-8 に示された環境変数を設定（または設定解除）する必要があります。

表 3-8 Solaris の環境変数のまとめ

環境変数	設定または設定解除
ORACLE_HOME および ORACLE_SID	影響なし（インストーラがこの 2 つの環境変数を設定解除する）
PATH、CLASSPATH、および LD_LIBRARY_PATH	Oracle ホーム・ディレクトリ内のディレクトリへの参照を含めてはならない。
DISPLAY	インストーラのウィンドウを表示するモニターに設定する。
TMP	オプション。設定解除すると、デフォルトで /tmp に設定される。
TNS_ADMIN	設定しない。
REPORTS_DEFAULT_DISPLAY	デフォルトでは YES に設定。NO に設定する場合は、必ず適切な表示を指定する。

### 3.10.1 環境変数に関するヒント

環境変数を操作する場合のヒントをいくつか示します。

- .profile ファイルに環境変数を設定した場合に、それらが読み取られないことがあります。環境変数が正しい値に設定されていることを確認するには、インストーラを実行するシェルスクリプトでそれらの値をチェックします。
- 環境変数の値をチェックするには、env コマンドを使用します。このコマンドによって、現在定義されているすべての環境変数とその値が表示されます。

```
% env
```

- 新規ユーザーとして su コマンドを使用してユーザーを切り替える（たとえば root ユーザーから oracle ユーザーへ）場合は、環境変数をチェックしてください。これは、環境変数が新規ユーザーに渡されない場合があるからです。この状況は、- パラメータを指定して su を実行した場合（su - user）でも発生する可能性があります。

```
# /* root user */
# su - oracle
% env
```

### 3.10.2 ORACLE\_HOME および ORACLE\_SID

これらの環境変数はインストーラによって設定解除されるため、インストーラ起動時にこれらの環境変数が設定されているかどうかは問題ではありません。

### 3.10.3 PATH、CLASSPATH、および LD\_LIBRARY\_PATH

PATH、CLASSPATH、LD\_LIBRARY\_PATH の各環境変数を編集して、それらが Oracle ホーム・ディレクトリを参照しないようにします。

### 3.10.4 DISPLAY

インストーラを表示する X サーバーを指すように、DISPLAY 環境変数を設定します。DISPLAY 環境変数のフォーマットは次のとおりです。

```
hostname:display_number.screen_number
```

例 (C シェル) :

```
% setenv DISPLAY test.mydomain.com:0.0
```

例 (Bourne または Korn シェル) :

```
$ DISPLAY=test.mydomain.com:0.0; export DISPLAY
```

xclock プログラムを実行することで、表示をテストできます。

```
$ /usr/openwin/bin/xclock &
```

Oracle Business Intelligence では、インストール中のみ X サーバーが実行されている必要があります。オペレーティング・システムとともにインストールされたフレーム・バッファ X サーバーでは、インストール中にユーザーがログインしたままフレーム・バッファを実行している必要があります。これを望まない場合は、X Virtual Frame Buffer (XVFB) や Virtual Network Computing (VNC) などの仮想フレーム・バッファを使用します。

XVFB やその他の仮想フレーム・バッファ・ソリューションの取得とインストールについては、OTN (<http://www.oracle.com/technology/products/>) にアクセスしてください。OTN で「frame buffer」を検索します。

### 3.10.5 TMP

インストール中、インストーラは一時ディレクトリに一時ファイルを書込む必要があります。デフォルトの一時ディレクトリは、/tmp です。

インストーラで /tmp 以外のディレクトリが使用されるようにするには、TMP 環境変数を代替ディレクトリのフルパスに設定します。

例 (C シェル) :

```
% setenv TMP /tmp2
```

例 (Bourne または Korn シェル) :

```
$ TMP=/tmp2; export TMP
```

この環境変数を設定せず、デフォルトのディレクトリに十分な領域がない場合、環境設定が設定されていないというエラー・メッセージがインストーラによって表示されます。異なるディレクトリを指すように環境変数を設定するか、またはデフォルトのディレクトリに十分な領域を解放してください。どちらの場合も、インストールをやり直す必要があります。

### 3.10.6 TNS\_ADMIN

この項では、2 つの要件について説明します。

- TNS\_ADMIN 環境変数を設定しないでください。
- /etc ディレクトリと /var/opt/oracle ディレクトリには、tnsnames.ora ファイルを配置しないでください。

これらの要件は、様々な Oracle 製品の Net 構成ファイル間で競合が発生しないようにするために必要です。

TNS\_ADMIN を設定するか、または tnsnames.ora ファイルを /etc または /var/opt/oracle に配置する必要がある場合は、Oracle Business Intelligence をインストールする前に次の手順を実行します。

- 1. tnsnames.ora ファイルを /etc または /var/opt/oracle に配置した場合は、このファイルを別のディレクトリに移動します。あるいは、ファイルの名前を変更してもかまいません。
- 2. TNS\_ADMIN 環境変数が設定されていないことを確認します。

例 (C シェル) :

```
% unsetenv TNS_ADMIN
```

例 (Bourne または Korn シェル) :

```
$ unset TNS_ADMIN
```

インストール後に、新たに作成された tnsnames.ora ファイルを、既存の tnsnames.ora ファイルとマージすることができます。

3.10.7 REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY

REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY 環境変数は、Oracle Reports に対して次の実装を行うかどうかを指定します。

- DISPLAY に依存しない
- フォント情報に定義された有効なプリンタを保有することに依存しない
- イメージの表面解像度およびフォント情報に対応する ScreenPrinter (screenprinter.ppd) の実装
- Advanced Imaging Support の実装

Oracle Reports に対して REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY=YES を設定すると、DISPLAY 環境変数に設定された値が上書きされます。REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY の詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

**注意：** REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY は、Oracle Reports にのみ使用され、Oracle Application Server のインストーラには適用できません。このインストーラは、REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY が YES に設定されていても、引き続き DISPLAY 環境変数を使用します。

3.11 Microsoft Windows の環境変数

Oracle Business Intelligence をインストールするオペレーティング・システム・ユーザーは、表 3-9 に示された環境変数を設定（または設定解除）する必要があります。

表 3-9 Microsoft Windows の環境変数のまとめ

環境変数	設定または設定解除
ORACLE_HOME および ORACLE_SID	影響なし（インストーラがこの 2 つの環境変数を設定解除する）
PATH	長さを 1023 文字以下にする必要がある。
TNS_ADMIN	設定しない。
TEMP	オプション。設定解除すると、デフォルトで C:\%temp に設定される。

### 3.11.1 環境変数の設定 (Windows)

Windows で環境変数を設定する手順は次のとおりです。

1. コントロール パネルの「システム」を表示します。

Windows 2000: 「スタート」 → 「設定」 → 「コントロール パネル」 → 「システム」を選択します。

Windows 2003: 「スタート」 → 「コントロール パネル」 → 「システム」を選択します。

Windows XP: 「スタート」 → 「コントロール パネル」を選択し、「システム」をダブルクリックします。

2. 「詳細」タブをクリックします。
3. 「環境変数」をクリックします。
4. 変数の値を変更するには、変数を選択し、「編集」をクリックします。

### 3.11.2 ORACLE\_HOME および ORACLE\_SID

インストーラを起動すると、ORACLE\_HOME および ORACLE\_SID 環境変数が、設定されているかどうかに関係なく設定解除されます。

### 3.11.3 PATH および CLASSPATH

PATH 環境変数は、1023 文字以内で指定する必要があります。この文字数を超えると、インストーラが失敗する場合があります。

### 3.11.4 TEMP

インストール中、インストーラは一時ディレクトリに一時ファイルを書込む必要があります。デフォルトの一時ディレクトリは、C:\temp です。

インストーラで C:\temp 以外のディレクトリが使用されるようにするには、TEMP 環境変数を代替ディレクトリのフルパスに設定します。

この環境変数を設定せず、デフォルトのディレクトリに十分な領域がない場合、環境設定が設定されていないというエラー・メッセージがインストーラによって表示されます。異なるディレクトリを指すように環境変数を設定するか、またはデフォルトのディレクトリに十分な領域を解放してください。どちらの場合も、インストールをやり直す必要があります。

## 3.12 /etc/hosts ファイル (Solaris) と %WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル (Windows)

Windows の hosts ファイルは %WINDIR%\system32\drivers\etc\ にあります。

%WINDIR% は、Windows オペレーティング・システム・ディレクトリを指定します。一般に、Windows 2003 の場合は C:\WINDOWS、Windows 2000 の場合は C:\WINNT です。

/etc/hosts (Solaris) または %WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts (Microsoft Windows) ファイルの内容は、デフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所および Oracle Application Server Single Sign-On のホスト名に影響します。

これとは別に、hosts ファイルを編集することなく必要な値を入力する方法もあります。詳細は、Oracle Application Server のインストール・ガイドを参照してください。

## 3.13 ネットワーク関連トピック（Microsoft Windows および Solaris）

一般に、Oracle Business Intelligence をインストールするコンピュータはネットワークに接続されており、Oracle Business Intelligence のインストールを格納するローカル・ストレージ、ディスプレイ・モニター、および CD-ROM または DVD-ROM ドライブを備えています。

この項では、一般的なシナリオとは一致しないコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする手順について説明します。取り上げるケースは次のとおりです。

- [第 3.13.1 項「DHCP コンピュータへのインストール」](#)
- [第 3.13.2 項「マルチホーム（マルチ IP）コンピュータへのインストール」](#)
- [第 3.13.3 項「複数の別名を持つコンピュータへのインストール」](#)
- [第 3.13.4 項「ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール」](#)
- [第 3.13.5 項「後でネットワークから切断する静的 IP コンピュータへのインストール」](#)
- [第 3.13.6 項「ループバック・アダプタのインストール」](#)
- [第 3.13.7 項「ハード・ドライブへの CD-ROM または DVD-ROM のコピー、およびハード・ドライブからのインストール」](#)
- [第 3.13.8 項「リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール」](#)
- [第 3.13.9 項「リモート・コントロール・ソフトウェアによるリモート・コンピュータへのインストール」](#)
- [第 3.13.10 項「NFS がマウントされたストレージへのインストール」](#)
- [第 3.13.11 項「1 つのインストールからの複数のインスタンスの実行」](#)
- [第 3.13.12 項「NIS および NIS+ のサポート」](#)
- [第 3.13.13 項「Java 用フォント・パッケージ」](#)
- [第 3.13.14 項「複数のネットワーク・カードを持つコンピュータへのインストール」](#)

### 3.13.1 DHCP コンピュータへのインストール

**DHCP コンピュータで Oracle Business Intelligence を実行する場合の制限事項:** DHCP コンピュータ上の Oracle Business Intelligence インスタンスは、他のコンピュータで実行されているインスタンスと通信できません。互いに通信する必要があるインスタンスは、すべて同じコンピュータで実行する必要があります。クライアントに対する制限はありません。他のコンピュータのクライアントは、ネットワーク上で DHCP コンピュータを特定できれば、そのコンピュータで実行されているインスタンスにアクセスできます。

DHCP コンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする前に、次の手順を実行します。

1. DHCP コンピュータにループバック・アダプタをインストールします。

ループバック・アダプタをインストールするときに、そのアダプタによってコンピュータにローカル IP が割り当てられます。ループバック・アダプタとローカル IP アドレスを保持することで、インストール後に IP アドレスが変わるたびに（DHCP のため）chgiphost スクリプトを実行する必要がなくなります。

#### プライマリ・ネットワーク・アダプタとなるアダプタ

Windows では、ループバック・アダプタが一種のネットワーク・アダプタと見なされます。コンピュータにループバック・アダプタをインストールすると、少なくともネットワーク・アダプタとループバック・アダプタの 2 つのネットワーク・アダプタがコンピュータに装備されます。

Windows では、ループバック・アダプタをプライマリ・アダプタとして使用する必要があります。プライマリ・アダプタは、アダプタをインストールした順序で決定されます。



- Windows 2000 では、最後にインストールしたアダプタがプライマリ・アダプタになります。ループバック・アダプタのみをインストールすることも可能です。ただし、ループバック・アダプタをインストールした後に追加でネットワーク・アダプタをインストールする場合は、ループバック・アダプタをいったん削除して再インストールします。

各種 Windows プラットフォームにループバック・アダプタをインストールする方法については、[第 3.13.6 項「ループバック・アダプタのインストール」](#)を参照してください。

## 2. Oracle Business Intelligence をインストールする各コンピュータに ping します。

- ホスト名と完全修飾名のみを使用して、対象のコンピュータに対しそのコンピュータ自体から ping します。

たとえば、mycomputer というコンピュータにループバック・アダプタをインストールする場合、次のようにチェックします。

```
prompt> ping mycomputer           Ping itself using just the hostname.
Reply from 10.10.10.10             Returns local IP.
prompt> ping mycomputer.mydomain.com Ping using a fully qualified name.
Reply from 10.10.10.10             Returns local IP.
```

---

**注意：** コンピュータに対してそのコンピュータ自体から ping すると、ping コマンドによりローカル IP (ループバック・アダプタの IP) が返されます。コンピュータのネットワーク IP は返されません。

---

- ホスト名および完全修飾名のみを使用して、ネットワーク上の他のコンピュータから ping します。

この場合は、ping コマンドによりコンピュータのネットワーク ID が返されます。

```
prompt> ping mycomputer           Ping using the hostname.
Reply from 139.185.140.166         Returns network IP.
prompt> ping mycomputer.mydomain.com Ping using a fully qualified name.
Reply from 139.185.140.166         Returns network IP.
```

ping が失敗した場合は、ネットワーク管理者に連絡してください。

### 3.13.2 マルチホーム (マルチ IP) コンピュータへのインストール

マルチホーム・コンピュータには、複数の IP アドレスが関連付けられています。これは、コンピュータに複数のネットワーク・カードを搭載することで実現されます。各 IP アドレスにはホスト名が関連付けられています。また、ホスト名に別名を設定することもできます。Oracle Universal Installer では、ホスト名を検出するために、デフォルトで ORACLE\_HOSTNAME 環境変数の設定が使用されます。ORACLE\_HOSTNAME が設定されていない場合に、複数のネットワーク・カードを搭載したコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールすると、/etc/hosts ファイル (Solaris) または Microsoft Windows の hosts ファイル (一般的な場所は `DRIVE_LETTER:\WINDOWS\system32\drivers\etc`) 内の最初の名前を使用してホスト名が決定されます。

クライアントは、このホスト名 (またはこのホスト名の別名) を使用してコンピュータにアクセスすることが必要です。チェックするには、クライアント・コンピュータから短縮名 (ホスト名のみ) および完全名 (ホスト名とドメイン名) を使用してホスト名に ping します。どちらも成功する必要があります。

Microsoft Windows での環境変数の設定については、[第 3.11.1 項「環境変数の設定 \(Windows\)」](#)を参照してください。



### 3.13.3 複数の別名を持つコンピュータへのインストール

複数の別名を持つコンピュータは、単一の IP と複数の別名でネーミング・サービスに登録されたコンピュータを参照します。ネーミング・サービスによって、これらの別名が同じコンピュータへと解決されます。

このようなコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールするには、事前に次の作業が必要です。

- コンピュータにループバック・アダプタをインストールします。
- ループバック・アダプタがプライマリ・ネットワーク・アダプタであることを確認します。

ループバック・アダプタによって、Oracle Business Intelligence がホスト名をクエリーしたときに常に同じ名前が返されるようになります (クエリーがローカルに実行されるため)。ループバック・アダプタがないと、クエリーからコンピュータのいずれかの別名が返される場合があります (クエリーがネーミング・サービスから応答を受け取るため)。

Windows がプライマリ・アダプタを決定する方法については、「[プライマリ・ネットワーク・アダプタとなるアダプタ](#)」を参照してください。

ループバック・アダプタをインストールする手順については、[第 3.13.6 項「ループバック・アダプタのインストール」](#)を参照してください。

### 3.13.4 ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール

ラップトップなどのネットワークに接続されていないコンピュータにも Oracle Business Intelligence をインストールできます。ネットワークに接続されていないコンピュータは他のコンピュータにアクセスできないため、必要なすべてのコンポーネントをインストールする必要があります。

ネットワークに接続されていないコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールし、インストール後もそのコンピュータをネットワークに接続しない場合は、ネットワークに接続されていないユーザーのコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールします。

---

**注意：** ネットワークに接続されていないコンピュータにインストールする場合は、Reports Server にアクセスできるように Common Object Service (COS) ネーミング・サービスを構成します。ネーミング・サービスの構成については、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

---

ただし、インストール後にコンピュータをネットワークに接続する場合は、このコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする前に、次の手順を実行してください。

1. コンピュータにループバック・アダプタをインストールします。[第 3.13.6 項「ループバック・アダプタのインストール」](#)を参照してください。

ループバック・アダプタとローカル IP アドレスで、ネットワークに接続されたコンピュータがシミュレートされます。コンピュータをネットワークに接続すると、Oracle Business Intelligence でローカル IP とホスト名が使用されます。

2. ホスト名と完全修飾名のみを使用して、対象のコンピュータに対しそのコンピュータ自体から ping します。

たとえば、mycomputer というコンピュータにループバック・アダプタをインストールする場合、次のようにチェックします。

```
prompt> ping mycomputer           Ping itself using just the hostname.
Reply from 10.10.10.10             Returns local IP.
prompt> ping mycomputer.mydomain.com Ping using a fully qualified name.
Reply from 10.10.10.10             Returns local IP.
```

---

**注意：** コンピュータに対してそのコンピュータ自体から ping すると、ping コマンドによりローカル IP (ループバック・アダプタの IP) が返されます。

---

ping が失敗した場合は、ネットワーク管理者に連絡してください。

### インストール後のコンピュータのネットワークへの接続

インストール後にコンピュータをネットワークに接続すると、コンピュータ上の Oracle Business Intelligence インスタンスがネットワーク上の他のインスタンスと連動するようになります。コンピュータにはループバック・アダプタがインストールされているはずですが、接続するネットワークに応じて、コンピュータは静的 IP または DHCP を使用できます。

詳細は『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

## 3.13.5 後でネットワークから切断する静的 IP コンピュータへのインストール

ネットワークに接続された静的 IP アドレスを使用するコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールし、ネットワークから切断した後もそのコンピュータで Oracle Business Intelligence を実行できるようにする場合は、Oracle Business Intelligence をインストールする前に次の手順を実行します。

1. コンピュータにループバック・アダプタをインストールします。詳細は、[第 3.13.6 項「ループバック・アダプタのインストール」](#)を参照してください。  
  
ループバック・アダプタがないと、ネットワークからコンピュータを切断した時点で静的 IP を使用できなくなるために Oracle Business Intelligence が正しく機能しなくなります。
2. ループバック・アダプタがプライマリ・ネットワーク・アダプタであることを確認します。[3-21 ページの「プライマリ・ネットワーク・アダプタとなるアダプタ」](#)を参照してください。チェックするには、対象のコンピュータに対し、そのコンピュータ自体から (1) ホスト名のみ、および (2) 完全修飾名を使用して ping します。

たとえば、mycomputer というコンピュータにループバック・アダプタをインストールした場合は、次のコマンドを実行します。

```
prompt> ping mycomputer                Ping itself using just the hostname.
Reply from 10.10.10.10                  Returns loopback adapter IP.
prompt> ping mycomputer.mydomain.com    Ping using a fully qualified name.
Reply from 10.10.10.10                  Returns loopback adapter IP.
```

コンピュータに対してそのコンピュータ自体から ping すると、ping コマンドによりループバック・アダプタの IP が返されます。コンピュータのネットワーク IP は返されません。

上記の手順は、コンピュータが静的 IP と DHCP のどちらを使用しているかに関係なく必要です。DHCP コンピュータの場合は、すでに説明したようにループバック・アダプタが必要です。[第 3.13.1 項「DHCP コンピュータへのインストール」](#)を参照してください。

ネットワークからコンピュータを切断すると、そのコンピュータはどのネットワーク・リソースにもアクセスできなくなります。

## 3.13.6 ループバック・アダプタのインストール

ループバック・アダプタは、次の場合に必要です。

- DHCP コンピュータにインストールする場合 ([第 3.13.1 項「DHCP コンピュータへのインストール」](#)を参照)。
- ネットワークに接続されていないコンピュータにインストールし、インストール後にそのコンピュータをネットワークに接続する予定の場合 ([第 3.13.4 項「ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール」](#)を参照)。

ループバック・アダプタをインストールする手順は、Windows のバージョンによって異なります。

- [第 3.13.6.1 項「ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック」](#)
- [第 3.13.6.2 項「ループバック・アダプタのインストール（Windows 2000）」](#)
- [第 3.13.6.3 項「ループバック・アダプタのインストール（Windows 2003/Windows XP）」](#)
- [第 3.13.6.4 項「ループバック・アダプタの削除（Windows 2000/Windows 2003/Windows XP）」](#)

### 3.13.6.1 ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック

ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかをチェックするには、`ipconfig /all` コマンドを実行します。

```
prompt> ipconfig /all
```

ループバック・アダプタがインストールされている場合は、ループバック・アダプタの一連の値を示すセクションが表示されます。次に例を示します。

```
Ethernet adapter Local Area Connection 2:
  Connection-specific DNS Suffix . . :
  Description . . . . . : Microsoft Loopback Adapter
  Physical Address. . . . . : 02-00-4C-4F-4F-50
  DHCP Enabled. . . . . : Yes
  Autoconfiguration Enabled . . . : Yes
  Autoconfiguration IP Address. . . : 169.254.25.129
  Subnet Mask . . . . . : 255.255.0.0
```

### 3.13.6.2 ループバック・アダプタのインストール（Windows 2000）

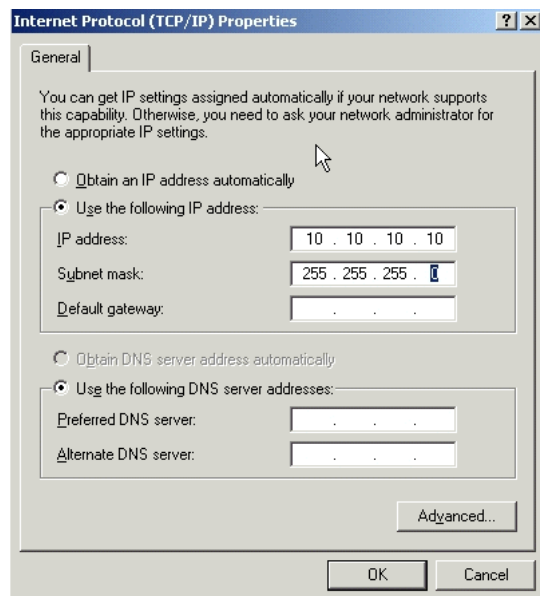
Windows 2000 では、最後にインストールされたネットワーク・アダプタが報告されます。このため、ループバック・アダプタをインストールした後に追加でネットワーク・アダプタをインストールする場合は、ループバック・アダプタをいったん削除して再インストールしてください。ループバック・アダプタを、コンピュータに最後にインストールされたネットワーク・アダプタにする必要があります。

Windows 2000 にループバック・アダプタをインストールする手順は次のとおりです。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」を選択します。
2. 「ハードウェアの追加と削除」をダブルクリックして、ハードウェアの追加と削除ウィザードを開始します。最初のページが表示されます。
3. 最初のページで、「次へ」をクリックして、「ハードウェアに関する作業の選択」ページを表示します。
4. 「ハードウェアに関する作業の選択」ページで、「デバイスの追加 / トラブルシューティング」を選択します。
5. 「次へ」をクリックして、「ハードウェア デバイスの選択」ページを表示します。
6. 「ハードウェア デバイスの選択」ページで、「新しいデバイスの追加」を選択します。
7. 「次へ」をクリックして、「新しいハードウェアの検索」ページを表示します。
8. 「新しいハードウェアの検索」ページで、「いいえ、一覧からハードウェアを選択します」を選択します。
9. 「次へ」をクリックして、「ハードウェアの種類」ページを表示します。
10. 「ハードウェアの種類」ページで、「ネットワーク アダプタ」を選択します。
11. 「次へ」をクリックして、「ネットワーク アダプタの選択」ページを表示します。

12. 「ネットワーク アダプタの選択」 ページ：
  - a. 「製造元」の一覧から「Microsoft」を選択します。
  - b. 「ネットワーク アダプタ」の一覧から「Microsoft Loopback Adapter」を選択します。
13. 「次へ」をクリックして、「ハードウェアのインストールの開始」 ページを表示します。
14. 「ハードウェアのインストールの開始」 ページで、「次へ」をクリックして、「ハードウェアの追加と削除ウィザードの完了」 ページを表示します。
15. 「ハードウェアの追加と削除ウィザードの完了」 ページで、「完了」をクリックします。
16. デスクトップの「マイ ネットワーク」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。「ネットワークとダイヤルアップ接続」コントロール・パネルが表示されます。
17. 作成したばかりの接続を右クリックします。これは通常、ローカル エリア接続 2 となります。「プロパティ」を選択します。
18. 「全般」タブで「インターネット プロトコル (TCP/IP)」を選択して、「プロパティ」をクリックします。
19. 「プロパティ」ダイアログ・ボックス（図 3-3）に、次の値を入力します。  
 IP アドレス：ループバック・アダプタ用にルーティング不可能な IP を入力します。次のルーティング不可能なアドレスをお薦めします。  
 192.168.x.x (x は、1 ～ 255 までの任意の値)  
 10.10.10.10  
 サブネット マスク：255.255.255.0 と入力します。  
 他のフィールドはすべて空欄のままにします。  
 「OK」をクリックします。

図 3-3 ループバック・アダプタの値を表示する「インターネット プロトコル (TCP/IP) のプロパティ」ダイアログ・ボックス



20. ローカル エリア接続 2 の「プロパティ」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。
21. コンピュータを再起動します。

22. C:\winnt\system32\drivers\etc\hosts ファイルに、次のフォーマットで行を追加します。

```
IP_address    hostname.domainname    hostname
```

この行は、ファイル内の localhost 行の後にある必要があります。

IP\_address を、手順 19 で入力したルーティング不可能な IP アドレスで置き換えます。

hostname および domainname を該当する値に書き換えます。

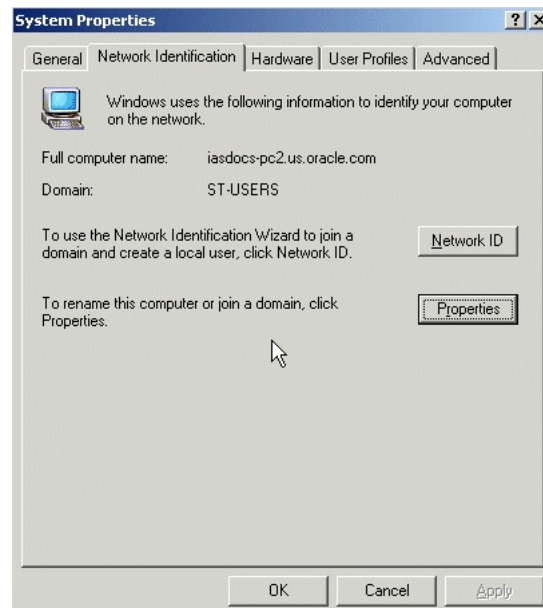
例：

```
10.10.10.10    mycomputer.mydomain.com    mycomputer
```

23. ネットワーク構成を確認します。

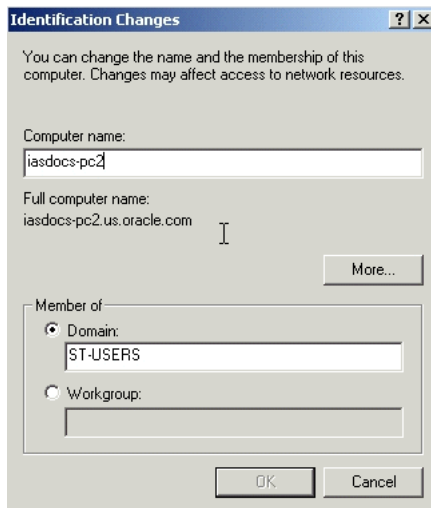
- a. コントロール・パネルの「システム」を開き、「ネットワーク ID」タブを選択します。「フル コンピュータ名」に、ホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します (図 3-4)。

図 3-4 コントロール・パネルの「システム」、 「ネットワーク ID」 タブ



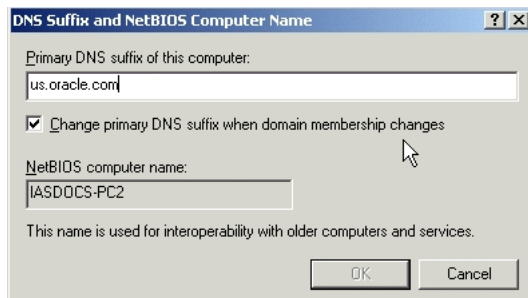
- b. 「プロパティ」をクリックします。「コンピュータ名」にはホスト名が表示され、「フルコンピュータ名」にはホスト名とドメイン名が表示されます (図 3-5)。

図 3-5 「識別の変更」ダイアログ・ボックス



- c. 「詳細」をクリックします。図 3-6 のように、「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」フィールドにドメイン名が表示されます。

図 3-6 「DNS サフィックスと NetBIOS コンピュータ名」ダイアログ・ボックス



### 3.13.6.3 ループバック・アダプタのインストール（Windows 2003/Windows XP）

Windows 2003 または Windows XP にループバック・アダプタをインストールする手順は次のとおりです。

1. 「スタート」 → 「コントロールパネル」を選択します。
2. 「ハードウェアの追加」をダブルクリックします。ハードウェアの追加ウィザードが開始されます。
3. 最初のページで、「次へ」をクリックして、「ハードウェアは接続されていますか？」ページを表示します。
4. 「ハードウェアは接続されていますか？」ページで、「はい、ハードウェアを接続しています」を選択します。
5. 「次へ」をクリックして、「次のハードウェアは既にコンピュータ上にインストールされています」ページを表示します。
6. 「次のハードウェアは既にコンピュータ上にインストールされています」ページで、「新しいハードウェア デバイスの追加」を選択します。
7. 「次へ」をクリックして、「ウィザードで、ほかのハードウェアをインストールできます」ページを表示します。

8. 「ウィザードで、ほかのハードウェアをインストールできます」 ページで、「**一覧から選択したハードウェアをインストールする**」を選択します。
9. 「**次へ**」をクリックして、「次の一覧からインストールするハードウェアの種類を選択してください」 ページを表示します。
10. 「次の一覧からインストールするハードウェアの種類を選択してください」 ページで、「**ネットワーク アダプタ**」を選択します。
11. 「**次へ**」をクリックして、「ネットワーク アダプタの選択」 ページを表示します。
12. 「ネットワーク アダプタの選択」 ページ：
  - a. 「**製造元**」の一覧から「**Microsoft**」を選択します。
  - b. 「**ネットワーク アダプタ**」の一覧から「**Microsoft Loopback Adapter**」を選択します。
13. 「**次へ**」をクリックして、「ハードウェアをインストールする準備ができました」 ページを表示します。
14. 「ハードウェアをインストールする準備ができました」 ページで、「**次へ**」をクリックして、「ハードウェアの追加ウィザードの完了」 ページを表示します。
15. 「ハードウェアの追加ウィザードの完了」 ページで、「**完了**」をクリックします。
16. (Windows 2003 のみ) コンピュータを再起動します。
17. デスクトップの「**マイ ネットワーク**」を右クリックして、「**プロパティ**」を選択します。コントロール・パネルの「ネットワーク接続」が表示されます。
18. 作成したばかりの接続を右クリックします。これは通常、ローカル エリア接続 2 となります。「**プロパティ**」を選択します。
19. 「**全般**」タブで「**インターネット プロトコル (TCP/IP)**」を選択して、「**プロパティ**」をクリックします。
20. 「プロパティ」ダイアログ・ボックス (図 3-3) に、次の値を入力します。

**IP アドレス** : ループバック・アダプタ用にルーティング不可能な IP を入力します。次のルーティング不可能なアドレスをお薦めします。

192.168.x.x (x は、1 ~ 255 までの任意の値)

10.10.10.10

**サブネット マスク** : 255.255.255.0 と入力します。

他のフィールドはすべて空欄のままにします。

「**OK**」をクリックします。

21. ローカル エリア接続 2 の「プロパティ」ダイアログ・ボックスで「**OK**」をクリックします。
22. コンピュータを再起動します。
23. C:\winnt\system32\drivers\etc\hosts ファイルに、次のフォーマットで行を追加します。

```
IP_address    hostname.domainname  hostname
```

この行は、ファイル内の localhost 行の後にある必要があります。

IP\_address を、手順 20 で入力したルーティング不可能な IP アドレスで置き換えます。

hostname および domainname を該当する値に書き換えます。

例 :

```
10.10.10.10    mycomputer.mydomain.com  mycomputer
```



24. ネットワーク構成を確認します。

- a. コントロール・パネルの「システム」を開き、「コンピュータ名」タブを選択します。「フル コンピュータ名」に、ホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します。
- b. 「変更」をクリックします。「コンピュータ名」にホスト名が表示され、「フル コンピュータ名」にホスト名とドメイン名が表示されます (図 3-5)。
- c. 「詳細」をクリックします。「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」に、ドメイン名が表示されます (図 3-6)。

### 3.13.6.4 ループバック・アダプタの削除 (Windows 2000/Windows 2003/Windows XP)

Windows 2000 または Windows XP でループバック・アダプタを削除する手順は次のとおりです。

1. コントロール パネルの「システム」を表示します。

Windows 2000: 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「システム」をダブルクリックします。

Windows 2003: 「スタート」→「コントロール パネル」→「システム」を選択します。

Windows XP: 「スタート」→「コントロール パネル」を選択し、「システム」をダブルクリックします。

2. 「ハードウェア」タブで、「デバイス マネージャ」をクリックします。
3. 「デバイス マネージャ」ウィンドウで、「ネットワーク アダプタ」を開きます。「Microsoft Loopback Adapter」が表示されます。
4. 「Microsoft Loopback Adapter」を右クリックし、「削除」を選択します。

## 3.13.7 ハード・ドライブへの CD-ROM または DVD-ROM のコピー、およびハード・ドライブからのインストール

Oracle Business Intelligence の CD-ROM または DVD-ROM からインストールするかわりに、CD-ROM または DVD-ROM の内容をハード・ドライブにコピーし、ハード・ドライブからインストールすることができます。ネットワークで Oracle Business Intelligence のインスタンスを多数インストールする場合や、Oracle Business Intelligence をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD-ROM ドライブがない場合は、ハード・ドライブからインストールする方が簡単です。

リモートの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからインストールすることもできます。第 3.13.8 項「リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール」を参照してください。

ハード・ドライブからインストールするときは、CD-ROM の交換を要求されません。ファイルが適切な場所にあれば、それらがすべて検出されます。

### 他のコンピュータからハード・ドライブへのアクセス

CD-ROM または DVD-ROM の内容をコピーしたハード・ドライブから、リモート・コンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする手順は次のとおりです。

1. ローカル・コンピュータでハード・ドライブを共有します。
2. Oracle Business Intelligence をインストールするコンピュータで、共有ハード・ドライブへのマッピングを行います。
3. Oracle Business Intelligence をインストールするリモート・コンピュータからインストーラを起動します。

インストーラにアクセスするには、マッピングされたドライブのドライブ文字を使用する必要がありますので注意してください (たとえば H:¥orawinfrs\_10\_1\_2¥setup.exe)。



汎用名前付け規則（UNC）の構文（`¥¥hostname¥sharename`）を使用してインストーラにアクセスすることはできません。

### CD-ROM をコピーするには

1. 親ディレクトリ（`orasolfrs` や `orawinfrs` など）を作成し、親ディレクトリの下に `Disk1` や `Disk2` などのサブディレクトリを作成します。サブディレクトリの名前は、`DiskN` にする必要があります（`N` は CD-ROM の番号）。
2. 各 CD-ROM の内容を、対応するディレクトリにコピーします。

```
prompt> cp -pr /cdrom_mount_point/10.1.2disk1/* /path/to/hard/drive/Disk1/
prompt> cp -pr /cdrom_mount_point/10.1.2disk2/* /path/to/hard/drive/Disk2/
... Repeat for each CD-ROM.
```

ファイルのコピーには、Windows エクスプローラまたはコマンドラインを使用できます。コマンドラインを使用する場合は、`xcopy` コマンドを使用できます。

次の例では、`E:` を CD-ROM ドライブと想定し、`C:¥orawinfrs¥DiskN` を CD-ROM のコピー先ディレクトリとしています。

```
E:¥> xcopy /e /i E:¥1012disk1 C:¥orawinfrs¥Disk1
E:¥> xcopy /e /i E:¥1012disk2 C:¥orawinfrs¥Disk2
... Repeat for each CD-ROM.
```

コピーされたファイルからインストーラを実行するには、`Disk1` ディレクトリから `runInstallersetup.exe` 実行可能ファイルを起動します。これは、Oracle Business Intelligence を実行することになるコンピュータから実行します。

```
prompt> /path/to/hard/drive/Disk1/runInstaller
```

```
C:¥> cd orawinfrs¥Disk1
C:¥orawinfrs¥Disk1> setup.exe
```

### orasolfrs/orawinfrs ディレクトリを DVD-ROM からコピーするには

DVD-ROM の `orasolfrs` ディレクトリを、ハード・ディスクにコピーします。

```
prompt> cp -pr /dvd_mount_point/orasolfrs /path/to/hard/drive
```

`orawinfrs` ディレクトリは、Windows エクスプローラまたはコマンドラインでコピーできます。コマンドラインを使用する場合の手順は次のとおりです。

1. （オプション）`orawinfrs` ディレクトリをコピーするディレクトリを作成します。
2. `orawinfrs` ディレクトリを、DVD からハード・ディスクにコピーします。

この例では、`E:` を DVD-ROM ドライブと想定し、`C:¥orawinfrs` をコピー先のディレクトリとしています。

```
E:¥> xcopy /e /i E:¥orawinfrs C:¥orawinfrs
```

コピーされたファイルからインストーラを実行するには、Oracle Business Intelligence を実行する予定のコンピュータから `runInstallersetup.exe` 実行可能ファイルを起動します。

```
prompt> /path/to/hard/drive/orasolfrs/runInstaller
```

```
C:¥> cd orawinfrs
C:¥orawinfrs> setup.exe
```

### 3.13.8 リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール

Oracle Business Intelligence をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD ドライブがない場合は、リモートの CD-ROM または DVD ドライブからインストールを実行できます。次の作業が完了していることを確認します。

- リモートの CD-ROM または DVD-ROM ドライブを、NFS 経由で共有する必要があります。

CD-ROM または DVD-ROM ドライブを備えたリモート・コンピュータで、次の作業を行います。

1. CD-ROM: Oracle Business Intelligence の Disk 1 を、CD-ROM ドライブに挿入します。

DVD-ROM: Oracle Business Intelligence の DVD-ROM を、DVD-ROM ドライブに挿入します。

2. CD-ROM または DVD-ROM ドライブを共有します。

CD-ROM:

```
prompt> su
Password: root_password
# share -F nfs -o ro /cdrom/disk1
```

パス /cdrom/disk1 は、CD-ROM ドライブ内の CD-ROM のパスを指定しています。任意のパスを使用できます。

DVD-ROM:

```
prompt> su
Password: root_password
# share -F nfs -o ro /cdrom
```

パス /cdrom は、DVD-ROM ドライブ内の DVD-ROM のパスを指定しています。任意のパスを使用できます。

ローカル・コンピュータで、CD-ROM または DVD-ROM にアクセスし、次のようにインストーラを実行します。

CD-ROM:

```
prompt> /net/remote_computer_hostname/cdrom/disk1/runInstaller
```

DVD-ROM:

```
prompt> /net/remote_computer_hostname/cdrom/orasolfrs/runInstaller
```

*remote\_computer\_hostname* は、リモート・コンピュータの名前で置き換えてください。

- 次の CD-ROM の交換に関する記述は、DVD には該当しません。

インストーラから CD-ROM の交換を要求されたら、CD-ROM ドライブの共有を解除し、CD-ROM を取り出して要求された CD-ROM を挿入し、再び CD-ROM ドライブを共有する必要があります。共有を解除しないと、CD-ROM は取り出せません。

---

**注意：** CD-ROM を交換するときは、インストーラが実行している必要があります。CD-ROM を交換するときはインストーラを終了しないでください。インストーラを終了した場合、中止した時点から作業を継続することはできません。また、部分的に作成されたインストールは使用できず、場合によっては手動で削除する必要があります。

---

CD-ROM ドライブを備えたリモート・コンピュータで、次のコマンドを実行します。

```
prompt> su
Password: root_password
# unshare /cdrom/disk1
# eject cdrom
... Remove the CD-ROM, and insert the CD-ROM requested by the installer (for
... example, Disk 2).
... Share the CD-ROM.
# share -F nfs -o ro /cdrom/disk2
```

### リモート・コンピュータでの CD-ROM または DVD ドライブの共有

使用するリモートの CD-ROM または DVD ドライブで、共有アクセスが許可されている必要があります。これを設定するには、CD-ROM または DVD ドライブを備えたリモート・コンピュータで次の手順を実行します。

1. リモート・コンピュータに Administrator ユーザーでログオンします。
2. Windows エクスプローラを起動します。
3. CD-ROM または DVD ドライブのドライブ文字を右クリックし、「共有」（Windows 2000）または「共有とセキュリティ」（Windows 2003、Windows XP）を選択します。
4. 「共有」タブ（図 3-7）で次の作業を行います。

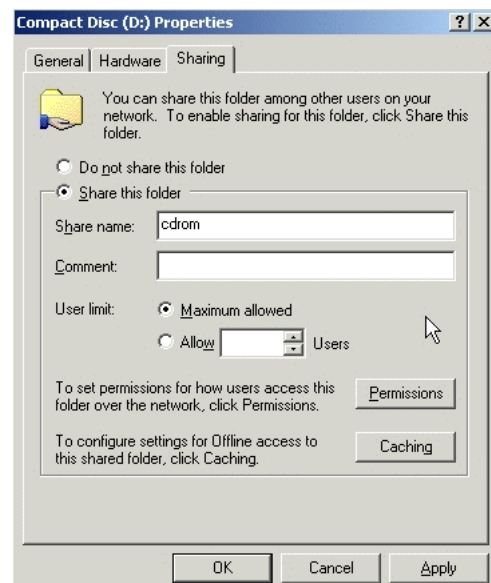
「このフォルダを共有する」を選択します。

「共有名」に、cdrom や dvd などの共有名を入力します。この名前は、ローカル・コンピュータで CD-ROM または DVD ドライブをマッピングするときに使用します。3-34 ページの手順 d を参照してください。

「アクセス許可」をクリックします。このフォルダにアクセスして Oracle Business Intelligence をインストールするユーザーには、少なくとも読取り権限が必要になります。

作業が完了したら「OK」をクリックします。

図 3-7 CD-ROM ドライブの共有



5. CD-ROM: Oracle Business Intelligence の Disk 1 を、CD-ROM ドライブに挿入します。  
DVD: Oracle Business Intelligence の DVD を、DVD ドライブに挿入します。

**ローカル・コンピュータでの CD-ROM または DVD ドライブのマッピング**

CD-ROM または DVD ドライブをマッピングしてインストーラを実行するには、ローカル・コンピュータで次の手順を実行します。

1. リモートの CD-ROM または DVD ドライブをマッピングします。
  - a. ローカル・コンピュータで Windows エクスプローラを起動します。
  - b. 「ツール」 → 「ネットワーク ドライブの割り当て」を選択します。「ネットワーク ドライブの割り当て」ダイアログ・ボックスが表示されます。
  - c. リモートの CD-ROM または DVD ドライブに使用するドライブ文字を選択します。
  - d. 「フォルダ」に、リモートの CD-ROM または DVD ドライブの場所を次のフォーマットで入力します。

`\\¥remote_hostname¥share_name`

`remote_hostname` は、CD-ROM または DVD ドライブを備えたリモート・コンピュータの名前で置き換えてください。

`share_name` は、3-33 ページの手順 4 で入力した共有名で置き換えてください。

例: `\\¥computer2¥cdrom`

- e. リモート・コンピュータに別のユーザーとして接続する必要がある場合は、「異なるユーザー名」をクリックし、ユーザー名を入力します。
    - f. 「完了」をクリックします。
  2. マッピングした CD-ROM または DVD ドライブからインストーラを実行します。
- インストーラから CD-ROM の交換を要求されたら、CD-ROM を取り出し、要求された CD-ROM を挿入します。

---

**注意：** CD-ROM を交換するときは、インストーラが実行している必要があります。CD-ROM を交換するときはインストーラを終了しないでください。インストーラを終了した場合、中止した時点から作業を継続することはできません。また、部分的に作成されたインストールは使用できず、場合によっては手で削除する必要があります。

---

### 3.13.9 リモート・コントロール・ソフトウェアによるリモート・コンピュータへのインストール

インストーラをリモート・コンピュータ (`remote_computer`) で実行し、その画面をローカル・コンピュータ (`local_computer`) に表示することができます。Oracle Business Intelligence はリモート・コンピュータにインストールされます。

1. `remote_computer` を `local_computer` に表示できるようにします。ローカル・コンピュータのコンソールで、次のコマンドを実行します。

```
local_computer> xhost +remote_computer
```

`xhost` を実行しないと、インストーラ起動時に「Failed to connect to server」、「Connection refused by server」、「Can't open display」などの Xlib エラーが表示される場合があります。

2. `local_computer` で、`remote_computer` へのリモート・ログインを実行します (telnet または `rlogin` を使用)。第 3.8 項「Solaris のオペレーティング・システム・ユーザー」で説明されているように、`oracle` ユーザーでログオンします。第 3.10 項「Solaris の環境変数」で説明されているように、ユーザーが環境変数を正しく設定していることを確認します。

```
local_computer> rlogin -l oracle remote_computer.mydomain.com
- OR -
local_computer> telnet remote_computer.mydomain.com
```

- remote\_computer の DISPLAY 環境変数が local\_computer を指すように設定します。

例 (C シェル) :

```
remote_computer> setenv DISPLAY local_computer.mydomain.com:0.0
```

例 (Bourne または Korn シェル) :

```
remote_computer> DISPLAY=local_computer.mydomain.com:0.0; export DISPLAY
```

- インストーラを実行します。

---

**注意：** PC X エミュレータが PseudoColor カラー・モデルまたは PseudoColor ビジュアルをサポートしている場合は、このエミュレータを使用してインストーラを実行できます。PseudoColor ビジュアルを使用するように PC X エミュレータを設定し、インストーラを起動します。カラー・モデルやビジュアルの設定を変更する方法については、X エミュレータのドキュメントを参照してください。

---

Oracle Business Intelligence をインストールして実行するリモート・コンピュータ (つまり Oracle Business Intelligence コンポーネントを実行する予定の、ハード・ドライブを備えたリモート・コンピュータ) に物理的にアクセスできない場合でも、VNC や Symantec pcAnywhere などのリモート・コントロール・ソフトウェアがあれば、そのコンピュータでインストールを実行できます。リモート・コントロール・ソフトウェアは、ローカル・コンピュータでも実行する必要があります。

リモート・コンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールするには、次の 2 つの方法があります。

- Oracle Business Intelligence CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーしておくと、ハード・ドライブからインストールできます。
- ローカル・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブに CD-ROM または DVD を挿入すると、CD-ROM または DVD からインストールできます。

#### ハード・ドライブからのインストール

Oracle Business Intelligence CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーしておくと、ハード・ドライブからインストールできます。ハード・ドライブからインストールする手順は次のとおりです。

1. リモート・コントロール・ソフトウェアがインストールされていて、リモートおよびローカル・コンピュータで実行されていることを確認します。
2. Oracle Business Intelligence の CD-ROM または DVD をコピーしたハード・ドライブを共有します。
3. リモート・コンピュータで、共有ハード・ドライブにドライブ文字をマッピングします。リモート・コントロール・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータでこれを実行します。
4. リモート・コントロール・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータでインストーラを実行します。共有ハード・ドライブからインストーラにアクセスできます。

#### リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール

ローカル・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブに CD-ROM または DVD を挿入すると、CD-ROM または DVD からインストールできます。これは、[第 3.13.8 項「リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール」](#)で説明したシナリオに似ています。リモートの CD-ROM または DVD からインストールする手順は次のとおりです。

1. リモート・コントロール・ソフトウェアがインストールされていて、リモートおよびローカル・コンピュータで実行されていることを確認します。

- ローカル・コンピュータで、CD-ROM または DVD ドライブを共有します。

リモート・コンピュータで、共有 CD-ROM または DVD ドライブにドライブ文字をマッピングします。リモート・コントロール・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータでこれを実行します。

上記の手順については、[第 3.13.8 項「リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール」](#)を参照してください。

- リモート・コントロール・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータでインストーラを実行します。CD-ROM または DVD 共有ドライブからインストーラにアクセスできます。

### 3.13.10 NFS がマウントされたストレージへのインストール

標準の NFS を使用する Sun コンピュータでは、Oracle Business Intelligence をインストールして実行することができません。Network Appliance (NetApp) Filers などの、NFS がマウントされた認定ストレージ・システムを使用する必要があります。Oracle Business Intelligence は、NFS がマウントされたストレージ・システムでの実行を承認されています。

NetApp システムは、少なくともリモート・インストール・ユーザーとリモート root ユーザーにエクスポートする必要があります。これは、`exportfs` コマンドで実行できます。

```
prompt> exportfs -i /vol/vol1
```

あらゆる更新について最新の動作保証リストを確認するには、OTN (<http://www.oracle.com/technology>) にアクセスしてください。

### 3.13.11 1 つのインストールからの複数のインスタンスの実行

Oracle Business Intelligence のコンポーネントは、インストール先のコンピュータだけで実行されるようになっています。リモート・コンピュータから NFS 経由でファイルにアクセスできる場合でも、それらのコンピュータでコンポーネントを実行することはできません。

### 3.13.12 NIS および NIS+ のサポート

NIS および NIS+ 環境で、Oracle Business Intelligence をインストールして実行することができます。これらの環境の詳細は、Oracle Application Server のインストレーション・ガイドを参照してください。

### 3.13.13 Java 用フォント・パッケージ

異なるロケールに異なる言語セットが必要になる場合があります。Solaris の Java 用フォント・パッケージの場合は、すべてのロケールに SUNW1of と SUNWxwfont の両方のフォント・パッケージが必要です。ロケールによっては、さらに別のフォント・パッケージが必要になります。Solaris フォント・パッケージのリストは、<http://java.sun.com/j2se/1.4.1/font-requirements.html> を参照してください。

### 3.13.14 複数のネットワーク・カードを持つコンピュータへのインストール

複数のネットワーク・カードを持つコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする場合は、`/etc/hosts` ファイル内の最初の名前が使用されます。場合によっては、このファイルの行の順序を変更して、必要なホスト名が最初に来るようにする必要があります。インストール後に、ファイルを元の状態に戻すこともできます。

## 3.14 インストーラによって実行される前提条件チェック (Microsoft Windows および Solaris)

表 3-10 には、Solaris でインストーラによって実行されるチェックが示されています。

表 3-10 Solaris でインストーラによって実行される前提条件チェック

項目	説明
CPU	CPU が最小スピードの要件を満たしていることをチェックします。
オペレーティング・システムのバージョン	サポートされているバージョンについては、第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」を参照してください。
オペレーティング・システムのパッチ	必要なパッチのリストは、第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」を参照してください。
オペレーティング・システムのパッケージ	必要なパッケージのリストは、第 3.3 項「オペレーティング・システム・パッケージ (Solaris)」を参照してください。
オペレーティング・システムのカーネル・パラメータ	必要なカーネル・パラメータのリストは、第 3.4 項「カーネル・パラメータ (Solaris)」を参照してください。
メモリー	推奨値は、第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」を参照してください。
スワップ領域	推奨値は、第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」を参照してください。
TMP 領域	推奨値は、第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」を参照してください。
インスタンス名	Oracle Business Intelligence をインストールしているコンピュータが同じ名前のインスタンスをすでに持っているかどうかチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリの名前	Oracle ホーム・ディレクトリの名前に空白が含まれていないかどうかチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリのパス	Oracle ホーム・ディレクトリのパスが 127 文字未満かどうかチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリの内容	Oracle ホーム・ディレクトリにインストールを妨げる可能性があるファイルが含まれていないかどうかチェックされます。

表 3-10 Solaris でインストーラによって実行される前提条件チェック（続き）

項目	説明
Oracle ホーム・ディレクトリ	<p>Oracle Developer Suite を含んでいる Oracle ホームで中間層を拡張またはインストールする場合を除き、Oracle Business Intelligence は新しいディレクトリにインストールする必要があります。許可されないインストールの例は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を 8.0、8i、9.0.1 または 9.2 のデータベースの Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を Oracle Management Service の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を Oracle Collaboration Suite の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を Oracle HTTP Sever のスタンドアロンの Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を OracleAS Web Cache のスタンドアロンの Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を Oracle9i Developer Suite 9.0.2 の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を Oracle Application Server Containers for J2EE のスタンドアロンの Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を Oracle9iAS 1.0.2.2 の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g Forms Services および Reports Services 中間層を Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 中間層の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Developer Kits 10g を OracleAS Infrastructure 9.0.2 または 10g の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Developer Kits 10g を Oracle9iAS 中間層 9.0.2 または 9.0.3 の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Developer Kits 10g を Oracle Developer Suite 9.0.2 または 10g の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Infrastructure 10g を Oracle9iAS 9.0.2 の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Infrastructure 10g を Oracle Application Server 10g Forms Services および Reports Services 中間層または OracleAS Developer Kits 10g の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Infrastructure 10g を Oracle Developer Suite 9.0.2 または 10g の Oracle ホームにインストールする</li> </ul>
ポート 1521	<p>あらゆるバージョンのデータベース・リスナーを含めたアプリケーションによってポート 1521 が使用されている場合は、インストーラから警告が表示されます。ポート 1521 を使用するアプリケーションを停止し、警告ダイアログ・ボックスで「再試行」をクリックする必要があります。</p> <p>データベース・リスナーがポート 1521 を使用している場合は、それをメタデータ・リポジトリ・データベースに使用できる場合があります。</p> <p>別のアプリケーションがポート 1521 を使用している場合は、そのアプリケーションを停止するか、別のポートを使用するように再構成します。あるいは、1521 以外のポートを使用するようにデータベース・リスナーを変更できますが、これはインストール後でないと実行できません。詳細は『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。</p>
静的ポートの競合	<p>指定されている場合は、staticports.ini ファイルに記載されているポートを、インストーラがチェックします。</p>
モニター	<p>モニターが少なくとも 256 色を表示するかどうかチェックされます。</p>
表示の許可	<p>DISPLAY 環境変数で指定されたモニターに表示する権限をユーザーが持っているかどうかチェックされます。</p>



**表 3-10 Solaris でインストーラによって実行される前提条件チェック (続き)**

項目	説明
DISPLAY 環境変数	DISPLAY 環境変数が設定されているかどうかチェックされます。
TNS_ADMIN 環境変数	TNS_ADMIN 環境変数を設定しないでください。  /etc または /var/opt/oracle ディレクトリに、tnsnames.ora ファイルが配置されていないことが必要です。
Oracle Enterprise Manager ディレクトリが書き込み可能	このチェックは、中間層を拡張する場合、または Oracle Business Intelligence を同じ Oracle ホームに再インストールする場合にのみ実行されます。ユーザーがインストーラを実行するオペレーティング・システムで、これらのディレクトリが書き込み可能かどうかチェックされます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ORACLE_HOME/sysman/emd</li> <li>■ ORACLE_HOME/sysman/config</li> <li>■ ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/WEB-INF/config</li> </ul>
Oracle Enterprise Manager ファイルが存在する	このチェックは、中間層を拡張する場合、または Oracle Business Intelligence を同じ Oracle ホームに再インストールする場合にのみ実行されます。これらのファイルが存在するかどうかチェックされます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ORACLE_HOME/sysman/config/iasadmin.properties</li> <li>■ ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/WEB-INF/config/consoleConfig.xml</li> </ul>

表 3-11 には、Microsoft Windows でインストーラによって実行されるチェックが示されています。

**表 3-11 Microsoft Windows でインストーラによって実行される前提条件チェック**

項目	説明
ユーザー	ユーザーに管理権限があるかどうかチェックされます。
プロセッサ	プロセッサのスピード要件は、 <a href="#">第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」</a> を参照してください。
モニター	モニターが少なくとも 256 色を表示するかどうかチェックされます。
オペレーティング・システムのバージョン	サポートされているバージョンについては、 <a href="#">第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」</a> を参照してください。
Windows サービス・パック	サポートされているサービス・パックは、 <a href="#">第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」</a> を参照してください。
メモリー	推奨値は、 <a href="#">第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」</a> を参照してください。
ページファイル (仮想メモリー) の合計サイズ	推奨値は、 <a href="#">第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」</a> を参照してください。
TEMP ディレクトリ領域	推奨値は、 <a href="#">第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」</a> を参照してください。
インスタンス名	Oracle Business Intelligence をインストールしているコンピュータが同じ名前のインスタンスをすでに持っているかどうかチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリの名前	Oracle ホーム・ディレクトリの名前に空白が含まれていないかどうかチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリのパス	Oracle ホーム・ディレクトリのパスが 127 文字未満かどうかチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリの内容	Oracle ホーム・ディレクトリにインストールを妨げる可能性があるファイルが含まれていないかどうかチェックされます。

表 3-11 Microsoft Windows でインストーラによって実行される前提条件チェック (続き)

項目	説明
Oracle ホーム・ディレクトリ	<p>Oracle Business Intelligence は、新しいディレクトリにインストールする必要があります。許可されないインストールの例は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle Application Server (全種類) を 8.0、8i、9.0.1 または 9.2 のデータベースの Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server (全種類) を Oracle Management Service の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server (全種類) を Oracle Collaboration Suite の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server (全種類) を Oracle HTTP Server のスタンドアロンの Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server (全種類) を OracleAS Web Cache のスタンドアロンの Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server (全種類) を Oracle9i Developer Suite 9.0.2 の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server (全種類) を Oracle Application Server Containers for J2EE のスタンドアロンの Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server (全種類) を Oracle9iAS 1.0.2.2 の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2.1) Reports Services を Infrastructure 9.0.2 または 10g リリース 2 (10.1.2.1) の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2.1) Reports Services を Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 の中間層の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Developer Kits を OracleAS Infrastructure 9.0.2 または 10g リリース 2 (10.1.2.1) の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Developer Kits を Oracle9iAS 中間層 9.0.2 または 9.0.3 の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Developer Kits を OracleAS Infrastructure 9.0.2 または 10g リリース 2 (10.1.2.1) の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Infrastructure 10g を Oracle9iAS 9.0.2 の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Infrastructure 10g を Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2.1) Reports Services または OracleAS Developer Kits の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Infrastructure 10g を Oracle Developer Suite 9.0.2 または 10g リリース 2 (10.1.2.1) の Oracle ホームにインストールする</li> </ul>
静的ポートの競合	<p>指定されている場合は、staticports.ini ファイルに記載されているポートを、インストーラがチェックします。</p>
Oracle Enterprise Manager ディレクトリが書込み可能	<p>このチェックは、中間層を拡張する場合、または Oracle Business Intelligence を同じ Oracle ホームに再インストールする場合にのみ実行されます。ユーザーがインストーラを実行するオペレーティング・システムで、これらのディレクトリが書込み可能かどうかチェックされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ORACLE_HOME¥sysman¥emd</li> <li>■ ORACLE_HOME¥sysman¥config</li> <li>■ ORACLE_HOME¥sysman¥webapps¥emd¥WEB-INF¥config</li> </ul>

**表 3-11 Microsoft Windows でインストーラによって実行される前提条件チェック (続き)**

項目	説明
Oracle Enterprise Manager ファイルが存在する	<p>このチェックは、中間層を拡張する場合、または Oracle Business Intelligence を同じ Oracle ホームに再インストールする場合にのみ実行されます。これらのファイルが存在するかどうかチェックされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ORACLE_HOME¥sysman¥config¥iasadmin.properties</li> <li>■ ORACLE_ HOME¥sysman¥webapps¥emd¥WEB-INF¥config¥consoleConfig.xml</li> </ul>



---

# Oracle Business Intelligence のインストール

この章では、Oracle Business Intelligence コンポーネントのインストール手順について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 第 4.1 項「Windows での Oracle Universal Installer の起動」
- 第 4.2 項「Solaris でのインストーラの起動」
- 第 4.3 項「Oracle Business Intelligence のインストール」
- 第 4.4 項「インストール後の作業」
- 第 4.5 項「コンポーネントの起動」
- 第 4.6 項「サンプルの使用」
- 第 4.7 項「ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス」
- 第 4.8 項「次の作業」

## 4.1 Windows での Oracle Universal Installer の起動

Windows では、この項で説明する手順に従ってインストーラを起動します。

インストール時に Windows システム・ファイルでエラーが発生した場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログ・ボックスを閉じます。次に、[第 4.1.1 項「Windows システム・ファイルのインストール」](#)で説明する手順に従ってください。

Windows で Oracle Universal Installer を起動するには、次の手順を実行します。

1. Oracle データベースなどの Oracle サービスをすべて停止します。  
インストーラの実行方法は、次の手順で説明するように、Oracle Business Intelligence の入手方法によって異なります。
2. Oracle Business Intelligence CD-ROM または DVD がある場合
  - a. CD-ROM または DVD を、使用しているコンピュータの CD-ROM または DVD ドライブに挿入します。
  - b. 自動実行機能を使用している場合は、「ようこそ」ページに表示される情報を確認します。  
**Windows の障害支援技術を使用している場合：**自動実行機能を使用不可にするには、CD-ROM または DVD を挿入した直後に [Shift] キーを押します（自動実行のウィンドウが表示されている場合は、[Alt]+[F4] キーを押してウィンドウを閉じます）。
  - c. Windows Explorer を使用して CD-ROM または DVD のルート・ディレクトリで setup.exe ファイルを検索し、このファイルをダブル・クリックしてインストーラを起動します。
3. OTN から Oracle Business Intelligence を zip ファイルとしてダウンロードした場合
  - a. zip ファイルをローカル・ディレクトリ（たとえば、D:\mytempdir）に抽出します。
  - b. Windows Explorer を使用して Disk1 ディレクトリで setup.exe ファイルを検索し、このファイルをダブル・クリックしてインストーラを起動します。

### 4.1.1 Windows システム・ファイルのインストール

Oracle Business Intelligence では、使用している Windows システム・ディレクトリ内にいくつかのファイルが必要です。Oracle Business Intelligence のインストール時には、使用しているコンピュータにすでに存在しているファイルが Oracle Business Intelligence の要件を満たしているかどうかを確認されます。ファイルが存在しない場合、または存在しているが内容が古い場合は、必要なファイルがインストールされます。

古いファイルがインストール時に他のプロセスで使用されている場合はインストーラが停止し、エラー・ダイアログ・ボックスが表示されます。これは、更新したファイルを有効にするために Windows の再起動が必要なためです。インストーラは、自動的にシャットダウンしてシステムの再起動後に再び起動することができません。

Oracle Business Intelligence には、必要な Windows システム・ファイルの補足インストール機能があります。インストールが終了すると、必要に応じてコンピュータが自動的に再起動されます。

Oracle Business Intelligence のインストール時に Windows システム・ファイルでエラーが発生した場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログ・ボックスを閉じ、次の手順に従って Windows システム・ファイルのインストールを開始します。Windows システム・ファイルのインストールを実行しない場合は、Oracle Business Intelligence のインストールを続行できません。

Windows システム・ファイルのインストールを開始するには、次の手順を実行します。

1. 「終了」をクリックしてインストーラを終了します。
2. CD-ROM または DVD のルート・ディレクトリに移動します。
3. wsf.exe を実行します。

Windows システム・ファイル・インストーラは、既存の Oracle ホームを検索するスクリプトによって制御されます。Oracle ホームが見つからない場合は、ファイルの場所ダイアログ・ボックスが表示されます。このダイアログ・ボックスから、Oracle ホームを選択します。

必要な場合には Windows が自動的に再起動されます。それ以外の場合は、インストール終了ダイアログ・ボックスが表示されないまま、Windows システム・ファイルのインストールが終了します。

4. Windows が再起動した後、または Windows システム・ファイルのインストールが終了した後、Oracle Business Intelligence のインストールを再開してください。

## 4.2 Solaris でのインストーラの起動

Solaris では、この項で説明する手順に従ってインストーラを起動します。

インストーラの起動方法は、次の手順で説明するように、Oracle Business Intelligence の入手方法によって異なります。

1. Oracle Business Intelligence CD-ROM または DVD がある場合
  - a. CD-ROM または DVD を、使用しているコンピュータの CD-ROM または DVD ドライブに挿入します。
  - b. 新規のコンソール・ウィンドウを開きます。
  - c. CD-ROM または DVD ドライブの /install ディレクトリに移動します。
  - d. 次のように入力します。

```
runInstaller
```

2. OTN から Oracle Business Intelligence をファイルとしてダウンロードした場合
  - a. 新規のコンソール・ウィンドウを開きます。
  - b. ファイルをローカル・ディレクトリに抽出します。
  - c. /Disk1/install ディレクトリに移動します。
  - d. 次のように入力します。

```
runInstaller
```

## 4.3 Oracle Business Intelligence のインストール

インストーラの各画面に移動するには、いくつかのボタンを使用します。「ヘルプ」をクリックすると、各画面の詳細情報が表示されます。「インストールされた製品」をクリックすると、使用しているコンピュータにすでにインストールされている Oracle ソフトウェアを確認できます。インストーラの前の画面または次の画面に移動するには、「戻る」または「次へ」をクリックします。「インストール」ボタンが使用可能な場合は、このボタンをクリックするとファイルのインストールが開始されます。「取消」をクリックすると、処理が停止してインストーラは終了します。さらに、「製品の削除」（「ようこそ」画面でのみ使用可能）をクリックすると、既存の Oracle ソフトウェアを削除できます。

Oracle Universal Installer を使用して Oracle Business Intelligence をインストールするには、次の手順を実行します。

1. 第 4.1 項「Windows での Oracle Universal Installer の起動」または第 4.2 項「Solaris でのインストーラの起動」の手順に従って、インストーラを起動します。
2. 「ようこそ」画面に表示される Oracle Universal Installer に関する情報を確認し、「次へ」をクリックして続行します。

いくつかの前提条件がインストーラによって確認されます（詳細は、第 1.4.2 項「インストーラによる前提条件チェック」を参照）。

ターゲット・コンピュータに初めて Oracle 製品をインストールする場合は、インストール関連ファイル用のインベントリ・ディレクトリが作成されます（インベントリ・ディレクトリの詳細は、[第 1.4.1.1 項「インストーラ・インベントリ・ディレクトリ」](#)を参照）。

3. 「ファイルの場所の指定」画面で、次の操作を実行します。
  - a. 「ソース・パス」フィールドのソース・パスを確認します。  
 ソース・パスは、products.xml ファイル（Windows の場合）または products.xml ファイル（Solaris の場合）へのフルパスで、製品はここからインストールされます。インストーラは、デフォルト・パスを検出して使用します。このパスを変更しないでください。
  - b. **インストール先名**フィールドの Oracle ホーム名を確認します。  
 デフォルトの Oracle ホーム名を使用するか、他の名前を選択できます。
  - c. **インストール先パス**フィールドのインストール先パスを確認します。  
 インストール先パスはディレクトリ名と Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスで、ここに製品がインストールされます。表示されるデフォルト名とパスを使用するか、他の名前を選択できます。  
 インストール先パスは実在する絶対パスにする必要があります。環境変数名や空白を含めることはできません。Oracle ホーム・ディレクトリの選択方法については、[第 1.2 項「Oracle ホームの考慮事項」](#)を参照してください。
  - d. 「次へ」をクリックして続行します。
4. 「言語の選択」画面で、次の操作を実行します。
  - a. Oracle Business Intelligence の実行時に表示する言語を選択します。  
**ヒント:** 選択する言語が増えると、インストール時間も長くなります。ここで選択する言語によって、Discoverer Plus のヘルプで利用できる言語が決定します。異なる言語のヘルプを個別にインストールできることに注意してください（詳細は、[第 4.7.1 項「インストール後に Discoverer Plus の翻訳済ヘルプ・ファイルをインストール」](#)を参照）。
  - b. 「次へ」をクリックして続行します。
5. インストールに使用できるメモリーがコンピュータに十分にあることを確認するように要求される場合があります。  
 ハードウェア要件の詳細は、[第 2.1 項「ハードウェア要件」](#)を参照してください。
6. 「ポート構成オプションの指定」画面で「**自動**」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックして続行します。  
**注意:** 「自動」オプションはほとんどのインストールにおいて適切であるため、このオプションを選択することをお勧めします。ただし、staticports.ini という構成ファイルを指定すると、使用するポートを明示的に設定できます。staticports.ini ファイルのフォーマットと使用方法は、Oracle Application Server 10g のインストール・ガイドを参照してください。
7. 「送信メール・サーバー情報の指定」画面で、次の操作を実行します。
  - a. SMTP サーバーの詳細を指定します（例: smtp.oracle.com）。  
 SMTP サーバーを指定すると、エンド・ユーザーは、Discoverer Viewer から電子メール・メッセージで Discoverer ワークシートを送信できます。  
**ヒント:** 入力する SMTP サーバーの詳細が不明な場合、フィールドは空白のままにできます。インストール後に、Application Server Control を使用して SMTP サーバーを指定できます（詳細は、*『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』*を参照）。  
**注意:** Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定の詳細は、[第 3.1 項「Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定について」](#)を参照してください。
  - b. 「次へ」をクリックして続行します。



8. 「インスタンス名と ias\_admin パスワードの指定」画面で、Application Server Control を使用して Oracle Business Intelligence を管理する際に使用する情報を入力します。
  - a. 「インスタンス名」フィールドに、このインスタンスの名前を指定します。  
指定した名前には、ホスト名とドメイン名が自動的に追加されることに注意してください。
  - b. ias\_admin 管理者ユーザーのパスワードを指定します。
  - c. ias\_admin 管理者ユーザーのパスワードを確認します。
  - d. 「次へ」をクリックして続行します。
9. 「サマリー」画面で、設定した内容を確認します。  
設定を変更するには、「戻る」をクリックして適切な画面に戻ります。  
**注意:** ディスク容量が不足している場合は、「必要な領域」に赤字で表示されます。
10. 「インストール」をクリックすると、ファイルのインストールが開始されます。  
「インストール」画面が表示され、必要な Oracle Business Intelligence ファイルのコピーが開始されます。この画面では、インストール処理の進行状況を監視し、インストール・ログのフルパスを確認できます。インストール・ログの詳細は、[第 1.4.1.1 項「インストール・インベントリ・ディレクトリ」](#)を参照してください。  
インストール処理を中断する場合は「インストールの中止」をクリックします。この場合は、製品すべてのインストールを停止する（デフォルト）か、特定のコンポーネントのインストールのみを停止するかを選択できます。製品すべてのインストールを停止することをお薦めします。特定のコンポーネントのインストールのみを停止すると、製品内の関連するコンポーネントが正常に動作しない場合があります。
11. (Solaris のみ) 「設定権限」ダイアログ・ボックスが表示され、root.sh という構成スクリプトの実行を要求されます。
  - a. 新規コンソール・ウィンドウを開き、root ユーザーでログインします。
  - b. root.sh スクリプトを実行し、画面の指示に従います。
  - c. スクリプトが完了した後、コンソール・ウィンドウを閉じます。
  - d. 「OK」をクリックして「設定権限」ダイアログ・ボックスを閉じます。
 製品がインストールされると、「コンフィギュレーション・アシスタント」画面が表示されます。
12. 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面で、自動的に実行された複数の Configuration Assistant のステータスを確認します。  
Configuration Assistant を再試行するには（正常に完了しなかった場合など）、Configuration Assistant を選択して「**再試行**」をクリックします。  
Configuration Assistant は中断しないことをお薦めします。  
インストールが完了すると、インストールの終了画面が表示されます。  
**ヒント:** Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページを表示する URL をメモしてください。この URL は、別のコンポーネントを起動するために使用します（詳細は、[第 4.5 項「コンポーネントの起動」](#)を参照）。
13. 「終了」をクリックします。  
インストール・プログラムの終了を確認するメッセージ・ダイアログ・ボックスが表示されます。

14. 「はい」をクリックしてインストーラを終了します。

Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページが表示されます（有効なデフォルト Web ブラウザがシステムで見つかった場合）。「ようこそ」ページからは、次の項目にアクセスできます。

- クイック・ツアー
- チュートリアル
- サンプル
- ドキュメント
- Discoverer Plus および Discoverer Viewer（Discoverer Plus および Discoverer Viewer を使用する前に、インストール後の作業を 1 つ以上実行する必要がある場合があります。詳細は、第 4.4 項「インストール後の作業」を参照してください）。

**注意：**Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページが自動的に表示されない場合は Web ブラウザを起動し、前にメモした「ようこそ」ページを表示する URL を入力します。

## 4.4 インストール後の作業

Oracle Business Intelligence に関するインストール後の作業は、次のように分類されます。

- 第 4.4.1 項「全般的なチェックリスト」
- 第 4.4.2 項「すべての Discoverer コンポーネントのインストール後の作業」
- 第 4.4.3 項「コンポーネント固有のインストール後の作業」

**注意：**特に断りがないかぎり、ORACLE\_HOME はインストール時に使用した Oracle Business Intelligence のホーム・ディレクトリを表します。

### 4.4.1 全般的なチェックリスト

インストール後の全般的なチェックリストを確認し、インストールと環境に適用する作業を実行します。

#### 4.4.1.1 更新

インストールが完了した後、Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com>) で最新の認証とソフトウェアの更新を確認してください。Oracle MetaLink では、技術情報にアクセスしたり、オラクル社カスタマ・サポート・センターからのサポートを受けられます。

Oracle Business Intelligence に関する最新情報は、OTN (<http://www.oracle.com/technology/products/bi/index.html>) で確認してください。

また、OTN (<http://www.oracle.com/technology>) では、Oracle 製品や業界標準テクノロジーを使用するアプリケーションを作成、テストおよび配置する開発者向けのサービスや資料を入手できます。

#### 4.4.1.2 TNS 名

エンド・ユーザーが Discoverer を使用する前に、ユーザーがクエリーするデータを含むデータベース（または、EUL がインストールされるデータベース）の tnsnames.ora ファイルにエントリを追加する必要があります。

tnsnames.ora ファイルと sqlnet.ora ファイルが ORACLE\_HOME/network/ADMIN ディレクトリにインストールされます。これらのファイルは、テキスト・エディタを使用して手動で更新したり、構成ツールである Oracle Net Configuration Assistant を使用して更新することもできます。構成ツールの詳細は、Oracle データベース・ドキュメント・ライブラリ内の『Oracle Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

### 4.4.1.3 ポート番号

インストーラによって、ポートが必要な Oracle Business Intelligence コンポーネントに、ポートが自動的に割り当てられます。コンポーネントのインストール時にポートの競合が検出されると、そのコンポーネントに割り当てられたポート番号の範囲内で、別のポート番号が選択されます。

表 4-1 ポート番号リスト

コンポーネント	デフォルトのポート番号
Discoverer	Oracle HTTP Server と同じポートを使用します（デフォルトはポート 80（Windows の場合）またはポート 7777（Solaris の場合）、ポート番号の範囲は 7777 ～ 7877）。

Oracle Business Intelligence コンポーネントで使用するポート番号は、Application Server Control を使用して表示および変更ができます。Discoverer で使用するポート番号の表示と変更の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

### 4.4.1.4 Oracle Application Server Infrastructure との関連付け

Oracle Business Intelligence を使用するとき、Oracle Application Server Infrastructure を関連付けるかどうかは任意です。次のことができます。

- Infrastructure を関連付けずに Oracle Business Intelligence を実行できます。
- インストール後に、Oracle Business Intelligence を既存の Infrastructure に関連付けることができます。

Oracle Application Server Infrastructure は、Oracle Application Server 中間層の多くのコンポーネントを使用するための前提条件であることに注意してください。Oracle Business Intelligence を Oracle Application Server Infrastructure に関連付けない場合は、次のような多くの Oracle Business Intelligence 機能が使用不可になります。

- Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット
- Discoverer での Single Sign-On (SSO) 機能
- パブリックおよびプライベートの Discoverer 接続（かわりに、Discoverer の「直接接続」ページが表示されます）

Oracle Business Intelligence と Oracle Application Server Infrastructure の関連付けの詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

### 4.4.1.5 インストール後に Oracle Business Intelligence コンポーネントで障害支援技術と Java Access Bridge を使用する場合（Windows のみ）

インストール後に Oracle Business Intelligence コンポーネントでスクリーン・リーダーなどの障害支援技術を使用する場合は、Java Access Bridge をインストールして構成する必要があります。詳細は、[第 B.2 項「インストール済の Oracle コンポーネントで使用する Java Access Bridge の設定」](#)を参照してください。

## 4.4.2 すべての Discoverer コンポーネントのインストール後の作業

Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析を開始する前に、次のいずれかまたは両方の項で説明する手順を完了する必要があります。

- [第 4.4.2.1 項「マルチディメンション分析の準備方法」](#)
- [第 4.4.2.2 項「リレーショナル分析の準備方法」](#)

#### 4.4.2.1 マルチディメンション分析の準備方法

ユーザーが Discoverer を使用してマルチディメンション・データソースからデータをクエリーする前に、次の手順を完了する必要があります。

1. 第 4.4.2.1.1 項「Discoverer とともに使用するための Oracle9i Database リリース 2 の準備方法」または第 4.4.2.1.2 項「Discoverer とともに使用するための Oracle Database 10g Enterprise Edition の準備方法」の説明に従って、データベースをインストールして準備します。
2. データ・ウェアハウスを設定します。

Oracle Business Intelligence Warehouse Builder を使用している場合は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。使用していない場合は、『Oracle 9i OLAP ユーザーズ・ガイド』（Oracle9i Database の場合）または『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』（Oracle Database 10g の場合）を参照してください。

次の作業を実行します。

- スキーマのインストール
- 適切なメタデータの作成
- （オプション）アナリティック・ワークスペースの作成とコンテンツの追加
- ユーザーへの適切な権限の付与（ユーザーには、OLAP のディメンション・テーブル、メジャーおよびビューに対する SELECT 権限が必要）

Discoverer Plus OLAP のすべてのユーザーには D4OPUB ロールがあるため、OLAP\_USER ロールもあることに注意してください。OLAP\_USER ロールによって、データベース内の OLAP メタデータにアクセスできます。

3. Application Server Control を使用して、ユーザーが接続する Oracle OLAP データベース・インスタンスに Discoverer カタログをインストールします。

カタログのインストール方法と構成方法の詳細は、次を参照してください。

- 『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』
- Application Server Control のヘルプ・システム

4. Application Server Control を使用して、データベース・ユーザーを認証します（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。
5. 必要に応じて、オプションの構成作業を実行します（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。
6. エンド・ユーザーに、Discoverer を起動してマルチディメンション・データソースに接続するために必要な情報を提供します。

エンド・ユーザーに必要な構成と情報の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

##### 4.4.2.1.1 Discoverer とともに使用するための Oracle9i Database リリース 2 の準備方法 Oracle9i Database リリース 2 に対して実行するには、次の作業を完了します。

1. Oracle9i Database リリース 2 の Enterprise Edition をインストールしていない場合は、インストールします。
  - 手順については、OTN から適切なプラットフォーム用の Oracle9i インストレーション・ガイドをダウンロードして参照してください。  
<http://www.oracle.com/technology>
  - データベースのサポート対象バージョンの詳細は、第 2.3 項「データベース要件」を参照してください。

**注:** データベース・クライアントをインストールする際、別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしてください。

2. 『Oracle OLAP 表キューブ集計と問合せ操作のベスト・プラクティス』に示す構成設定を使用して、データベースを構成します。このドキュメントにアクセスするには、パッチ・セット 2529822 をダウンロードします。BI Beans が正常に動作して実行されるように、構成設定には正確に従う必要があります。このドキュメントは必要に応じて更新されるため、新規パッチ・セットをダウンロードするたびに新規バージョンをチェックしてください。
3. 『Oracle9i OLAP ユーザーズ・ガイド』の説明に従って、適切な OLAP メタデータを定義します。このマニュアルは、OTN (<http://www.oracle.com/technology>) から入手できます。メタデータ作成用のツールである Oracle Enterprise Manager の OLAP 管理ツールのヘルプ・システムも参照してください。また、メタデータは Oracle Warehouse Builder を使用して作成することもできます。適切なメタデータを定義しない場合は OLAP クエリーを作成できません。

#### 4.4.2.1.2 Discoverer とともに使用するための Oracle Database 10g Enterprise Edition の準備方法

Oracle Database 10g Enterprise Edition に対して実行するには、次の作業を完了します。

1. Oracle Database 10g Enterprise Edition をインストールしていない場合は、インストールします。
  - 手順については、OTN (Oracle Technology Network) から適切なプラットフォーム用の Oracle Database 10g Enterprise Edition インストールेशन・ガイドをダウンロードして参照してください。  
<http://www.oracle.com/technology>
  - データベースのサポート対象バージョンの詳細は、第 2.3 項「データベース要件」を参照してください。
  - 既存の Discoverer カタログを Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 (10.2.0.1 以上) に移行する場合は、第 4.4.2.1.3 項「既存の Discoverer カタログを Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 に移行する方法」を参照してください。

**注:** データベース・クライアントをインストールする際、別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしてください。
2. 『Oracle OLAP 表キューブ集計と問合せ操作のベスト・プラクティス』に示す構成設定を使用して、データベースを構成します。BI Beans が正常に動作して実行されるように、構成設定には正確に従う必要があります。このドキュメントは必要に応じて更新されるため、新規パッチ・セットをダウンロードするたびに新規バージョンをチェックしてください。このドキュメントにアクセスするには、パッチ・セット 3760779 をダウンロードします。
3. 『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』の説明に従って、適切な OLAP メタデータを定義します。このマニュアルは、OTN (<http://www.oracle.com/technology>) から入手できます。適切なメタデータを定義しない場合は OLAP クエリーを作成できません。次のいずれかのツールを使用してメタデータを定義します。
  - Oracle Enterprise Manager の OLAP 管理ツール。詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプ・システムを参照。
  - OracleBI Warehouse Builder。詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照。
  - Analytic Workspace Manager。詳細は、『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照。

**4.4.2.1.3 既存の Discoverer カタログを Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 に移行する方法** 既存の Discoverer カタログを Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 (10.2.0.1 以上) に移行するには、次の手順を実行して、データベース・サーバー上の PL/SQL パッケージを更新する必要があります。

1. 次の手順でパッチをインストールします。
  - a. 次のディレクトリから d4o.jar を検索します。  
`BI_Home¥sysman¥webapps¥emd¥WEB-INF¥lib`
  - b. d4o.jar から bibcoreb.pls ファイルをローカルのディレクトリに展開します。この jar にはパッケージ・スコープがあり、  
`oracle¥dss¥persistence¥storagemanager¥bi¥scripts` ディレクトリに展開されます。

2. 次の手順でパッチを適用します。
  - a. コマンド・プロンプトで、次のように入力します。  
`cd oracle¥dss¥persistence¥storagemanager¥bi¥scripts`
  - b. sqlplus を使用して、D4OSYS ユーザーとして D4OSYS スキーマに接続します。
  - c. sqlplus プロンプトで、次のように入力します。

```
SQL> @bibcoreb.pls
```

この手順では、次のような出力があります。

```
Package body created.
Commit complete.
```

3. 次の手順でパッケージが有効であることを確認します。
  - a. sqlplus セッションを開きます。
  - b. 次の SQL コマンドを入力します。

```
SQL> column OBJECT_NAME format a30;
SQL> column STATUS format a10;
SQL> select object_name, status from user_objects where object_name='BISM_CORE';
```

次のように表示される場合、パッチは正常に適用されています。

OBJECT_NAME	STATUS
BISM_CORE	VALID
BISM_CORE	VALID

#### 4.4.2.2 リレーショナル分析の準備方法

ユーザーが Discoverer を使用してリレーショナル・データソースからデータをクエリーするには、次のいずれかを使用して作成（またはアップグレード）された EUL へのアクセス権限が必要です。

- Discoverer EUL Command Line for Java（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java ユーザーズ・ガイド』を参照）
- Oracle Business Intelligence Tools 10g 10.1.2 の CD-ROM に同梱されているバージョンの Discoverer Administrator（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照）

Discoverer リリース 9.0.2 または 9.0.4 から EUL をアップグレード（EUL リリース番号 5.0.x）する場合は、次の事項に注意してください。

- Discoverer リリース 10.1.2 の EUL (EUL リリース番号 5.1.x) は、前のリリースの EUL を上書きします（つまり、前のリリースを削除してアップグレードします）。

- 既存のユーザーは、アップグレード処理中またはアップグレード処理の完了後に、Discoverer リリース 9.0.x を使用して EUL へはアクセスできません。

したがって、アップグレードの前に、前のリリースの EUL のバックアップを作成してください。

EUL の作成とアップグレードの詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。

## 4.4.3 コンポーネント固有のインストール後の作業

コンポーネント固有のインストール後の作業を確認し、インストールと環境に適用する作業を実行します。

### 4.4.3.1 Discoverer のインストール後の作業

この項では、Discoverer のインストール後の作業について説明します。

**4.4.3.1.1 分析の準備** Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析を開始する前に、次のいずれかまたは両方の項で説明する手順を完了する必要があります。

- [第 4.4.2.2 項「リレーショナル分析の準備方法」](#)
- [第 4.4.2.1 項「マルチディメンション分析の準備方法」](#)

### 4.4.3.2 Discoverer Viewer のインストール後の作業

この項では、Discoverer Viewer のインストール後の作業について説明します。

**4.4.3.2.1 分析の準備** Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析を開始する前に、次のいずれかまたは両方の項で説明する手順を完了する必要があります。

- [第 4.4.3.2.3 項「SMTP 構成」](#)
- [第 4.4.3.2.2 項「ワークブックの作成」](#)

**4.4.3.2.2 ワークブックの作成** Discoverer Viewer エンド・ユーザーは、Discoverer Plus または Discoverer Desktop を使用して作成したワークブックを使用してデータを分析します。Discoverer Viewer を使用してデータを分析するには、少なくとも 1 つのワークブックが作成されている必要があります。

**4.4.3.2.3 SMTP 構成** エンド・ユーザーが Discoverer Viewer から電子メール・メッセージで Discoverer ワークシートを送信できるようにするには、SMTP サーバーを使用するように Discoverer 中間層を構成する必要があります。インストール時に SMTP サーバーを指定していない場合は、後で指定することもできます（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。

### 4.4.3.3 Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール後の作業

この項では、Discoverer Portlet Provider のインストール後の作業について説明します。

**4.4.3.3.1 分析の準備** Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析を開始する前に、次のいずれかまたは両方の項で説明する手順を完了する必要があります。

- [第 4.4.3.3.2 項「リリース 10.1.2 の Oracle Application Server Infrastructure との関連付け」](#)
- [第 4.4.3.3.3 項「Discoverer Portlet Provider の登録」](#)



**4.4.3.3.2 リリース 10.1.2 の Oracle Application Server Infrastructure との関連付け** Discoverer Portlet Provider を使用するには、インストール後に Oracle Business Intelligence を Oracle Application Server リリース 10.1.2 のメタデータ・リポジトリに関連付ける必要があります。メタデータ・リポジトリは Oracle Application Server Infrastructure の一部です（詳細は、[第 4.4.1.4 項「Oracle Application Server Infrastructure との関連付け」](#) および『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。

**4.4.3.3.3 Discoverer Portlet Provider の登録** ユーザーが Discoverer ポートレットを Oracle Portal ページに追加するには、Discoverer Portlet Provider を Oracle Portal に登録する必要があります（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。

## 4.5 コンポーネントの起動

Oracle Business Intelligence のコンポーネントを起動する前に、前の各項で説明したインストール後の全般的な作業およびコンポーネント固有の作業を完了しておいてください。コンポーネントのインストール後の作業を完了した後は、次の各項で説明するように、コンポーネントを起動できます。

- [第 4.5.1 項「Discoverer Plus の起動」](#)
- [第 4.5.2 項「Discoverer Viewer の起動」](#)
- [第 4.5.3 項「Discoverer Portlet Provider の起動」](#)

### 4.5.1 Discoverer Plus の起動

Discoverer Plus OLAP および Discoverer Plus Relational を起動するには、次のいずれかを実行します。

- インストールの最後に表示される Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページで、「Discoverer Plus」リンクを選択します。
- Web ブラウザに次の URL を入力します。

`http://<host.domain>:<port>/discoverer/plus`

ここで、

- `<host.domain>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインです。
- `<port>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号です。

たとえば、`http://myhost.mydomain:80/discoverer/plus` のように入力します。

**注意：**`<host.domain>` および `<port>` はインストールの最後に表示されます。

### 4.5.2 Discoverer Viewer の起動

Discoverer Viewer を起動するには、次のいずれかを実行します。

- インストールの最後に表示される Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページで、「Discoverer Viewer」リンクを選択します。
- Web ブラウザに次の URL を入力します。

`http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer`

ここで、

- `<host.domain>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインです。
- `<port>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号です。

たとえば、`http://myhost.mydomain:80/discoverer/viewer` のように入力します。

**注意：**`<host.domain>` および `<port>` はインストールの最後に表示されます。



### 4.5.3 Discoverer Portlet Provider の起動

**注意:** Discoverer Portlet Provider を使用するには、インストール後に Oracle Business Intelligence を Oracle Application Server リリース 10.1.2 のメタデータ・リポジトリに関連付ける必要があります。メタデータ・リポジトリは Oracle Application Server Infrastructure の一部です（詳細は、第 4.4.1.4 項「[Oracle Application Server Infrastructure との関連付け](#)」および『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。

Web ブラウザに次の URL を入力すると、Discoverer Portlet Provider が正常にインストールされたことを確認できます。

`http://<host.domain>:<port>/discoverer/portletprovider/`

ここで、

- `<host.domain>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインです。
- `<port>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号です。

たとえば、`http://myhost.mydomain:80/discoverer/portletprovider` のように入力します。

**注意:** `<host.domain>` および `<port>` はインストールの最後に表示されます。

インストール後にエンド・ユーザーが Discoverer ポートレットを作成する前に、Oracle Portal にログインして Discoverer Portlet Provider を登録する必要があります。これによって、Oracle Portal ユーザーは Discoverer ポートレット（ワークシート、ワークシートのリストまたはゲージ・ポートレット）を作成できます。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Oracle Application Server Portal でのワークブック公開ガイド』を参照してください。

## 4.6 サンプルの使用

Discoverer 用の多くのサンプル・ワークブックを利用できます。これらのワークブックによって、マルチディメンション・データソースおよびリレーショナル・データソースのクエリ時に使用する Discoverer の機能が示されます。

サンプル・ワークブックを使用するには、次の手順を実行します。

1. `http://www.oracle.com/technology/products/bi/index.html` からサンプル・ワークブックをダウンロードします。
2. 使用しているマシン上のディレクトリにファイルを抽出します。
3. ディレクトリに格納されているインストール手順に従います。

## 4.7 ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス

すべてのコンポーネントにはオンライン・ヘルプがあり、コンポーネントとともにインストールされます。コンポーネントの使用法の詳細は、このオンライン・ヘルプを参照してください。Discoverer Plus の場合は、Oracle Business Intelligence のインストール後に追加の翻訳済ヘルプ・ファイルもインストールできます（詳細は、第 4.7.1 項「[インストール後に Discoverer Plus の翻訳済ヘルプ・ファイルをインストール](#)」を参照）。

コンポーネントによっては、さらにドキュメントが OTN (<http://www.oracle.com/technology/products/bi>) にある場合があります。このサイトでは、ホワイト・ペーパー、最新版のドキュメント、その他の付属資料も入手できます。

次の Oracle Business Intelligence ドキュメントは、Oracle Business Intelligence CD-ROM または DVD から利用できます。

- このマニュアル（Oracle Business Intelligence のインストレーション・ガイド）
- Oracle Business Intelligence のリリース・ノート

Oracle Business Intelligence ドキュメントを CD-ROM または DVD から直接表示するには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザを使用して、CD-ROM または DVD の doc ディレクトリにある index.htm ファイルを開きます。
2. タブをクリックします。
3. ドキュメント・タイトルの横にある「HTML」または「PDF」リンクをクリックすると、ドキュメントの内容が表示されます。

## 4.7.1 インストール後に Discoverer Plus の翻訳済ヘルプ・ファイルをインストール

インストール時には、選択した言語の Discoverer Plus ヘルプ・ファイルがインストールされます。インストール時に選択していない言語のヘルプ・ファイルが必要な場合は、そのヘルプ・ファイルを個別にインストールできます。

Discoverer Plus ヘルプ・ファイルは、Oracle Business Intelligence CD-ROM または DVD の /extras ディレクトリから jar ファイルとして使用できます。Discoverer Plus OLAP と Discoverer Plus Relational のヘルプ・ファイルには、それぞれ別のサブディレクトリがあり、言語ごとに異なる jar ファイルがあります。

Oracle Business Intelligence のインストール後に別の言語のヘルプ・ファイルをインストールするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Business Intelligence CD-ROM または DVD の適切なディレクトリに移動します。  
Discoverer Plus OLAP および Discoverer Plus Relational のそれぞれに、次のサブディレクトリがあります。
  - Discoverer Plus OLAP ヘルプ・ファイルの場合は、/extras/help/d4o ディレクトリに移動します。
  - Discoverer Plus Relational ヘルプ・ファイルの場合は、/extras/help/plus ディレクトリに移動します。
2. 表 4-2 を使用して、必要な言語の翻訳済ヘルプ・ファイルが含まれる jar ファイルを識別します。

次に示すように、言語ごとに異なる jar ファイルがあります。

- Discoverer Plus OLAP ヘルプ・ファイルが含まれる jar ファイルは、/extras/help/d4o ディレクトリにあり、名前は d4ohelp\_<locale\_code>.jar です。
- Discoverer Plus Relational ヘルプ・ファイルが含まれる jar ファイルは、/extras/help/plus ディレクトリにあり、名前は plushelp\_<locale\_code>.jar です。

<locale\_code> は、次の表に示すいずれかの接尾辞になります。

**表 4-2 Discoverer Plus ヘルプの jar ファイルのロケール・コード接尾辞**

ロケール・コード接尾辞	言語	ロケール・コード接尾辞	言語
_ar	アラビア語	_ko	韓国語
_cs	チェコ語	_nl	オランダ語
_da	デンマーク語	_no	ノルウェー語
_de	ドイツ語	_pl	ポーランド語
_el	ギリシャ語	_pt	ポルトガル語
_es	スペイン語	_pt_BR	ポルトガル語 (ブラジル)
_es_ES	スペイン語 (イベリア)	_ro	ルーマニア語
_fi	フィンランド語	_ru	ロシア語

表 4-2 Discoverer Plus ヘルプの jar ファイルのロケール・コード接尾辞（続き）

ロケール・ コード接尾辞	言語	ロケール・ コード接尾辞	言語
_fr	フランス語	_sk	スロバキア語
_fr_CA	フランス語（カナダ）	_sv	スウェーデン語
_hu	ハンガリー語	_th	タイ語
_it	イタリア語	_tr	トルコ語
_iw	ヘブライ語	_zh_CN	簡体字中国語
_ja	日本語	_zh_TW	繁体字中国語

3. 中間層マシンの ORACLE\_HOME/discoverer/plus\_files/help ディレクトリに、必要な jar ファイルを抽出します。

これで、その言語のヘルプが使用可能になります。

## 4.7.2 インストール後に必要な追加のフォントをインストール

インストール時に言語のサブセットをインストールした場合は、Discoverer で必要なすべてのフォントがインストールされない場合があります。必要なすべてのフォントがインストールされていない場合（たとえば、Albany フォントの ALBANWTJ.TTF、ALBANWTK.TTF）、Discoverer では一部のテキストが制御文字で表示される場合があります。

必要な追加フォントは、MRUA およびユーティリティ CD-ROM または DVD の /utilities/fonts フォルダに格納されています。

Oracle Business Intelligence のインストール後に、必要な追加フォントをインストールするには、次の手順を実行します。

1. MRUA およびユーティリティ CD-ROM または DVD の /utilities/fonts ディレクトリに移動します。
2. MRUA およびユーティリティ CD-ROM または DVD の /utilities/fonts ディレクトリの内容を、OracleBI をインストールしたマシンの ORACLE\_HOME/jdk/jre/lib/fonts フォルダにコピーします。

## 4.8 次の作業

インストール後に、次の作業を実行できます。

- クイック・ツアーを実行して、Oracle Business Intelligence の概要を理解します。クイック・ツアーを起動するには、次のいずれかを実行します。
  - （Windows のみ）Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle Business Intelligence」→「クイック・ツアー」を選択します。
  - Web ブラウザに次の URL を入力します。

`http://<host.domain>:<port>/quicktour/index.htm`

ここで、

\* `<host.domain>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインです。

\* `<port>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号です。

**注意:** `<host.domain>` および `<port>` はインストールの最後に表示されます。

- 『Oracle Business Intelligence 概要』を読みます（詳細は、第 4.7 項「ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス」を参照）。

- コンポーネント固有のユーザー・ドキュメントを読みます（詳細は、[第 4.7 項「ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス」](#)を参照）。
- Oracle Business Intelligence の使用を開始します（詳細は、[第 4.5 項「コンポーネントの起動」](#)を参照）。

前述のすべてのリソースには、Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページからアクセスできます。Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページを表示するには、次のいずれかを実行します。

- （Windows のみ）Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle Business Intelligence」→「ようこそ」ページを選択します。
- Web ブラウザに次の URL を入力します。

`http://<host.domain>`

`<host.domain>` の定義は前述のとおりです。

---

## Oracle Business Intelligence の削除と再インストール

この章では、Oracle Business Intelligence を削除する手順について説明します。複数またはすべてのコンポーネントを削除する場合は、この章で説明する順序に従ってください。

この章では、実行する順序に従って削除手順を説明します。

- [第 5.1 項「Oracle Business Intelligence の削除」](#)
- [第 5.2 項「Oracle Business Intelligence の再インストール」](#)

## 5.1 Oracle Business Intelligence の削除

**注意:** この章では、マシンから Oracle Business Intelligence インストールを削除する方法を説明します。関連付けられた Oracle Application Server Infrastructure インストールを削除する場合は、Oracle Business Intelligence の削除とは別に実行する必要があります（詳細は、Oracle Application Server のインストール・ガイドを参照）。

使用しているコンピュータから Oracle Business Intelligence を削除する場合は、必ず Oracle Universal Installer を使用してください。次に、削除処理の手順を説明します。

インストーラを使用して Oracle Business Intelligence を削除するには、次の手順を実行します。

1. 次の手順に従って、削除処理を開始する前に Oracle サービスをすべて停止します。

Windows の場合

- a. Windows の「スタート」メニューから「コントロール パネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択して、「サービス」ダイアログ・ボックスを表示します。
- b. Oracle<Oracle Home>ProcessManager というサービスを選択し、「**停止**」をクリックしてサービスを停止します。
- c. Oracle<Oracle Home>ASControl というサービスを選択し、「**停止**」をクリックしてサービスを停止します。
- d. 「サービス」ダイアログ・ボックスを閉じます。

Solaris の場合

- a. 新規のコンソール・ウィンドウを開きます。
- b. <Oracle Home>/opmn/bin ディレクトリに移動し、次のように入力します。  

```
opmnctl stopall
```
- c. <Oracle Home> ディレクトリに移動し、次のように入力します。  

```
emctl stop iasconsole
```
- d. コンソール・ウィンドウを閉じます。

2. [第 4.1 項「Windows での Oracle Universal Installer の起動」](#) または [第 4.2 項「Solaris でのインストーラの起動」](#) の手順に従って、インストーラを起動します。

コンピュータにインストールされているすべての Oracle 製品が表示されます。製品は必要なだけ削除できます。ここで説明する内容は、Oracle Business Intelligence の削除にのみ適用されます。

3. Oracle Universal Installer の「ようこそ」画面で、「製品の削除」をクリックします。
4. 「インベントリ」画面のリストから、Oracle Business Intelligence 10g 10.1.2.0.0 が含まれる Oracle ホームを選択します。

製品名の前にプラス記号 (+) またはマイナス記号 (-) がある場合は、下位のコンポーネントやファイルを展開または縮小できます。

Oracle Business Intelligence のコンポーネントを個別に削除することはできません。1 つのコンポーネントを選択した場合にも、Oracle Business Intelligence のすべてのコンポーネントが削除されます。

5. 「製品情報」ボックスに表示されている Oracle ホームへのフルパスをメモしてください。この情報は、インストーラが完了してから、ファイルやフォルダを手動で削除する場合に必要になります。
6. 準備ができたなら「削除」をクリックします。
7. 「確認」画面で、削除対象として選択した製品を確認して「はい」をクリックすると、削除処理が開始されます。

選択内容を変更する場合は、「いいえ」をクリックして「インベントリ」画面に戻ります。

「削除」進行状況バーが表示され、削除処理を監視できます。削除を中断する場合は「取消」をクリックします。削除処理の中断を確認するメッセージが表示されたときは「はい」をクリックします。

8. 「削除時のインプット」ダイアログ・ボックスが表示され、保護コマンドラインの値の入力を要求された場合は、「OK」をクリックして続行します。

削除が完了すると、再び「インベントリ」画面が表示されます。

9. 「閉じる」をクリックしてこの画面を終了し、「ようこそ」画面に戻ります。
10. 「ようこそ」画面で「取消」をクリックしてインストーラを終了します。インストーラを終了する確認画面が表示されたときは「はい」をクリックします。

**注意：**この時点で、Oracle Business Intelligence に関連付けられているファイルは、まだ Oracle ホーム・ディレクトリに存在しています。Oracle Business Intelligence が他の製品 (Oracle Business Intelligence Tools など) と Oracle ホーム・ディレクトリを共有している場合は、その Oracle ホーム・ディレクトリから他のファイルまたはディレクトリを削除しないことをお勧めします。Oracle Business Intelligence が他の製品と Oracle ホーム・ディレクトリを共有していない場合は、Oracle ホーム・ディレクトリ全体を削除できます。

11. (オプション) Windows Explorer を使用して前の手順でメモした場所にある Oracle ホームに移動し、残っているファイルやフォルダを削除します。
12. Windows の場合のみ：コンピュータを再起動します。

これで Oracle Business Intelligence が削除されました。

## 5.2 Oracle Business Intelligence の再インストール

すでにインストールされているコンポーネントは上書きされません。Oracle Business Intelligence を完全に再インストールする場合は、[第 5.1 項「Oracle Business Intelligence の削除」](#)で説明する手順に従って製品を完全に削除した後に、[第 4 章「Oracle Business Intelligence のインストール」](#)で説明する手順に従って製品をインストールする必要があります。





---

## トラブルシューティング

この付録では、インストールでエラーまたは問題が発生した場合に使用する参照情報について説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- 第 A.1 項「始める前に」
- 第 A.2 項「インストールに関するトラブルシューティング」
- 第 A.3 項「Discoverer の診断およびロギング・ツールの使用」

## A.1 始める前に

Oracle Business Intelligence のインストール中に発生した問題を解決する前に、次の説明をお読みください。

- 第 A.1.1 項「ハードウェアの要件とインストール前の要件の確認」
- 第 A.1.2 項「リリース・ノートの確認」

### A.1.1 ハードウェアの要件とインストール前の要件の確認

最初に、Oracle Business Intelligence のハードウェアとソフトウェアの要件、およびインストール前の作業を確認します。

- 使用しているコンピュータが、第 2.1 項「ハードウェア要件」で指定されているハードウェア要件を満たしていることを確認します。
- 使用中のオペレーティング・システム環境が Oracle Business Intelligence に対応していることを確認します。対応しているオペレーティング環境の一覧は、第 2.2 項「オペレーティング・システム要件」を参照してください。
- 第 1.3 項「インストール前の作業」の冒頭で指定されている、製品レベルでのインストール前の要件がすべて完了していることを確認します。
- インストールする各コンポーネントについて、コンポーネント・レベルでのインストール前の要件がすべて完了していることを確認します。これらの要件については、第 1.3.4 項「コンポーネントに固有のインストール前の作業」を参照してください。

### A.1.2 リリース・ノートの確認

インストールの前に Oracle Business Intelligence のリリース・ノートをお読みください。Oracle Business Intelligence のリリース・ノートは、次の場所から入手できます。

- Oracle Business Intelligence CD-ROM（詳細は、第 4.7 項「ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス」を参照）
- OTN (<http://www.oracle.com/technology/products/bi/index.html>)

## A.2 インストールに関するトラブルシューティング

Oracle Business Intelligence のインストール中にエラーが発生した場合は、次の手順に従います。

- インストーラを終了しないでください。インストーラを実行したままにしておくと、インストール・ログ・ファイルを簡単に検索できます。
- 入力の誤り：インストール画面のいずれかで誤った情報を入力した場合は、「戻る」をクリックしてその画面まで戻り、情報を修正してからインストールを続行します。
- コピーのエラー：ファイルのコピーまたはリンク中にエラーが報告された場合は、次の手順に従います。
  1. エラーの内容をメモし、インストール・ログを参照して原因を調べます。インストール・ログは、インベントリ・ディレクトリのサブディレクトリ /logs にあり、ファイル名は次のとおりです。
    - installActions timestamp.log
    - oraInstall timestamp.err
    - oraInstall timestamp.out

文字列 **timestamp** は、インストールの開始時にファイル名に付加される値です。**timestamp** の形式は、**yyyy-mm-dd\_hh-mm-ss[AM|PM]** です。それぞれの内容は次のとおりです。

- **yyyy** は、**2004** のように現在の年を表します。
- **mm** は、現在の月を表します。7 月の場合は **07** になります。
- **dd** は、現在の日付を表します。15 日の場合は **15** になります。
- **hh**、**mm** および **ss** はそれぞれ、インストールが開始された時間、分、秒を表します。
- **[AM/PM]** は、インストールが開始された時刻が午前（AM）であるか午後（PM）であるかを表します。

インベントリ・ディレクトリの場所は、使用しているコンピュータに **Oracle** 製品を最初にインストールしたときに指定されます。ディレクトリとその検索方法の詳細は、[第 1.4.1.1 項「インストーラ・インベントリ・ディレクトリ」](#) を参照してください。

2. [第 5 章「Oracle Business Intelligence の削除と再インストール」](#) に記載されている手順に従って、失敗したインストールを削除します。
3. エラーの原因となった問題を修正します。
4. **Oracle Business Intelligence** のインストールを再度開始します。

#### 注意

- 追加の言語サポートを提供するために、**Oracle Business Intelligence** のインストール後に不足フォントのインストールが必要な場合もあります。詳細は、[第 4.7.2 項「インストール後に必要な追加のフォントをインストール」](#) を参照してください。

## A.3 Discoverer の診断およびロギング・ツールの使用

Discoverer には多数の診断ツールが用意されています。詳細は、『**Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド**』を参照してください。



---

## Java Access Bridge のインストール (Windows のみ)

この付録では、Windows プラットフォームに Java Access Bridge をインストールする方法について説明します。Java Access Bridge によって、Oracle コンポーネントでスクリーン・リーダーを使用できるようになります。

この付録の内容は次のとおりです。

- [第 B.1 項「Java Access Bridge の概要」](#)
- [第 B.2 項「インストール済の Oracle コンポーネントで使用する Java Access Bridge の設定」](#)

## B.1 Java Access Bridge の概要

Java Access Bridge を使用すると、JAWS スクリーン・リーダーなどの障害支援技術によって、Windows プラットフォームで実行されている Java アプリケーションの読上げが可能になります。障害支援技術では、Oracle Universal Installer や Oracle Enterprise Manager Application Server Control など、Java ベースのインタフェースを読み上げることができます。

Oracle Business Intelligence のインストール・メディアには、Oracle Universal Installer がインストール時に使用する Java Runtime Environment (JRE) 1.4.2 が含まれています。この JRE によって、インストール時に Java Access Bridge の使用が可能となります。インストール時に JRE 1.4.2 で使用する Java Access Bridge を設定するには、[第 B.2.1 項「Java Access Bridge のインストール」](#)を参照してください。

インストール後に Oracle Business Intelligence コンポーネントで使用する Java Access Bridge をインストールおよび構成するには、[第 B.2 項「インストール済の Oracle コンポーネントで使用する Java Access Bridge の設定」](#)を参照してください。

## B.2 インストール済の Oracle コンポーネントで使用する Java Access Bridge の設定

この項では、Oracle コンポーネントのインストール後に Java Access Bridge for Windows をインストールおよび構成する方法について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [第 B.2.1 項「Java Access Bridge のインストール」](#)
- [第 B.2.2 項「Java Access Bridge を使用する Oracle コンポーネントの構成」](#)

### B.2.1 Java Access Bridge のインストール

Java Access Bridge バージョン 1.0.4 は、Oracle Business Intelligence の CD-ROM または DVD からインストールできます。また、次のサイトから zip ファイルをダウンロードして Java Access Bridge バージョン 1.2 をインストールできます。

<http://java.sun.com/products/accessbridge/>

インストール手順およびその他の情報は、Sun 社の Web サイトにある Java Access Bridge のドキュメントを参照してください。

Java Access Bridge を Oracle Business Intelligence の CD-ROM または DVD からインストールする手順は次のとおりです。

1. Oracle Business Intelligence インストール・メディアの、次のディレクトリに移動します。

`DRIVE_LETTER:\Disk1\AccessBridge`

2. `accessbridge-1_0_4.jar` ファイルを選択し、Access Bridge をインストールするシステムにそのファイルを抽出します。

例：

`c:\AccessBridge-1_0_4`

3. [表 B-1](#) に示されている Java Access Bridge の各ファイルを、`windows_directory\system32` ディレクトリにコピーします。

**表 B-1 system32 サブディレクトリにコピーするファイル**

コピーするファイル	コピー先
<code>%AccessBridge-1_0_4%\installer\installerFiles\JavaAccessBridge.dll</code>	<code>windows_directory\system32</code>
<code>%AccessBridge-1_0_4%\installer\installerFiles\WindowsAccessBridge.dll</code>	<code>windows_directory\system32</code>

表 B-1 system32 サブディレクトリにコピーするファイル（続き）

コピーするファイル	コピー先
¥AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥JAWTAccessBridge.dll	windows_directory¥system32

## B.2.2 Java Access Bridge を使用する Oracle コンポーネントの構成

Access Bridge を使用する Oracle コンポーネントは、インストールを完了した後で構成できます。このためには、システム変数 ORACLE\_OEM\_CLASSPATH が、インストールした Java Access Bridge の各ファイルを指すように設定する必要があります。

### B.2.2.1 Windows 2000、Windows XP または Windows Server 2003 の場合の構成

Windows 2000、Windows XP または Windows 2003 で Access Bridge を使用できるように Oracle コンポーネントを構成するには、次の手順に従います。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「システム」を選択し、Windows システムのコントロール・パネルを表示します。
2. 「詳細」タブを選択します。
3. 「環境変数」をクリックします。
4. 「システム環境変数」リストの下にある「新規」をクリックして、「新しいシステム変数」ダイアログを表示します。
5. 「変数名」フィールドに、「ORACLE\_OEM\_CLASSPATH」と入力します。
6. 「変数値」フィールドに、jaccess.jar および access-bridge.jar へのフルパスを入力します。

2つのパスを区切るにはセミコロンを使用します。引用符やスペースは使用しないでください。たとえば、JRE 1.4.2 がデフォルトの場所にインストールされている場合、設定は次のようになります。

```
d:¥oraclehome1¥bihome1¥jre¥1.4.2¥lib¥ext¥jaccess.jar;d:¥oraclehome1¥bihome1¥jre¥1.4.2¥lib¥ext¥access-bridge.jar
```

7. 「OK」をクリックします。





---

## 非対話型インストールと サイレント・インストール

この付録では、Oracle Business Intelligence の非対話型インストールとサイレント・インストールについて説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- 第 C.1 項「非対話型インストール」
- 第 C.2 項「サイレント・インストール」
- 第 C.3 項「インストール前」
- 第 C.4 項「レスポンス・ファイルの作成」
- 第 C.5 項「インストールの開始」
- 第 C.6 項「インストール後」
- 第 C.7 項「サイレント・モードを使用した削除」

## C.1 非対話型インストール

Oracle Business Intelligence の非対話型インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを指定することによって実行します。レスポンス・ファイルは、インストーラに指定するインストール設定を含むテキスト・ファイルです。

インストーラは、このレスポンス・ファイルに格納されている変数とパラメータ値を使用して、一部またはすべてのインストーラ・ユーザー・プロンプトに応答します。画面表示があり、レスポンス・ファイルがすべてのインストーラ・プロンプトに回答していない場合は、インストール中に情報の入力が必要な場合もあります。

Solaris 上に初めて Oracle Business Intelligence をインストールする場合は、インストールを開始する前に `oraInst.loc` ファイルを作成する必要があります。ファイル作成の詳細は、[第 C.3.1 項「Solaris でのインストール前作業」](#)を参照してください。Oracle Business Intelligence をインストールした後は、`root.sh` スクリプトを実行する必要があります。`root.sh` スクリプトによって環境変数の設定が検出され、ローカルの `bin` ディレクトリへのフルパスが入力可能になります。

Windows 上に初めて Oracle Application Server をインストールする場合は、レジストリ・キーを作成する必要があります（詳細は、[第 C.3.2 項「Windows でのインストール前作業」](#)を参照）。

インストール時に特定の画面を監視する場合は、Oracle Business Intelligence の非対話型インストーラを使用します。

また、Oracle Business Intelligence のインストールをリモートの位置からコマンドラインを使用して実行する場合は、非対話型インストールを使用できます。

## C.2 サイレント・インストール

Oracle Business Intelligence のサイレント・インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを指定し、コマンドラインで `-silent` フラグを指定することによって実行します。レスポンス・ファイルはテキスト・ファイルです。

インストーラは、このレスポンス・ファイルに格納されている変数とパラメータ値を使用して、すべてのインストーラ・プロンプトに回答します。レスポンス・ファイルには、すべてのインストーラ・プロンプトに対する応答を格納します。サイレント・インストールには、画面の表示がありません。

Solaris 上に初めて Oracle Application Server をインストールする場合は、インストールを開始する前に `oraInst.loc` ファイルを作成する必要があります。ファイル作成の詳細は、[第 C.3.1 項「Solaris でのインストール前作業」](#)を参照してください。Oracle Application Server をインストールした後は、`root.sh` スクリプトを実行する必要があります。`root.sh` スクリプトによって環境変数の設定が検出され、ローカルの `bin` ディレクトリへのフルパスが入力可能になります。

Windows 上に初めて Oracle Application Server をインストールする場合は、レジストリ・キーを作成する必要があります（詳細は、[第 C.3.2 項「Windows でのインストール前作業」](#)を参照）。

複数のコンピュータに類似したインストールが存在する場合は、Oracle Business Intelligence のサイレント・インストールを使用してください。また、Oracle Business Intelligence のインストールをリモートの位置からコマンドラインを使用して実行する場合は、サイレント・インストールを使用してください。サイレント・インストールでは画面表示やユーザーによる入力がないため、Oracle Business Intelligence のインストールを監視する必要はありません。

## C.3 インストール前

この項では、必要になる可能性のあるインストール前の作業について説明します。

### C.3.1 Solaris でのインストール前作業

使用しているコンピュータ上に `oraInst.loc` ファイルが存在しない場合は、Oracle Application Server のサイレント・インストールと非対話型インストールを開始する前に、`oraInst.loc` ファイルを作成する必要があります。

`oraInst.loc` ファイルは通常、`/var/opt/oracle/` ディレクトリに格納されます。このファイルは、インストール時に Oracle Universal Installer によって使用されます。

root ユーザーで、`oraInst.loc` ファイルを `/var/opt/oracle/` ディレクトリ内に作成します。oracle グループは、インストールを実行するグループです。

`orainst.loc` ファイルに、次のテキスト行を入力します。

```
inventory_loc=<full_path>/oraInventory
```

たとえば、`inventory_loc=/export/home/bi/oraInventory` などです。

`oraInst.loc` ファイルは、インベントリ・ファイルの `inventory_loc` の場所を指定します。Oracle ホームに `oraInst.loc` ファイルが存在しない場合は、そのファイルに oracle グループに対する読取りおよび書込み権限があるかどうかを確認してください。

注意: Solaris 上に非対話型モードまたはサイレント・モードでインストールするには、環境変数 `TMP=` (`TMP=/export/home/bi/tmp` など) を設定する必要があります。

### C.3.2 Windows でのインストール前作業

使用しているコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールしていない場合は、次のレジストリ・キー値を作成する必要があります。

- `HKEY_LOCAL_MACHINE / SOFTWARE / Oracle / em_loc = <ORACLE_HOME>`
- `HKEY_LOCAL_MACHINE / SOFTWARE / Oracle / inst_loc = OUI_Inventory_Location¥Inventory`

`ORACLE_HOME` には、インストール先のフルパスを指定します。

`OUI_Inventory_Location` には、Oracle Universal Installer ファイルの場所を指定します。次に例を示します。

```
C:¥Program Files¥Oracle¥Inventory.
```

## C.4 レスポンス・ファイルの作成

サイレント・インストールまたは非対話型インストールの前に、インストール・パックの Disk 1 にあるレスポンス・ファイルのテンプレートを使用して、実行するインストール固有の情報を提供する必要があります。

Oracle Business Intelligence CD-ROM の `/Disk1/stage/Response` ディレクトリにある、レスポンス・ファイルのテンプレート

`oracle.business.intelligence.as.BIServices.rsp` を開き、テキスト・エディタを使用して変更します。

ヒント: この `oracle.business.intelligence.as.BIServices.rsp` ファイルを、必要に応じて異なるファイル名 (`my_responses.rsp` など) で保存すると、インストールのレスポンス・ファイルとして使用できます。

レスポンス・ファイルのパラメータの定義は、レスポンス・ファイル自体に記述されています。

レスポンス・ファイルでは、次の変数に値を指定する必要があります。

- COMPONENT\_LANGUAGES
  - FROM\_LOCATION
  - LOCATION\_FOR\_DISK1
  - LOCATION\_FOR\_DISK2
  - ORACLE\_HOME
  - ORACLE\_HOME\_NAME
  - oracle.iappserver.instance:szl\_InstanceInformation
  - UNIX\_GROUP\_NAME (Solaris へのインストールの場合のみ)
  - SHOW\_ROOTSH\_CONFIRMATION (Solaris へのインストールの場合のみ)
- 注意:** この値は false に設定する必要があります (つまり、SHOW\_ROOTSH\_CONFIRMATION=false)。

次の点に注意してください。

- レスポンス・ファイルを適切に構成しないでサイレント・インストールを試みると、インストールは失敗します。
- ブール型パラメータには、true または false のどちらかを指定することをお勧めします。

## C.4.1 レスポンス・ファイルの例

次に、Oracle Business Intelligence のサイレント・インストールで使用するレスポンス・ファイルの抜粋を示します。

```
RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0
UNIX_GROUP_NAME="oracleqa"
FROM_LOCATION="/home/BI_1012_Install/Disk1/stage/products.xml"
ORACLE_HOME="/home/BI_1012"
ORACLE_HOME_NAME="BI_1012"
SHOW_SPLASH_SCREEN=true
SHOW_WELCOME_PAGE=false
SHOW_COMPONENT_LOCATIONS_PAGE=false
SHOW_CUSTOM_TREE_PAGE=false
SHOW_SUMMARY_PAGE=false
SHOW_INSTALL_PROGRESS_PAGE=true
SHOW_REQUIRED_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_ROOTSH_CONFIRMATION=false
SHOW_END_SESSION_PAGE=false
SHOW_RELEASE_NOTES=false
SHOW_EXIT_CONFIRMATION=false
NEXT_SESSION=false
NEXT_SESSION_ON_FAIL=false
SHOW_DEINSTALL_CONFIRMATION=false
SHOW_DEINSTALL_PROGRESS=false
ACCEPT_LICENSE_AGREEMENT=true
TOPELVEL_COMPONENT={"oracle.business.intelligence.as","10.1.2.0.0"}
DEINSTALL_LIST={"oracle.business.intelligence.as","10.1.2.0.0"}
DEPENDENCY_LIST={"oracle.java.j2ee.core:10.1.2.0.0"}
COMPONENT_LANGUAGES={"en","ko"}
```

## C.5 インストールの開始

インストーラでレスポンス・ファイルを使用するには、インストーラの起動時に、使用するレスポンス・ファイルの場所をパラメータとして指定します。

Solaris で非対話型インストールを実行するには、次のように入力します。

```
prompt> setenv DISPLAY ias_hostname:0.0
prompt> ./runInstaller -responseFile absolute_path_and_filename
```

Windows で非対話型インストールを実行するには、次のように入力します。

```
prompt> setup.exe -responseFile absolute_path_and_filename
```

たとえば、Windows では次のようになります。

```
D:\Installer\Disk1> setup.exe -responseFile
\Disk1\stage\response\oracle.business.intelligence.as.BIServices.rsp
```

Solaris で（パラメータ `-silent` を使用して）サイレント・インストールを実行するには、次のように入力します。

```
prompt> ./runInstaller -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

Windows で（パラメータ `-silent` を使用して）サイレント・インストールを実行するには、次のように入力します。

```
prompt> setup.exe -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

たとえば、Windows では次のようになります。

```
D:\Installer\Disk1> setup.exe -silent -responseFile
\Disk1\stage\response\oracle.business.intelligence.as.BIServices.rsp
```

---

**注意：** Oracle Net Configuration Assistant (NetCA) 画面は、非対話型インストールの実行時もインストールの構成フェーズで引き続き表示されます。NetCA 画面は、Oracle Universal Installer のウィンドウまたはスプラッシュ画面の背後で表示されている場合もあります。応答待ちの NetCA 画面に対し、インストールが途中で停止したと誤認してしまう場合があります。インストールを続行するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Universal Installer のウィンドウを移動して、NetCA ダイアログを前面に表示します。
  2. 「次へ」をクリックします。
  3. 「終了」をクリックします。
- 

## C.6 インストール後

Solaris の場合、非対話型インストールとサイレント・インストールの成功または失敗は、`installActions<time_stamp>.log` ファイルに記録されます。また、サイレント・インストールでは `silentInstall<time_stamp>.log` ファイルが作成されます。これらのログ・ファイルは、インストール時に `oraInventory` ディレクトリ内に作成されます。

Windows の場合、非対話型インストールとサイレント・インストールの成功または失敗は、`installActions.log` ファイルに記録されます。また、サイレント・インストールでは `silentInstall.log` ファイルが作成されます。これらのログ・ファイルは、インストール時に `oraInventory\Logs` ディレクトリ内に作成されます。

インストールに成功すると、`silentInstall<time_stamp>.log` ファイルに次の行が記録されます。

```
The installation of Oracle Business Intelligence 10g was successful.
```

## C.7 サイレント・モードを使用した削除

インストールに使用したレスポンス・ファイルに、サイレント・モードによる削除のパラメータを追加すると、サイレント・モードを使用して **Oracle Business Intelligence** を削除できます。インストール用のレスポンス・ファイルに次のパラメータを追加します。

```
REMOVE_HOMES={"<ORACLE_HOME to be removed>"}
```

サイレント・モードを使用した削除を実行するには、コマンドの入力時に、パラメータ `-deinstall` を次のように使用します。

Solaris の場合

```
prompt> ./runInstaller -silent -deinstall -responseFile absolute_path_and_filename
```

Windows の場合

```
E:\> setup.exe -silent -deinstall -responseFile absolute_path_and_filename
```

---

---

# 索引

## A

---

Administrators グループ, 3-16

## B

---

Business Intelligence  
コンポーネントの概要, 1-2

## C

---

CD-ROM  
ハード・ドライブへのコピー, 3-30  
CLASSPATH 環境変数, 3-17

## D

---

Discoverer Plus  
概要, 1-2  
Discoverer Plus OLAP  
optimizer\_features\_enable の設定, 2-6  
Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポート  
レット  
概要, 1-3  
Discoverer Viewer  
概要, 1-2  
DISPLAY 環境変数, 3-18  
DVD  
ハード・ドライブへのコピー, 3-30

## E

---

/etc/hosts ファイル, 3-20  
/etc/system ファイル, 3-3

## G

---

groups コマンド, 3-16

## H

---

hosts ファイル, 3-20  
httpd.conf ファイル, 3-12

## I

---

installActions.log, C-5  
installActions.log ファイル, C-5

## IP

複数の IP アドレスを持つコンピュータへのインス  
トール, 3-22

## J

---

Java Access Bridge  
インストール, B-2  
インストール時の障害支援技術の使用, 1-5  
インストール済の Oracle コンポーネントで使用する  
ための設定, B-2  
概要, B-2  
構成, B-3  
使用する Oracle コンポーネントの構成, B-3

## L

---

LD\_LIBRARY\_PATH 環境変数, 3-17

## O

---

oinstall グループ, 3-14  
optimizer\_features\_enable の設定, 2-6  
Oracle Business Intelligence  
インストール, 4-3  
再インストール, 5-3  
削除, 5-2  
Oracle Business Intelligence の再インストール, 5-3  
Oracle Business Intelligence の削除, 5-2  
Oracle HTTP Server  
静的ポートの構成, 3-12  
Oracle Universal Installer  
前提条件チェック, 3-37  
ORACLE\_HOME 環境変数, 3-17, 3-20  
ORACLE\_SID 環境変数, 3-17, 3-20  
OracleAS Web Cache  
静的ポートの構成, 3-12  
必要なカーネル・パラメータ, 3-3  
Oracle データベース  
Oracle Business Intelligence のインストール, 1-4  
Oracle ホーム  
考慮事項, 1-3  
oracle ユーザー, 3-15  
oraInst.loc ファイル, 3-15  
作成 (非対話型インストール), C-3  
oraInventory ディレクトリ, 3-14

## P

---

PATH 環境変数, 3-17, 3-20  
pcAnywhere, 3-35  
pkginfo コマンド, 3-3  
portlist.ini ファイル, 3-10  
.profile ファイル, 3-17

## S

---

silentInstall.log, C-5  
Solaris  
    インストーラの起動, 4-3  
    オペレーティング・システム要件, 2-4  
Solaris Management Console  
    グループの作成, 3-14  
staticports.ini ファイル, 3-9  
    作成, 3-10  
    フォーマット, 3-9  
su コマンド, 3-17

## T

---

TEMP 環境変数, 3-20  
TEMP ディレクトリ, 3-20  
TMP 環境変数, 3-18  
/tmp ディレクトリ, 3-18  
TNS\_ADMIN 環境変数, 3-18  
tnsnames.ora ファイル, 3-18  
TNS 名, 4-6

## V

---

/var/opt/oracle ディレクトリ  
    oraInst.loc ファイル, 3-15  
VNC, 3-35

## W

---

Windows  
    インストーラの起動, 4-2  
    オペレーティング・システム要件, 2-3  
Windows システム・ファイル (wsf.exe), 3-5  
wsf.exe, 3-5

## あ

---

アクセシビリティ・ソフトウェア、Java Access  
    Bridge, B-1  
インストーラ  
    Solaris での起動, 4-3  
    Windows での起動, 4-2  
    概要, 1-6  
    使用するディレクトリ, 1-6  
    前提条件チェック, 1-7  
インストール  
    Java Access Bridge, B-2  
    Oracle Business Intelligence, 4-3  
    インストール後の作業, 4-15  
インストール後の作業, 4-6  
    コンポーネント固有, 4-11  
インストールに関するトラブルシューティング, A-2  
インストール前の作業

Oracle Business Intelligence, 1-4  
    コンポーネント固有, 1-5  
インベントリ・ディレクトリ  
    グループの作成, 3-14  
    場所の確認, 3-15  
エフェメラル・ポート, 3-6  
オペレーティング・システム・グループ, 3-14  
    groups コマンド, 3-16  
    oinstall グループ, 3-14  
    作成, 3-14  
オペレーティング・システム・パッケージ, 3-2  
    pkginfo コマンド, 3-3  
オペレーティング・システム・ユーザー, 3-15, 3-16  
    Administrators グループ, 3-16  
    groups コマンド, 3-16  
    oracle ユーザー, 3-15  
オペレーティング・システム要件  
    Solaris, 2-4  
    Windows, 2-3  
    概要, 2-3

## か

---

カーネル・パラメータ, 3-3  
    /etc/system ファイル, 3-3  
カスタム・ポート  
    「静的ポート」を参照  
環境変数, 3-17, 3-19  
    CLASSPATH, 3-17  
    DISPLAY, 3-18  
    LD\_LIBRARY\_PATH, 3-17  
    ORACLE\_HOME, 3-17, 3-20  
    ORACLE\_SID, 3-17, 3-20  
    PATH, 3-17, 3-20  
    .profile ファイルでの設定, 3-17  
    su コマンド, 3-17  
    TEMP, 3-20  
    TMP, 3-18  
    TNS\_ADMIN, 3-18  
    設定, 3-20  
グループ (オペレーティング・システム)  
    Administrators グループ, 3-16  
グループの作成  
    インベントリ・ディレクトリ, 3-14  
言語サポート, 4-15, A-3  
コンポーネント  
    カスタム・ポート番号を割り当てる方法, 3-9  
コンポーネント固有のインストール後の作業, 4-11  
コンポーネントの起動, 4-12

## さ

---

サイレント・インストール, C-2  
障害支援技術  
    Java Access Bridge (インストール時), 1-5  
情報  
    インストール時に必要, 1-5  
静的ポート, 3-9  
    Oracle HTTP Server, 3-12  
    OracleAS Web Cache, 3-12  
    機能しない場合, 3-11  
    例, 3-13  
前提条件チェック, 3-37



ソフトウェア要件  
Oracle Business Intelligence のその他の要件, 2-6

## た

---

チェック  
    インストーラによる前提条件, 1-7  
追加の言語サポート, 4-15, A-3  
追加のフォント, 4-15, A-3  
データベース要件  
    optimizer\_features\_enable の設定, 2-6  
    Oracle Business Intelligence, 2-5  
デフォルトのポート番号, 3-8  
トラブルシューティング  
    不足フォント, 4-15, A-3  
ドキュメント  
    CD-ROM から表示, 4-13  
    インストールおよびアクセス, 4-13

## な

---

ネットワーク関連トピック, 3-21  
    ハード・ドライブからのインストール, 3-30  
    マルチホーム・コンピュータへのインストール  
        , 3-22  
    リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインス  
        トール, 3-32

## は

---

ハード・ドライブからのインストール, 3-30  
ハードウェア要件  
    Oracle Business Intelligence, 2-2  
    Solaris での最小要件, 2-2  
    Windows での最小要件, 2-2  
ハード・ドライブへの CD-ROM/DVD のコピー  
    , 3-30  
パッケージ  
    「オペレーティング・システム・パッケージ」を参照  
パラメータ、カーネル, 3-3  
非対話型インストール, C-1, C-2  
    インストール前, C-3  
    ログ・ファイル, C-5  
フォント  
    Albany フォント, 4-15  
    インストール後のインストール, 4-15, A-3  
    不足フォントに関するトラブルシューティング  
        , 4-15, A-3  
複数インストール  
    実行, 1-4  
ブラウザ要件  
    Oracle Business Intelligence, 2-6  
ポート, 3-6  
    エフェメラル, 3-6  
    静的ポート, 3-9  
    デフォルトのポート番号の使用, 3-8  
    ポート番号の選択, 3-10  
ポート番号, 4-7

## ま

---

マルチディメンション分析  
    準備, 4-8

マルチホーム・コンピュータ、インストール, 3-22

## や

---

ユーザー (オペレーティング・システム)  
    「オペレーティング・システム・ユーザー」を参照  
要件  
    後でネットワークから切断するコンピュータ, 3-24  
    オペレーティング・システム・パッケージ, 3-2  
    カーネル・パラメータ, 3-3  
    環境変数, 3-17, 3-19  
    マルチホーム・コンピュータ, 3-22

## ら

---

リモート・インストール, 3-32  
リモート・コントロール・ソフトウェア, 3-35  
リリース・ノート, 1-4, 4-13  
リレーショナル分析  
    準備, 4-10  
レスポンス・ファイル, C-2  
    指定, C-5  
ローカル・オペレーティング・システム・ユーザー  
    作成, 3-15  
ログ・ファイル  
    非対話型インストール, C-5  
ロケール  
    設定, 1-4

